

第二部  
特  
論

# 第一章 平安期浄土教儀礼の世界

## 1 はじめに

平安中期以降、浄土教の思想的発展と流布に伴い各地で来迎会（迎講・迎撰会とも）が厳修された。中世に始修された當麻寺の来迎会は、現在でも「當麻寺聖衆来迎練供養会式」と称して、例年盛大に挙行されている。それは黄金の菩薩面と華麗なる装束によって極楽の聖衆に扮して来迎の様相を再現するもので、生身仏信仰とも関わる野外神聖仮面劇と言え、奈良県のみならず全国的にその名を知られる年中行事である。本稿は浄土信仰を具現化する儀礼を（浄土教儀礼）という範疇で把握し<sup>1</sup>、叡山浄土教における「観仏」の実践（観想念仏・観仏三昧）と、そこで感得される「見仏」という神秘的宗教体験（三昧発得）への希求を精神的基盤として、来迎会が生成する過程を跡付けんとする試論である。

## 2 浄土教と儀礼

日本浄土教史において平安鎌倉時代は、その思想と儀礼の最大の発達期である。宗教は思想だけでは決して完結しない。思想（精神）の現実的具象化としての宗教儀礼が、常に要請されることは周知の所である。例えば密教などは正に儀礼仏教と呼称するに足るものだが、浄土教（浄土信仰）もまた特色ある種々の儀礼を創出しているのである。日本浄土教が中国唐代の念仏僧たる善導の多大なる思想的影響下にあることは、もはや贅言を要しまい。法然は「偏に善導一師に依るなり」とまで善導への傾倒ぶりを露わにし、親鸞も善導を浄土七高僧に数えている如くである。ただし五部九卷と称せられる善導の著作群は、その殆どが思想書である以前に儀礼書であるという事実を等閑に付してはならない。

観想念仏と懺悔の法則を明かした『観念法門』、阿弥陀仏を讃嘆・礼拝する礼讚儀礼の次第と、そこで詠唱する流麗なる讚偈をまとめた『般舟讚』『法事讚』『往生礼讚偈』は言わずもがな儀礼書である。そして思想書・教義書とされる『観無量寿経疏』もまた、経典を講説するという一座の儀礼、即ち講経儀礼の産物であり、故に讚偈が多数文中に挿入されているのである<sup>2</sup>。これら善導の集記は、源信の『往生要集』や法然の『選択本願念仏集』など多くの和製聖教に引用せられ、浄土思想の体系化に供せられたのであるが、本来、善導の念仏思想とは儀礼を通じて流布されるものであり、少なくとも儀礼という実践的領域と無関係にはあり得なかつたと言つてよい。そしてこの場合、儀礼とは思想の伝達媒体<sup>メディア</sup>の謂いに他ならない。

特に『往生礼讚偈』は、浄土教における儀礼の重要性を、日本史上の著名な一事件において我々に明示しているとは言えまいか。世にいう「建永の法難」がそれである。

（法然）  
上人の門徒、住蓮・安楽等のともがら、東山鹿谷にして別時念仏をはじめ、六時礼讚をつとむ。さだまれるふし拍子なく、をのをの哀歎悲喜の音曲をなすさま、めずらしくたうとかりければ、聴衆おほくあつまりて、発心する人もあまたきこえしなかに、（後鳥羽上皇）  
御所の御留守の女房出家の事ありける程に、還幸ののち、あしさまに讒し申人やありけん。おほきに逆鱗ありて、翌年建永二年二月九日、住蓮・安楽を庭上にめされて、罪科せらるる…

『法然上人行状絵図』卷三十三は、このように伝えている。「六時礼讚」とは、善導作の『往生礼讚偈』を昼夜六時に唱和する代表的な浄土教儀礼である。この時期、都の貴族社会で人気を博しており、安楽・住蓮といった能声の僧が修する礼讚儀礼は、念仏信仰を喚起する〈声の力〉が存分に備わった魅惑的な布

教法として、専修念仏教団の躍進を支えていた一面が垣間見える。熊野詣の留守中に、この礼讃儀礼によって発心した女房が出家を遂げたことに後鳥羽院は激怒した。安楽・住蓮らを死罪に処し、師たる法然も責任を問われ流罪となり、さらにこの他に親鸞や隆寛・幸西ら、法然門下の主要なメンバーも流罪判決を受けるに至る。

この法難の本質を、法然の専修念仏への思想弾圧に措定するか、または門下と女房との間に密通があったように譏言された結果、スキヤングラスな教団として罰せられたという風紀問題と捉えるか、従来見解が分かれてきた。ただいずれにせよ法然門下による善導系礼讃儀礼の実修が、法難の直接的なトリガーになったと言えるのであり、法然教団は〈詠唱念仏儀礼集団〉という相貌をも有していたと評せよう。このように浄土教儀礼に注目する時、日本におけるその最大の芸術的精華こそが来迎会であることに恐らく異論はなからう。そして来迎会の成立を論ずるためには、先ず叡山天台における常行三昧の実践世界へと遡及しなくてはならない。

### 3 円仁と唐代の礼讃儀礼

#### (1) 常行三昧から不断念仏へ

阿弥陀浄土の信仰は既に奈良時代には、悔過儀礼などを通して流通を見せているが、後世に及ぼしたその広範な社会的影響力において日本浄土教史上、逸するこのできない儀礼が、平安前期に始行された比叡山の不断念仏（「山の念仏」とも）である。不断念仏は叡山における浄土教発展の中軸、あるいは日本浄土教の主流をなす叡山浄土教の起源であるとも位置付けられている。『慈覚大師伝』仁寿元年（八五一）条の記事によれば、「移<sub>二</sub>五台山念仏三昧之法<sub>一</sub>、伝<sub>二</sub>授諸弟子等<sub>一</sub>、始修<sub>二</sub>常行三昧<sub>一</sub>」とあり、円仁が没した翌年の貞観七年（八六五）条には「初始<sub>二</sub>大師本願不断念仏<sub>一</sub>」とある。入唐した円仁は五台山の念仏三

昧の法を移して常行三昧を始修し、円仁没後には彼の発願による不断念仏が行われたということになるが、この常行三昧と不断念仏の関係について確認しておきたい。

そもそも常行三昧とは、天台智顛の『摩訶止観』卷二上に説かれる四種の修行法たる四種三昧（常坐三昧・常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧）の一つである。眼前に十方諸仏の顕現を感得する行法を説く經典である『般舟三昧経』の所説に基づき、「唯専<sub>二</sub>行旋<sub>一</sub>。九十日為<sub>二</sub>一期<sub>一</sub>」とあるごとく、道場に安置された阿弥陀仏の周囲を九十日間、ひたすらに遶る行である。

九十日身常行無<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>。九十日口常唱<sub>二</sub>阿弥陀仏名<sub>一</sub>無<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>。九十日心常念<sub>二</sub>阿弥陀仏<sub>一</sub>無<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>……唱念相繼無<sub>二</sub>休息時<sub>一</sub>。若唱<sub>二</sub>弥陀<sub>一</sub>即是唱<sub>二</sub>十方仏<sub>一</sub>功德等。但專以<sub>二</sub>弥陀<sub>一</sub>為<sub>二</sub>法門主<sub>一</sub>。挙<sub>二</sub>要言<sub>一</sub>之。歩歩声声念唯在<sub>二</sub>阿弥陀仏<sub>一</sub>。

休むことなく身は常に行道し続ける故に常行三昧と称するが、無論ただ行道するのみではない。口には常に弥陀の名号を唱え、心（意）では常に阿弥陀仏を念じるのであり、

念<sub>二</sub>西方阿弥陀仏<sub>一</sub>。去<sub>レ</sub>此十万億仏刹。在<sub>二</sub>宝地宝池宝樹宝堂<sub>一</sub>。衆菩薩中  
央<sub>二</sub>坐説<sub>レ</sub>経。三月常念<sub>レ</sub>仏。云何念。念<sub>二</sub>三十二相<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>足下千輻輪相<sub>一</sub>。  
一一逆縁念<sub>二</sub>諸相乃至無見頂<sub>一</sub>……

と説かれる。極楽浄土の荘嚴と阿弥陀仏の相好を観想（瞑想）イメージトレイニングするのであり、身（歩）・口（声）・意（念）の三業が全て阿弥陀仏へと專注される。ただし智顛の説く常行三昧は、その他の三種の三昧行と同じく、

あくまでも空・仮・中の三諦に通達することで現世成仏（得悟）を実現せんとする止観の実践法であって、死後の極楽往生にその目的がある訳ではなかった。さて常行三昧を修する堂宇を常行堂という。半行半坐三昧としての法華三昧を修する法華堂と共に、比叡山の西塔に現存しており、常行三昧は中断期を挟みながらも戦後に復興され現在なお実践されている。阿弥陀仏のヴィジョンを感得する見仏体験（三昧発得）に至るまで中断は許されないという苦行である<sup>5</sup>。親鸞もまた、法然門下に投ずる以前は、叡山横川の常行堂にて常行三昧を修する「堂僧」であった。

しかしこの常行三昧は、貴族社会に遍く知られた諸寺の代表的仏事を解説する『三宝絵』（九八四年）の巻下では、止観行としての本来の形態とは異なって記録されている。「比叡の不断念仏」の項には次のようにある。

念仏ハ慈覚大師ノモロコシヨリ伝テ、貞観七年ヨリ始行ヘルナリ。四種三昧ノ中ニハ、常行三昧トナツク。仲秋ノ風スズシキ時、中旬ノ名月ナルホド、十一日ノ暁ヨリ十七日ノ夜ニイタルマデ、不断ニ令行ナリ。故結願夜修行三七日也。唐ニハ三七日行ト云、我山ニハ三所ニ分テ、一七日行也。合三七日也云々。身ハ常ニ仏ヲ廻ル。身ノ罪コトゴトクウセヌラム。口ニハ常ニ経ヲ唱フ。口ノトガ皆キエヌラム。心ハ常ニ仏ヲ念ズ。心ノアヤマチスベテツキヌラム。阿弥陀経云、若善心ヲオコセル善男女アリテ、阿ミダ仏ノ名号ヲ聞持チテ、若一日、若二日、若三日、乃至七日、一心不乱、臨終ノ時ニ心顛倒セズシテ、即極楽ニ生ル。七日ヲカギレル事ハ、此経ニヨテ也。

ここでは円仁（七九四～八六四）が唐より伝えた不断念仏が、そのまま常行三昧であるとされている。つまり前掲『慈覚大師伝』に見える仁寿元年条の「常

行三昧」と貞観七年の「不断念仏」は、同じものを指していることになる。確かにここでいう不断念仏も三業を阿弥陀仏に専注するものであるようだが、いわゆる常行三昧とは実修期間が異なり九十日から七日へと大幅に短縮されており、口に唱えるのも名号以上に經典（『阿弥陀経』）が重視されている。

そしてさらに注意すべきは、常行三昧＝不断念仏の実態が「五台山念仏三昧の法」（『慈覚大師伝』）であると理解できることだ。「五台山念仏三昧の法」は既に論じられているように、「後善導」と尊称された唐代の浄土教家として名高い五台山竹林寺の法照が、『五会法事讃』という儀礼次第書において明らかにした浄土往生を欣求する法会を示唆する。日本天台宗の開祖たる最澄は、叡山に四種三昧を行ずる道場として四種三昧院の建立を發願しており、『叡山大師伝』弘仁九年（八一九）条によれば、入唐以前に円仁は最澄の命を受け常坐三昧堂を建立している。しかし常行三昧堂の建立時期は、円仁の帰朝した承和十五年（八四八）から常行三昧始行の仁寿元年までの間に限定されることとなるようであり、常行三昧は最澄存命中には実践されず、それは円仁によって純粋な天台宗的止観行とは異なる内実をもって始行されたとも見做されている（この点はさらに後述する）。

では、「五台山念仏三昧の法」<sup>6</sup> 『五会法事讃』とは、具体的にどのような宗教儀礼であろうか。『五会法事讃』は善導の影響下に成立した礼讃儀礼の次第書であり、長安で隆盛したという。阿弥陀仏と浄土への讃偈で満たされた儀礼であるが、讃偈に五会念仏が付随する点に顕著な特徴が認められる。五会念仏とは、音階スケールの高低テンポ速度の緩急を異にする五種の念仏の詠唱（声明）であり、低・緩から高・急へと段階的に音程が移行する。豊かな音楽性を備えた浄土教儀礼である五会念仏の美的情緒は、儀礼に集会した人々の身体に強く作用し宗教的陶醉（法悦）へと導くものであったに相違ない<sup>7</sup>。だが、先ず問うておくべきは、円仁がなぜ常行三昧を代えるに五会念仏の儀礼を以ってしたかというこ

とであり、その思想的根柢は何かということである。そしてそれは、「観仏」「見仏」、即ち仏との感応や交感という本稿の問題意識に直結してくる。

(2) 五会念仏という儀礼

円仁に学んだ安然是『金剛界大法対受記』で、密教儀礼における声明について論じる際、五台山の念仏に言及している。

昔斯那国法道和尚、現身往極楽国。親聞水鳥樹林念仏之声、以伝斯那。慈覚大師入五台山学其音曲以伝叡山。

円仁が伝えた五台山の念仏は、かつて法道が生身にして極楽に詣で、浄土の環境が生み出す自然なる念仏の音声そのままに、現世へと齎したものに他ならないというのだ。この法道が法照の訛伝であることは明らかだろう。事実、この五台山念仏縁起説話は、法照自身が子細に語る所なのだ。法照による五会念仏の儀礼書(『五会法事讚』)は、二種存在している。『浄土五会念仏誦経観行儀』(上・中・下の三巻)と『浄土五会念仏略法事儀讚』(本・末を合わせて一巻)であり、前者は広本・後者は略本という関係にあつて、儀礼の規模によつて使い分けられるのである。広本は十門に組織された長大な儀礼であつたようだが、上巻は散逸し中・下巻のみ伝来している。

その中巻「第十廻向発願門」には、法照が阿弥陀仏から受けた啓示「神秘体験が克明に記述されている。

此五会念仏誦経法事観門。実非自意……照以永泰二年四月十五日。於南岳弥陀台……每夏九旬。常入般舟念仏道場……至第二七日夜……正念仏時。有一境界。忽不見道場屋舍。唯見五色光明雲台。弥満法界。忽見一金道。從自面前。徹至西方極楽世界。須臾即

至阿弥陀仏所。頭面作礼阿弥陀仏所。頭面作礼。阿弥陀仏歡喜微笑。

法照は永泰二年(七六六)に、聖地たる南岳衡山の弥陀台にて般舟三昧を修行し、十四日目の夜に感応を得る。仏を念じているさ中、突如として現実の光景が消え去り、五色の光明が全世界を満たしてゆくという荘重なる靈相を目の当たりにする。そして出現した黄金の道の先に極楽浄土と阿弥陀仏を感見するのである。

以下、法照と阿弥陀仏との問答が綴られる。一切衆生救済の妙法を願求する法照に、阿弥陀仏は五会念仏の法を伝授するのである。

仏言。有一無備梵音五会念仏法門……如是無量寿経説。宝樹五音声。即斯五会仏声是。以是因縁。便能称念仏名。報尺定生我国……即此一生。定超苦海。登不退転。速具六波羅蜜一切種智。疾得成仏……言訖。彼仏国界、仏菩薩衆、水鳥樹林、皆悉五会念仏誦経。法照粗記少分……阿弥陀仏言。汝但依此五会念仏誦経之時。我此国土水鳥樹林。諸菩薩衆。無量音楽。於虚空中。一時俱和念仏之声……言訖忽然還見自身。而在道場。

阿弥陀仏が法照に伝授した五会念仏とは、浄土の五つの音声であり、五会念仏を唱えるならば、決定して浄土に往生し、仏智を具足して速疾に成仏を遂げるのだという。阿弥陀仏がそう告げると、極楽世界の菩薩や水鳥樹林は、皆同音に五会念仏を唱和したという。法照はその靈妙な光景を即座に略記したようである。さらに阿弥陀仏は、もし法照がこの極楽の音声たる五会念仏を現世で修するならば、浄土の聖衆と水鳥樹林の奏でる音楽も遙か虚空に響き渡り、地上の人々の念仏の声と共鳴すると語る。浄土が現世の空中に現出しているとも解

せる筆致である。五会念仏の儀礼空間では、現世の（声）と浄土の（声）の重層が実現するのであり、そこでは現世と浄土という異なる存在領域の同調と共振の感覚が惹起される。

広本はこれに続けて、「今此土像末凡夫。見仏之人。教在何証。」と問いかけ、『観無量寿経』『華嚴経』『禅秘要経』『涅槃経』等を教証として、像末濁世の罪惡の凡夫にも見仏が可能であることを具に論じる。歴代の浄土教の祖師たちは念仏三昧によって見仏体験を得たのであり、聖教・伝記の明文により「豈非凡夫修念仏三昧。得見彼極樂世界」と、凡夫の見仏も念仏三昧によってこそ可能なのだと説く。要するに五会念仏の儀礼は、念仏三昧の行であると位置づけられているのであって、死後の往生もさることながら、現世における「見仏」という神秘体験（三昧発得）に強く動機づけられたものであることが窺える。親しく阿弥陀仏から面授された儀礼であれば、それも至当であろう。この広本は日本に伝来しておらず、円仁の『入唐新求聖教目錄』には略本の名のみ見えるが、法照の体験した靈瑞が円仁によって日本にも伝承されたことは、先の安然の記録が裏付けている。

五会念仏という儀礼の本質を見仏に措定することは、決して不当な判断ではない。そもそも広本の具名は『浄土五会念仏誦経観行儀』であり、観想行を説くものでもある。散逸した上巻にはそれが記述されていたはずである。そして日本に将来された略本冒頭の序文にも、儀礼の詳細を説く中に

惣須威儀齊整端坐合掌專心觀佛……惣須發三至誠心端坐合掌觀想阿彌陀佛一切賢聖如對目前、若能如是用心、即賢聖降臨龍天護念聽聞經讀法事

とあって、儀礼厳修の前提として観想が明確に要請されている。そして観想を

通じて極樂教主の阿弥陀仏及び眷属たる聖衆を眼前に感見し得る境位に至るならば、その阿弥陀・聖衆と、さらには護法善神らも儀礼空間に降臨し、法会を守護・聴聞するというのだ。観仏実践による見仏という体験の獲得が企図されているのだ。

略本の序文に続く「讚請文」では、「南無一心奉請本師釈迦牟尼仏、南無一心奉請十方三世仏、南無一心奉請阿弥陀仏」と、諸仏・諸菩薩に呼びかける。これは宗教儀礼の常套であり、一般に「勸請」「奉請」等と称される現世に神仏を召喚する作法である。後続の「散花樂文」でも、「奉請釈迦如来入道場散花樂、奉請十方如来入道場散花樂、奉請弥陀如来入道場散花樂」とあり、勸請された諸仏を道場に呼び入れ、先ず散花による供養が行われる。儀礼空間に顕現せる冥なる仏尊との交感の一幕である。そこから種々の讃偈を唱和し、五会念仏を詠唱してゆく。序文では五会念仏の儀礼が、「念仏三昧理事双修、相無相念、即与中道実相正觀相応」と意義付けられているが、広本にも五会念仏に念仏三昧を「即名正觀」とする一節があり照応している。先行研究で既に指摘されているように、法照は天台教学の影響も受けている。「中道実相正觀」とは、『摩訶止觀』でいう空・化・中の三諦の中諦を觀する中道觀を指している。五会念仏の儀礼は、天台の止觀行に比擬されるのである。

以上の分析から、円仁が常行三昧として法照流の五会念仏を採用した背景も理解される。天台止觀に相応するという教学上の会通がひとつの根拠であり、さらに略本序文には五会念仏の功力として「具五解脱速能成就五分法身……頓捨最後凡夫之身生極樂国」と説かれる。来世往生は無論だが、現世における得悟も可能とされ、止觀行としての念仏に通じるものとなっている。だがそれ以上に本稿で重視したいのは、五会念仏は法照が常行三昧と典拠を同じくする般舟三昧によって得た啓示に基づいて成立した儀礼であり、常行三昧と同じく見仏を実現するための念仏三昧の行法であったという点だ。円仁は見

仏を実現するための一つの有力な手段として、五会念仏を受容したものと考えられる<sup>11</sup>。そしてその有効性は、五会念仏が何よりも阿弥陀親授の法門であるという事実によって強固に保証される仕組みである。さらに儀礼上の論理からするならば、五会念仏の空間には、法照の見仏という起源的事象の追体験が含意されるだろう。そのような意味で、五会念仏は「念仏三昧の法」であると、『慈覚大師伝』にも表記されたのである。ここには見仏の心性ともいうべきものを認め得る。そしてそこには、個人的な止観修行によって見仏の実現を期するという従来の立場とは異なり、集団的な（儀礼の力）によって、例え衝迫性の縮減した疑似的体験であったとしても、見仏を実現せんとする新しい志向が窺えよう<sup>12</sup>。

ただし、一般に円仁によって常行三昧の行が五会念仏へと全く置換されてしまったように言われるが、そこまで断定はできないのではないか。平安中期の叡山や多武峯の常行堂では、本来的な止観行としての常行三昧に近いものが修されていたことを思わせる資料（良源『二十六箇条起請』・『多武峯略記』・『山門堂舎記』）も存在する<sup>13</sup>。円仁は、いわば正規の常行三昧の他に、儀礼化したもう一つの常行三昧として、唐代に流行した礼讚儀礼である「五台山念仏三昧之法」（五会念仏）を導入したものと解しておきたい。これは古代における東アジア文化交流の貴重な一コマである。しかし後に壮麗な儀礼としての常行三昧（五会念仏）が不断念仏や山の念仏という名の下、都の人口に膾炙し文学作品等にも記述されたため、止観としての常行三昧の存在感が希薄化したのだろう。

#### 4 臨終儀礼から来迎儀礼へ

##### (1) 『往生要集』と観仏・見仏

円仁は、長安を風靡した大衆的開放的儀礼としての五会念仏を叡山に導入し

た訳ではないと思われる。むしろ上述の如く叡山僧にとっての見仏行の代替的価値を、この儀礼に見出していたと考えられる。そして『三宝絵』における不断念仏の名で修されたそれは、円仁以降も種々の改変が加えられ独自の形態を有するに至ったのだろう。常行三昧＝不断念仏を『三宝絵』に記載した平安中期の源為憲は、源信・慶滋保胤らに主導された叡山僧と文人貴族から成る念仏結社である勸学会のメンバーであった。この勸学会が発展的解消を遂げて新たに成立した、より求道的性質の強化された念仏結社が二十五三昧会であり、その指導的立場にあった源信が同結社のテキストとして著したものが『往生要集』である。

『往生要集』は、観想念仏（阿弥陀仏と浄土の瞑想）の要義を説くものであるから、上来述べ来た所の観仏実践の書であり、その所期としての見仏に纏わる諸言説を多数拾うことができる。先ず着目すべきは同集の巻上「大文第二欣求浄土」において、往生の十樂を挙げる中の第一「聖衆来迎の樂」である。観想念仏の本典である『観無量寿経』などに基づき次のように説く。

念仏の功積り、運心年深きものは、命終の時に臨みて大喜自ら生ず。しかる所以は、弥陀如来、本願をもつてのゆゑに、もろもろの菩薩、百千の比丘衆と、大光明を放ちて、皓然として目の前にまします。時に大悲観世音、百福莊嚴の手を申べ、宝の蓮台を擎けて行者の前に至りたまひ、大勢至菩薩、無量の聖衆と、同時に讃嘆して手を授けて引接したまふ。この時に行者、まのあたりみづからこれを見て、心中に歓喜し、身心安樂なること禪定に入るがごとし。まさに知るべし、草菴に瞑目のあひだはすなはちこれ蓮台結跏の程なり。すなはち弥陀仏の後に従ひ、菩薩衆のなかにありて、一念のあひだに、西方の極樂世界に生ずることを得<sup>14</sup>。

運心とは観想のことである。平生より観仏の行に熟達していれば、臨終において弥陀の来迎に預かるのであるが、その境地は禪定に比定されている。ここには臨終時における来迎ヴィジョンの感得が、平生における観仏という瞑想（禪定）の実践と地続きの境地であることが示唆されている。換言すれば、観仏行で培ったイメージ世界が臨終時に実現するということであり、それ故に来迎の境地が禪定（観想・瞑想）に類比可能なのである。

そして『往生要集』巻中「大文第六 別時念仏」では、先ず「尋常の別行」を明かす。別時念仏とは、一定期間を区切って集中的に念仏を行わずることであり、九十日の常行三昧・七日の不断念仏などは正にそれである。ここでは善導の『観念法門』を引用する形で、『般舟三昧経』や『観仏三昧海経』に説く観仏の実践法を明かしている。それに続けて『摩訶止観』が九十日の常行三昧を説く箇所を全文引用してゆくのであり、源信は尋常の別時念仏として観仏を勧奨しているのである。次に臨終の別時念仏を説くが、それが臨終儀礼としての「臨終行儀」である。臨命終時は人生終局の瞬間・生命の極限状態であり、救済の可否を決する審判の場でもある故、周到に儀礼化される必要があった。

行者等、もしは病し、病せざらんも、命終らんと欲する時には、もつばら上の念仏三昧の法によりて、身心を正当にして、面を回らして西に向かへ、  
(A) 心また專注して阿弥陀仏を観想し、心口相応して声々絶ゆることなく、決定して往生の想、華台の聖衆来りて迎接する想をなせ。病人もし前の境を見れば、すなはち看病の人に向かひて説け。すでに説くを聞きをはらは、すなはち説によりて録記せよ。また病人、もし語ることあたはずは、看病者かならずすべからくしばしば病人に問ふべし、なんの境界を見たと。もし罪の相を説かば、傍らの人すなはちために仏を念じ、助けて同じく懺悔して、かならず罪を滅せしめよ。(B) もし罪滅することを得ば、華台

の聖衆、念に應じて現前せん。前に准へて抄記せよ。また行者等の眷属六親、もし来りて病を看ば、酒・肉・五辛を食らへる人をあらしむることなかれ。もしあらば、かならず病人の辺に向かふことを得ざれ。(C) すなはち正念を失ひ、鬼神交乱し、病人狂死して、三悪道に墮しなん。願はくは行者等、よくみづから謹慎して仏教を奉持して、同じく見仏の因縁をなせ。

以上は『観念法門』から臨終行儀を引用したものである。傍線部に注目すると、(A) は臨終における観想を説いており、来迎の相を観するのである。そして臨終者が首尾よく感得した来迎相を周囲の者が具体的に筆録するのである。(B) では来迎の観想を修しても悪相を感じてしまった場合、滅罪したならば観想に呼応して聖なる来迎が改めて感得できるとする。(C) からは、臨終とは好相と魔境の交錯するリミナルな時空であるから、見仏⇨来迎相の感得のために真摯に仏の教えに帰する姿勢が要求されることが分かる。『観念法門』に基づき源信は、臨終の来迎を観仏―見仏の文脈で把握してゆくのである。

ここで源信は、道綽『安樂集』の「十念相続」についての説示も引き、  
いふところの「十念」といふは、多くの積ありといへども、しかも一心に十返「南無阿弥陀仏」と称念する、これを十念といふ。この義、經の文に順ぜり。余は下の料簡のごとし。

として、十念を十遍の口唱念仏（称名）と解している。これは末代の凡夫には観想念仏が難行であるため、称名念仏による臨終正念・来迎往生を認めるものである。だがさらに「もし病者の気力、やうやく羸劣なる時には、いふべし、仏、観音・勢至、無量の聖衆とともに来りて宝蓮台を擎げて、仏子を引接した

まふらんと。」の如く、死に臨み気力の衰えた者が阿弥陀三尊来迎の聖相を觀想できるよう、助成することが指示される。また同卷下の「大文第七 念仏の利益」の第三は「現身見仏」とされており、先ず四種三昧の常座三昧の典拠である『文殊般若経』を引き、觀仏行の得益としての見仏を明かす。そして善導『往生礼讃偈』から「衆生障重くして、觀成就しがたし。ここをもつて大聖悲憐して、ただもつばら名字を称せよと勧めたまふ」を引き、称名念仏による見仏を重ねて明かしている。

ちなみに善導は『観念法門』でも、「五縁功德分」の中の「見仏縁」で、『観無量寿経』に依りながら、次のように説いている。

「一々にこれを觀じて、きはめて了々ならしめよ。閉目開目にみな見ることを得しむ。かくのごとく想ふものを名づけて粗見となす。これを覺想中の見といふ。ゆゑに粗見といふ。もし定心三昧および口称三昧を得れば、心眼すなはち開けてかの浄土の一切の莊嚴を見ること、説くとも窮尽することなし」と。またこの経をもつて証す。一切の凡夫ただ心を傾くれば、さだめて見の義あり、知るべし。たとひ見聞のものありとも、驚怪するを須らず。なにをもつてのゆゑに。すなはち弥陀仏の三昧力ほかに加するに由るがゆゑに見ることを得。ゆゑに見仏浄土三昧増上縁と名づく。<sup>15</sup>

觀想に熟達することで日常的に見仏状態を実現できるとする「覺想中の見」も興味深いが、称名念仏（口称三昧）もまた觀仏三昧と等しく、凡夫も阿弥陀の加被力によって見仏（三昧發得）可能であるとする点に注目したい。

このように源信は、正統的天台止觀を踏まえ、觀想念仏を主軸に据える訳だが、一方で先行する唐代浄土教を受容し、凡夫の易行としての称名念仏にも見仏の得益を認めていたのである。現身での見仏体験は、来迎―往生への確信

を彌増しに高めるものである。かくして平生の觀想実践を通じた見仏体験への熱烈なる志求が、臨命終時における聖なる来迎の感得という形で劇的に実現されるという、〈来迎〉と〈見仏〉との有機的な結合は、『往生要集』を通して平安期浄土教世界に共有されていったのである。

## (2) 来迎会の成立と往生講

『往生要集』には、『五会法事讃』からの直接の引文は見られないが、常行堂における不断念仏は、源信とも近い源為憲が『三宝絵』に記したように令名を馳せていた。<sup>16</sup> 円仁以降、叡山浄土教は見仏の心性をモチベーションとして、信仰のポルテージを高めていったものと思われるが、臨終儀礼が觀仏・見仏の問題と深く交差していることは、往生伝の記述からも窺える。源信と並び二十三五三昧会における中核メンバーであった慶滋保胤（法名寂心）は、同結社の理論的指導書『往生要集』に対し、往生の現証を集積した実録として『日本往生極楽記』を撰述した。その兼算伝には「口不<sub>レ</sub>廢<sub>二</sub>念<sub>一</sub>仏」。手不<sub>レ</sub>亂<sub>二</sub>定<sub>一</sub>印。而入滅。」とある。続く『拾遺往生伝』巻上の維範伝には「手結<sub>二</sub>妙<sub>一</sub>觀察智之定印。……」とあり弥陀定印を結んでいるから、兼算の定印も同様であろう。定印とは瞑想の境地にあることの表示であり、称名念仏と觀想念仏の併修と判断される（源愨・越智益窮の伝にも定印が見える）。また『拾遺往生伝』巻下の聖金伝には、臨終の際に「手結<sub>二</sub>定<sub>一</sub>印」。端座氣絶」とあり、これも弥陀定印を結び觀想行の裡に入滅したものであろう。さらに同卷下の皇太后宮歡子は臨終に際して「左手持<sub>二</sub>香<sub>一</sub>炉」。西向觀念、寅刻終焉。」とあるので、これも浄土の觀想念仏を行じつつの入滅だろう。この他に『後拾遺往生伝』巻中の源義光伝の臨終場面にも、「對<sub>二</sub>本<sub>一</sub>尊」。手結<sub>二</sub>定<sub>一</sub>印」。口唱<sub>二</sub>念<sub>一</sub>仏。」と記されており、觀想・称名の両念仏を併修している如くである。同巻中の良忍伝にも「常對<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>前」。消<sub>二</sub>燈<sub>一</sub>明<sub>一</sub>光」。觀<sub>二</sub>極<sub>一</sub>樂<sub>一</sub>依<sub>二</sub>正<sub>一</sub>報」。……已<sub>二</sub>至<sub>一</sub>終<sub>一</sub>期」。自<sub>二</sub>結<sub>一</sub>彌<sub>一</sub>陀<sub>一</sub>定<sub>一</sub>印」。三箇<sub>二</sub>日<sub>一</sub>夜。

全無「動転」。寂而氣絶。」とあり、平生に観想念仏を修しており、臨終の三日間も弥陀定印を結んで観仏に徹している。さらに同巻の平維茂伝では、源信は来迎図（迎撰曼陀羅）を維茂に贈り、臨終時には「唯対「此曼陀羅」。可レ成「往生之観」。」と教示したという。来迎図を前に観想を行ずる様を彷彿とさせる。

これらの資料から、臨終時の観想実践が見仏体験としての来迎の現出を期待してなされたことが推察される。往生伝は往生者の実態を一種観察的に描き出すものであり、来迎相は臨終者を取り巻く周囲の人々がそれを感知する形で記述され、そのことが往生の重要な証明となるのだが、来迎相は無論往生者本人が明確に感得していなければならない所のものである。『二十五三昧起請』によると同会のメンバーは、臨終行儀の中で先立つ同法が観想によって感得した境界を聴取し記録することを定めている。このように来迎とは、平生の見仏に対応する臨終の見仏と位置づけられるのであり、来迎会とはかかる神秘的な見仏体験を、極めて具体的・物質的な次元で表出せんとした（聖なる擬き）に他ならない。

来迎儀礼の創始者は、見仏の心性を体現し臨終の観仏行をも重んじた源信とされているが、そのことには十分な根拠があるというべきだろう。臨終見仏の図像化（臨終における観仏行の縁）である来迎図も先の維茂伝によれば源信によって世に流布したという。『法華験記』（一〇四〇年頃成立）巻下の源信伝には、「構「弥陀迎撰之相」、顯「極楽莊嚴之儀」。」とある。『今昔物語集』では「始「丹後国迎講」聖人往生語」（巻十五）や「撰津守源満仲出家語」（巻十九）が、来迎会関係の説話として知られている。いずれも説話上の感興というものに要請せられて、来迎会は幾らかの滑稽味を以って叙述されているくらいがあるものの、それも来迎会の社会的な盛行を逆照する修辭となろう。院政期に入ると来迎会は、都を始め在地でも修されるのである。来迎図（絵画）も来迎会（儀礼）も、共に見仏の心性の豊饒なる芸術的所産であった。

『拾遺往生伝』巻下の永観伝によれば、彼は毎年、迎講（来迎会）を修している。南都の永観は、天台の源信に次いで平安期の浄土教家として著名だ。その教義的著作としては『往生十因』が高名だが、他に『往生講式』『三時念仏觀門式』を撰述している。この二書は儀礼書であり、特に『往生講式』は広く流布し、中世における浄土礼讃儀礼の典型となった。永観は『往生十因』で、称名念仏による三昧発得を強調しているように、見仏の心性を強く内面化している。そして礼讃儀礼としての講式にも、その儀礼構造の内に観想念仏の実践的要素を組み込んでいるかと思われる。『往生講式』は全七門から構成される儀礼だが、その「第四念仏往生門」で、「抑一生終有「限」、長別「此界」時、想像、弥陀如来紫磨黄金之粧嚴、与「聖衆」俱来、黄金色映徹、蒼天皆黄、白毫光赫奕、国土普明……」と綴るが、「想像」には観仏―見仏のニュアンスが色濃く纏綿している。また『三時念仏觀門式』も全五段からなる講式の一つであるが、タイトルに観門とあり、第四段は「今「偏欣「浄土」、観「依正二報……」と始まる。全文が浄土の依報（極楽の微妙なる情景）と正報（阿弥陀の相好）の描写となっており、正に儀礼的な詞章の読誦は、そのまま観仏実践に同値し得るのである。『往生講式』は月毎に修されるものである。年に一度の盛儀である迎講と小規模な月例の往生講は相互補完的關係にあつて、永観の宗教活動の核を担った儀礼であったと考えられる。

## 5 おわりに

如上、叡山浄土教における見仏の心性という実践的伝統の視座から、来迎会生成の問題を考察した。浄土教への儀礼的アプローチは、文化史にとって有意義であるに留まらず、文化現象の基盤たる精神史・心性史といった領域の探求にも有効であると考ええる。そして思想・教学もまた、こうした儀礼という形式を通して具体的・立体的に表出されることで、信仰者の身体に活きて作用し、

信心を増幅させるといふ側面を軽視してはならない。思想や教義がどのように身体化されるのかという問題は、そこに儀礼という視座を介在させる時、より動態的に把握可能となるだろう。<sup>19)</sup>

- 1 伊藤真徹『平安浄土教信仰史の研究』（平楽寺書店、一九七四年）第二篇「浄土教儀礼の諸相」、齊藤隆信『中国浄土教儀礼の研究』（法蔵館、二〇一五年）などに拠る。
- 2 齊藤隆信『唐代の礼讃儀礼にみる民衆浄土教』（『新アジア仏教史7』（佼成出版社、二〇一〇年）参照。
- 3 井上光貞『日本浄土教成立史の研究』（山川出版社、一九五六年）参照。
- 4 蘭田香融『山の念仏―その起源と性格―』（『民衆宗教史叢書 第一巻 阿弥陀信仰』、伊藤唯真編、雄山閣、一九八四年）参照。
- 5 道元徹心編『天台』（自照社出版、二〇一二年）を参照。
- 6 前注（4）蘭田論文・前注（1）伊藤論文など参照。
- 7 法然の教団で修された往生礼讃の曲節は不定であり、情感豊かに即興でセッションする様が、甚だ人々の興趣を催した訳だが、それだけの力量とセンスが儀礼を実修する僧侶には要求される。安楽や住蓮はそうした音曲の才に長じた楽僧でもあったようだ。
- 8 本書には安然擬撰説もあるが、近年では真撰として扱われている。
- 9 衡山での啓示の後、法照はさらに靈告を得て五台山に登るのであるが、法照自記とされる逸書『大聖竹林寺記』（諸書に逸文が見える）によれば、彼は五台山でも文殊・普賢の両菩薩から親しく靈告を受けている。法照にはこうした奇瑞を感じ易い性向があった。
- 10 勿論これは法照撰の儀則が、そのまま日本でも忠実に実修されたことを意味しない。恐らく円仁による導入の力点は集団的念仏唱和法と『阿弥陀経』読誦にあつたのではないか。広本は『浄土五会念仏誦経観行儀』であり、文中にも「皆悉五会念仏誦経」<sup>19)</sup>「汝但依此五会念仏誦経之時。」とあつたように、讃偈や念仏の唱礼の他に五会の唱法に依る誦経もなされたことは、その第七門にパート毎に分節された『阿弥陀経』が全文引用されていることから明らかである（恐らく本来は曲節記号が付されていたはずである）。そして略本の序文にも「其弥陀・観経一坐一啓、散華樂及諸讃文、惣須暗誦」という『阿弥陀経』・『観無量寿経』読誦の指示がある。また『今昔物語集』巻十一「慈覚大師始建楞嚴院」語には『三宝絵』に極めて類似する記載があり、そこでは不断念仏を「引声」とも称しているので、声を緩く引き伸ばす経典読誦法である「引声阿弥陀経」を指していることが分かる。不断念仏で『阿弥陀経』

- 11 が読誦されることも、五会念仏の儀則に照らして充分に諒解し得ることである。これを要するに、〈念仏〉と〈行道〉からなる常行三昧の〈念仏〉に相当するものとして、「五会念仏」が新たに導入されたのであるから、常行三昧という修行は五会念仏の儀礼と融合したことになる（五会念仏には行道が伴っていない）。そして同じく円仁によつて將來された法照流の五会唱法による誦経の比重が次第に増してゆき、常行三昧における〈念仏〉の主体が『阿弥陀経』の読誦に移行したものが、『三宝絵』所載の不断念仏（常行三昧）の儀礼であると解せよう。
- 12 なお円仁が法照流五会念仏を伝えたことに、奈良弘元氏は疑問を投げかけているが、では円仁が伝えた「五台山念仏三昧之法」が何であるか、ということには何ら答えていない（『初期叡山浄土教の研究』春秋社、二〇〇二年）。本稿は円仁が法照流の念仏を伝えたとする通説に、蓋然性を認めるものである。なお円仁と不断念仏を巡っては最近も新たな論文が発表されているが、本稿では殊に蘭田氏のかつての卓論より多くを学んだ。
- 13 かつては個人的な止観の修行が集団的な仏事として儀礼化し、中秋の名月と共に修せられるいかにも貴族好みの典雅な法会へと変容を遂げたとか、真摯な修行が美的な儀礼に屈服し、止観の精神が形骸化されたなどと論じられることもあつた。前注（1）伊藤論文、石田瑞磨『往生要集』の思想的意義』（『日本思想大系（6）源信』岩波書店、一九七〇年）を参照。しかし本稿では、そうした儀礼固有の意味や機能を評価しない理解には従わない。
- 14 前注（12）石田論文を参照。平安前期の常行堂の実態は資料に乏しく不詳な点が多いものの、よもや毎年一度の年中行事化した（「常行三昧」としての）不断念仏を修すだけの空間だつた訳ではあるまい。親鸞がそうであつたように、常行堂では後に堂僧という集団が組織されてゆく。『門葉記』によれば、鎌倉時代には十四人の堂僧が存在しており、「大念仏」（不断念仏）を始め多数の儀礼を勤修しており、「此外種種行法多し之。不遑注進」とされる。
- 15 以下、『往生要集』は訓読文で示す。
- 16 ここは『往生要集』には引用されていないが、『往生要集』所引のその他の「観念法門」に準じて訓読で示す。
- 17 平安中期以降、不断念仏は王家や摂関家に所縁の寺院を始め石清水八幡宮などでも広く修されてゆく。
- 18 鎌倉時代に下る『古事談』巻三の所伝では、源信は脇足上に弥陀の小仏像を立て、紐で引き寄せて来迎に見立てたというが、これは余りに児童に等しく、説話的な趣向に他なるまい。
- 19 なお民俗学では、人間が極楽の聖衆（仏）に扮する来迎会を、即身成仏儀礼として

密教的に解する議論もあるが、本稿では採用していない。  
 そもそも従来（リミニア）の宗教学・宗教史における、内面の純粹な（信心）と外的形式主義の（儀礼）という対立構図は、カトリックの儀礼的性格を批判した近代プロテスタント的発想の所産に他ならず、臨在する異なる神仏との交感という体験性こそが、宗教儀礼の本質的要素として重視されるべきである。拙著『神仏と儀礼の中世』（法藏館、二〇一一年）を参照。

〔本文引用資料出典一覧〕

『法然上人行状絵伝』 〓 『岩波文庫』、『慈覚大師伝』 〓 『統群書類従』八輯下、『摩訶止観』 〓 『大正蔵』四六卷、『三宝絵』 〓 『新編日本古典文学大系』、『金剛界大法対受記』 〓 『大正蔵』七五卷、『浄土五会念仏誦経観行儀』 〓 『大正蔵』八五卷、『浄土五会念仏略法事儀讀』 〓 『大正蔵』四七卷、『往生要集』 〓 『日本思想大系 源信』、『観念法門』 〓 『大正蔵』四七卷、『拾遺往生伝』、『後拾遺往生伝』、『法華験記』 〓 『日本思想大系 往生伝』、『往生講式』 〓 『浄土宗全書』一五卷、『三時念仏観門式』 〓 『山田昭全著作集』一卷

（船田淳一）

## 第二章 迎講を創り営む聖人たち

### —迎講をめぐる説話を読む—

比叡山の横川において、源信を中心とした二十五三昧会の結衆による浄土信仰の実践共同体の運動のなかで創められた迎講についての、最も早い記述は、鎮源『法華験記』(一〇四〇)「楞嚴院源信僧都」伝に言う「弥陀迎接の儀を構へて、極楽莊嚴の儀を顕せり(世に迎講と云ふ)」(原漢文・以下同)であるが、その根本記録であり以降の往生伝の基盤となった『二十五三昧結縁過去帳』の源信伝にもついた大江佐国『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』(一〇六一以前)は、その場を横川花台院として、「その地勢に就きて行者来迎の講を勤修す。菩薩聖衆は左右に圍繞し、伎楽供養、歌詠讚嘆すること、既に年事となる」とあり、のちに恒例の仏事となっていたことが知られる。おそらく当時の浄土願生者ひいては社会に強い印象と宗教的感動を与えたに相違ない迎講が、そこから如何にして中世日本に展開し、それはどのような影響を及ぼしたのか。それは現在も生き続けている儀礼の伝承や豊かな遺品群はもちろんのこと、何より迎講をめぐって人々が語り伝えた説話においてこそ、この興味ふかい儀礼が与えたインパクトや文化的記憶、ひいてはそれを通して形成された心性や世界像に接近することができる。

恵心僧都源信による迎講の創始は、既に鎌倉時代初期には説話化されて伝えられていた。源顕兼編『古事談』卷三僧行に収める一連の源信関係記事中に、「迎講者、恵心僧都始給フ事也」として、彼が脇息の上に三寸の小阿弥陀像を載せ、これを(紐で)引き寄せて拜し来迎の儀を摸したのが元になった、という。それは余りにもささやかな、むしろ見立てと言ってよい私的な営みであるが、いわゆる観想念仏とは全く次元の異なる、傍目からは滑稽とも見える模倣的な仕立てと所作にこそ、迎講という宗教儀礼の本質があることを、その説話

は示しているのではなからうか。仏像を道具として用い、それが動き行者の前に到来するという祭儀的演劇性の核心が、その原型的な試みの伝承に象徴されているようである。

それは源信在世時に、二十五三昧会結衆の葬送の場でもある横川華台廟において、本格的な来迎儀礼として催された。おそらく古代寺院の舍利会など、菩薩・天部等の仮面と装束および伎楽の奏楽による行道法会が盛んに営まれており、これを応用することは容易であったろう。世に「迎講」と俗称されたこの法会は、撰閨期のうちに山を下り、「大鏡」の舞台となった雲林院の菩提講と共に京洛の間に営まれ(『栄花物語』)、院政期には各地に流布することになった。それらの迎講は、源信と同じく、それを始修したり営んだ僧、とりわけ聖人たちの往生伝や説話と結びつき、伝承のなかに記憶を留めている。その一例を、院政期の説経者・勸進僧であり歌人でもあった瞻西(一一二七)について見よう。

もと叡山僧で、山を下り、東山雲居寺を中心に活動した瞻西は、その説法力により洛中の貴賤衆庶の信仰を集め、勸進による勝応弥陀院という阿弥陀大仏を東山に造立したほか、雲居寺で迎講も営んだ。それは音楽を伴う芸能的な要素もあつたらしい(『拾遺往生伝』安部俊清伝)。その迎講の面影を伝えるのが、中世に瞻西聖人の遁世譚として物語化された『秋夜長物語』である。南北朝に成立した、児物語の代表作としても著名なこの御伽草子では、彼はもと桂海という叡山の悪僧であり、園城寺の児梅若を垣間見して恋に落ち、契りを交すが、児は天狗に攫われて山と寺の合戦となり、桂海は奮戦して寺を焼き払う。寺の滅亡を悲しみ梅若は入水して果て、これを機縁として桂海は発心し瞻西聖人となった、という宗教説話として一篇は結ばれる。室町初期にその絵巻化された最も初期の作例であるメトロポリタン美術館本の最後の場面が、雲居寺における迎講を描いた図である。

物語の詞には、新古今集の最後に収められた瞻西の浄土往生を欣ぶ歌で結ばれて、特に迎講の事は述べられないが、前述のように彼の事蹟として雲居寺の迎講は周知されていた故に、絵巻では敢えてそれを図画して聖人の物語の結末を飾ったのであろう。東山の花の盛りの雲居寺には反橋が架けられて、その上を持幡の天童、蓮台を持つ観音、勢至と菩薩たちが渡っている。橋の向うには小堂があり、手前にも屋舎があつて、何れかが娑婆堂であろう。聖衆だけでなく迎え仏としての立像阿弥陀の出御する迎講として描かれている。橋の周囲には見物の男女が群集し、中世の迎講を描いた図としても貴重であるが、それが瞻西聖人の遁世物語の末尾を飾り、その往生を示唆象徴する図像として位置付けられる文脈こそ、注目すべきであろう。

いわゆる「勅修御伝」と呼ばれる法然上人伝記の集大成となった四十八巻伝の撰者である天台僧舜昌が、法然伝の著作を非難する叡山衆徒への弁明として著した『述懐鈔』には、歴代天台高僧の浄土信仰実践の伝統が網羅されるが、そのなかに源信による迎講始修とその影響が説話化される。恵心による横川花台院での迎講の有様に随喜した慶滋保胤とは対照的に、源信を妬み、彼を誹謗しようと潜かに迎講を見物した寛印供奉は、却つてその莊嚴に感動し、心を翻えして自らも衆生利益の為に迎講を丹後の国府、天の橋立に行った。その式日は三月十五日であるという。また、大原西林院の座主承円は、大原にこの迎講を移し行い、以降、その忌日の十月十六日を恒例として行くと、源信による横川の迎講を本所として、丹後と大原の二つの迎講を鎌倉時代の代表的な迎講として、その靈驗（その迎講には、諸国の万霊が集うので必ず降雨の験があることなど）の多いことを述べている。更に、願行房という念仏聖による、鎌倉の安養院における迎講縁起という、東国における迎講の流布展開にも触れていることは興味深い。願行が常陸、久慈の阿弥陀山で念仏するに、頼朝が夢に自他の済度の為に七日の迎講を説法と往生講と共に修せよと告げるにより始修し、

のちに鎌倉稲瀬川の辺に長日の迎講として営んだという。東国、鎌倉周縁における迎講では、『吾妻鏡』安貞三年（一二二九）に記される三浦三崎の海上で伊豆山源延が勧進した迎講が著名であるが、その一度だけの興行とは異なり、安養院迎講は永続的に行われたものらしい。舜昌は、これら聖人たちの迎講の流伝を、「此レ等ノ利益ヲ思フニ、慧心ノ先徳迎講ノ儀ヲ始メヲカレケル智者ノ善巧、誠ニ遠キヲモンバカリヲバシケリ。誰レカ是ヲ不ニ仰信」と讃える。迎講は、京洛から辺地まで、精霊を含むあらゆる人々を浄土往生に結縁させるためのすぐれた方便の手立てなのである。その様相を、『述懐鈔』は、寛印が物蔭から窺い見た花台院迎講について、次のように描写している。

西山ノ端ヨリ紫雲斜ニ聳ヘテ、伎楽遙カニ聞エ、糸竹ノ声ヲ諍ヒ、弥陀如来安祥トシテ相好光明鮮カニ、二十五菩薩前後ニ圍繞シテ、雲ニ袖ヲ翻ヘシ、念仏ノ声ニ随ヒテ、草庵ニ近付キ、観音ハ台ヲ傾ケ、勢至ハ御手ヲ伸べ、行者ノ頂ヲ撫テ給フヲ拜スルニ、貴ト云フモ疎也。

この有様を見て「寛印、無<sub>二</sub>身<sub>一</sub>置<sub>レ</sub>処<sub>一</sub>、感<sub>二</sub>堪<sub>一</sub>ヘズシテ山ノ中ヨリマロビ出デ、五体ヲ投<sub>レ</sub>地<sub>ニ</sub>、随喜ノ涙ヲ流サレキ」と感動懺悔して自らも念仏の行者となり、「サテ寛印供奉ハ、衆生利益ノ為メニ、来迎ノ儀ヲ、丹後国府、天ノ橋立ニ移サレテ、三月十五日ニ是ヲ行フ」という縁起説話の展開を見せるのである。

この丹後、天橋立の迎講については、時代を少し遡り、無住の『沙石集』（巻十）「迎講事」に、共通した伝承が、こちらは寛印の名を出さずに見えている。ここでもやはり『古事談』と同じく、源信による迎講創始伝承を、「恵心僧都ノ脇足ノ上ニテ、著ヲ折テ、仏ノ来迎トテ、ヒキヨセクシテ、案ジ始給タリト云侍リ」と伝え、それを受けて「丹後国鳥鴨（普甲）ト云所ニ上人アリケリ」と、丹後国における迎講始修の縁起説話を中心に記されている。

この丹後国の上人は、「極楽ノ往生ヲ願テ、万事ヲ捨テ、臨終正念ノ事ヲ思ヒ、聖衆来迎ノ儀ヲ願ケル」という、ひたすらな浄土願生者であったが、まず模擬的な来迎と往生の儀を、大晦日に「極楽ヨリ阿弥陀仏御使」の書状を自分の許へ届けさせることから始まり、次第に大がかりになり、ついに国司の結縁を得て、「迎講ト名テ、聖教ノ来迎ノヨソヲキ（装）シテ、儀式ノ臨終ノ作法ナムド、臨終ノナラシ（慣）ニモセバヤト思侍リ」と、仏菩薩の装束を調達し、行ったものである、とする。この丹後国天橋立の迎講は中世には広く知られた著名な法会であったようで、本願寺三代覚如の伝記絵巻『慕婦絵』巻九に天橋立に赴いた覚如は、その近辺「大谿」という「聞ゆる迎講」の所を過ぎている（この大谷寺は丹後一宮籠神社の別当寺であり、天橋立の元に在った<sup>4</sup>）。この丹後の迎講を巡る伝承は、更に遡って平安末期の十二世紀初に編まれた仏教説話集『今昔物語集』の巻十五、往生伝を聚めたうちに見いだされる。それは、迎講という宗教儀礼の重要な特質を、説話こそが明らかに伝えるという点で、まさに興味深いテクストとすべきであろう。

院政期に生み出された記念碑的な仏教説話集である『今昔物語集』は、三國にわたり、仏伝から本朝世俗の奇異譚まで含めた膨大な物語の類聚であるが、巻十五は、その本朝仏法部の浄土および兜率往生譚を集成し、主に慶滋保胤の『日本往生極楽記』や鎮源『大日本国法華経験記』、三善為康『拾遺往生伝』等に拠りながら構成されている。しかし、その中に出典が明らかでない往生話も散見し、ここに扱う「丹後国始迎講聖人往生語第二十三」もそのひとつである。加えて、本話もまた寛印の名を示さず、ただ「丹後国に聖人ありけり（以下、原文の片仮名を平仮名に直す）」と、『沙石集』と同じく匿名で物語るのであり、おそらくそれは、本話の拠った原資料（散佚した「宇治大納言物語」の類）によるものである<sup>5</sup>。

主人公の聖人は、「極楽に往生せむと願ふ人世に多かりといへども、この聖

人はあながちになむ願ひける」と紹介され、その強ちなる往生の手段が本話を動かしていく。前半のエピソードは、『沙石集』と同じく、大晦日に阿弥陀仏より「文」消息を伝立て、召仕う童子に教えて、暁方に極楽世界より阿弥陀の御使と名乗らせ戸を叩き訪わ<sup>とぶら</sup>せる。童子が教えられた通りにすると、「聖人、泣くくまろび出でて、「何事におはしましつるぞ」と問ひて、敬ひて文を取りて見て、臥しまろび、涙を流して泣きけり」と、自作自演の仏世界からの来迎を報ずる文遣いの劇を巧んで、これを毎年の晦に習いとしていた、という。使の役をする童子も「よく馴れてぞ、この事をしける」と、あくまで演技ではあるが、度重ねるうちに上達して使者役が身に付いた、という演劇性に言及していることが注目される。

一話の眼目は、後段、国司大江清定（こちらは実名を出す。長暦元年（一〇三七）と永承三年（一〇四八）の両度に丹後国守に任ぜられた。）がこの聖人に帰依すると、聖人は彼にこの国でも迎講を始めよう（ここから、既に叡山ないし他国で行われていることが前提の話であることが知られる）と提案、自ら勸進し、守は都より舞人・楽人を招いて（その習礼を）「心に入れて行はしめれば」、聖人は随喜し、この迎講の時、自分が極楽の迎えを得たと思う、その瞬間に命終しよう、と誓う。そして迎講の当日となり、「儀式ども微妙にして事始るに、聖人は香炉に火を焼きて娑婆に居たり」と迎講の法会空間の一方の重要な場である娑婆屋の、現世人界の来迎を受ける座における主役として聖人が迎接を待つ。以下の描写は、前述した『述懐鈔』の寛印譚に近似することも注意したい。

佛はやうやくより（寄）来りたるに、観音は紫金の白を捧げ、勢至は蓋をさし、楽天の菩薩は一つの鶏婁を前として、微妙の音楽を唱へて、仏に随ひて来る。

この間、聖人は流涕し「念じ入りたり」と見えるところ、観音が蓮台を差し出すのに聖人は少しも動かず、「貴しと思ひ入りたるなめり」と思いきや、実は「氣絶えて失せにけり」既に（誓いの如く）絶命していた。法会の一同全員はこれに気付かず、仏（来迎仏）の還る時になっても少しも動かず、また導師でもあった聖人の役目である説法も念仏もしなかったので、弟子たちが引き動かすただ「すくみければ」もはや死後硬直に至っており、はじめて「往生」していたことを一同は知った。「見ののしり泣き貴びけり」迎講の会場に集った全ての人々が悉く、これを真正の往生を迎えたこととして感動に包まれた。一話の結びである話末評語でも、これこそ「疑ひなき往生」そのものと「讚め貴びける」を、「奇異」に貴きことであつたと語り伝えた、と結んで『今昔』編者もまた、その往生に疑いを挟まず往生伝の一角に位置付ける。

この迎講での聖人の往生譚は、さきに言及した演劇になぞらえることにおいて、あざやかにその性格をとらえることができる。つまり聖人はこの迎講という来迎劇の主役として見事にその本番の初日を演じ切り、晴舞台を成就させたのである。その前段の年毎に重ねられた仏の使者の文遣いを受けることで往生の慣し、つまり習礼を繰り返して、儀礼の成就に不可欠なプロセスを積み上げ、更に迎講という本格的な大舞台を自ら企画立案し、主役を勤めて本望を遂げた、ということになる。

『今昔物語集』は、本話の後に、鎮西（九州）観世音寺傍の極楽寺における千日講の結願を期して往生した聖人の話（この聖人の誓願を世人は嗚呼な虚態として信じなかったが、その通り往生を遂げた）を並べて、二話一類形式を構成しているが、こちらの方は迎講のような劇的な臨場観あふれる表現はなく、物語の与えるインパクトは、遙かに本話が優っている。それは、確かに迎講と異なる宗教儀礼の、単なる模擬的な真似び、中世の祭祀に出される風流の学びのような仮装とは一線を画した、〈聖なるもの〉としての仏や聖衆が、極楽とい

う他方世界から現世の人間世界に物質化して現前することによる、宗教的超越の可視化という特質に由来しよう。換言すれば、迎講の特色であるその演劇性は、そこに出現する〈聖なるもの〉としての仏や聖衆の物質性に支えられた現前（Representation）——それは、仮面や装束を纏う舞人楽人やその奏する音声、また導師衆僧の念仏声明ひいては仏像そのものの出御を含む諸位相の多元複合による——として儀礼の場を成り立たせる、日本の中世仏教が生み出した宗教文化の野外祝祭劇として、迎講をとらえ直す必要を、この説話は提起しているのである。そのとき、迎講の前提として、より素朴で単純な往生の慣し（練習）としての仏の文遣いのささやかな劇が語られていることは無視できない。そこで仏の来迎を予告する使者が「文」つまり手紙を届けるという設定には、近代という郵便制度に似た、国家体制や社会を支え、かつその次元をも越えて人間を他者と結びつけ、交信しあう文化のシステムが如実に反映されている。これは極楽からの王ならぬ仏という主からの招喚状であり、往生という契約の儀式なのである。それが遂に果たされるところが迎講の来迎の儀になるのであつて、両者は本質的に一体一連のものといえよう。

『今昔物語集』には、もうひとつの、説話における迎講の始まりとその特質を考えるうえで欠くことのできない一話が含まれている。それが、巻十九前半の出家譚を聚めたうちに含まれる、「撰津守源満仲出家語第四」である。この、九世紀後半に朝廷守護の武士として活躍した撰津源氏の祖、多田満仲の出家譚には、源信が重要な役割を果たし、そこに迎講のいわば原型と言わなければならない儀式（Performance）が登場し、語られる。これもまた『今昔物語集』ならではの生彩あふれる人間像とその諸態の表現に満ちており、その焦点は迎講の芸能的側面において結ばれているのである。

この話は、「世に並びなき兵」として数限りない殺生の罪業を重ねてきた満仲の後生を、叡山僧となっていた子息の源賢は深く歎き、源信の許へ赴いて父

に出家の心を発させるための「構へ」を語る。源信は、かかる重業の人を出家させる功德の大なることを説き、己れ一人では難しいと、覚雲や院源を語らい、共に「構へ」て満仲に功德を作らせ、その供養として説経し、その次でに出家の功德の大なることを説き聞かせて導こう、と計らい、一同で箕面山参詣に言寄せ、偶然に訪問するように多田の郷へ訪れる。満仲は高僧の来臨を喜び、もてなすと共に早速に仏経供養の作善を営む。この仏事に導師を務める名説経師院源の説法に、施主の満仲は音を放つて感泣し、更に勧め誘えて出家の志を發させ、吉日として翌日に郎等らと共に出家を遂げさせ、殺生の具となる弓箭や狩猟の道具等も廃棄させる。源信はじめ聖人たちは、この功德を更に増進させようと「いよ／＼尊き事共を物語の様に言ひ聞かせ、なお夜に入つて、「この次で、今少し發さしめむ」と、「兼ねて、もし信ずることもやあるとて、菩薩の装束をなむ、十具ばかり持たしめたりける。ただ笛笙など吹く人どもも少々雇ひたりければ、隠れの方に遣して、菩薩の装束を着せて、「新発（意）の出で来て、道心の事共を言ふほどに、池の西にある山の後より笛笙など吹きて、面白く楽を調べて来たれ」と言ひたれば、楽を調べて漸く来たる」このよくな「構へ」（用意）により、新発意出家者つまり入道した満仲の道心を一層煽り立てるために、当座に臨時の迎講を巧んだのである。こうして、楽の音に不審した満仲に対し、一同が「極楽の迎へなどの来たるは、かやうにや聞ゆらむ、念仏唱へむ」と念仏の声を響かせながら障子を開けると、そこには聖衆の来迎が現じていた。

金色の菩薩、金蓮華を捧げてやうやく寄りおはす。新発（意）これを見付けて、音を放ちて泣きて、板敷よりまろび降りて礼む。聖人達もこれを尊び礼む。菩薩、楽を引き調べて返りぬ。

出家したばかりの青入道に忽ち来迎の儀を現前させる、いかにも気の早い果報であるが、その来迎の頂点をいきなり眼前にし、返り来迎を拜ませるといふ、迎講の極みの部分だけをすぐつて満仲に観せたのである。この功德に喜んだ彼はただちに堂を造り創め、これが多田院の起りとなったといふ、迎講を機縁とする多田院道場縁起といふべき説話として結ばれている。それは、やがて念仏聖重源が、自らの勧進作善の重要な拠点として各地に別所を営み、そこに迎講を行った、その遺跡や遺物が播磨の浄土寺を含めて各所に現存するが、そのよくな聖人たちの宗教活動を彷彿させる光景を語っている。

これらの『今昔物語集』の二つの迎講をめぐる説話は、ともに迎講というものを考えるうえで重要な要素を内包し、かつ示している。ひとつには、それらがいずれも迎講そのものの始修ないしその祖型といふべき儀礼のナイーブな様相を物語り、同時に、その迎講を介した一箇の宗教空間の始まりを説くことである。前者は、中世丹後の代表的法会となった迎講の始まりを語る往生の奇蹟であり、後者は、のちに忍性がその再興に関わつたように北摂の重要な拠点となった多田院の縁起となる本願の出家譚であった。もうひとつは、その迎講始修の主体として、聖人が自ら主役をつとめることであろう。前者は往生まで遂げてしまひ、後者は演出者として全てを操る、それが迎講創案者としての恵心僧都源信の役割であった。その鍵語が「構へ」ることである。説話にあるように、迎講を営むためには、菩薩の装束が（その仮面を含めて）何具も儲け備える必要がある、これを着て、演じ奏することのできる役者としての舞人楽人を雇ひ、しかるべき演出を工夫しなくてはならない。かつは、そのための「慣し」すなわち習礼が不可欠であった。こうした、芸能儀礼としての迎講の実修のための舞台裏が、これらの説話には語られているのである。「構へ」とは、こうした、宗教儀礼の根底を支え、成り立たせる演劇性と芸能性を端的に表現する言葉であり、それが虚構から生みだされる神聖性という、逆説的な仕掛けを種

明かしするものであった。それは、迎講という宗教儀礼の特異な性格の本質を言い当てる詞でもあろう。

これらの迎講の説話は、同時に、きわめて微妙で危うい、聖俗の境界に立つて揺らぐ物語でもある。それは、浄土への往生という、中世宗教の希求する最大の（聖なるもの）の到来をすぐれて体现する物語でありながら、また、一歩でも踏み外せば、滑稽どころか爆笑の渦を喚びおこし兼ねない、罰あたりな喜劇に転じてしまうかも知れない物語である。それは、むしろ読者の側に委ねられて、その解釈によって位相を変化せざるを得ないテキストでもあろう。それは、現在もなお、宗教儀礼として命脈を保ち傳承されている祝祭のページェントとしての練供養に向けられる、社会、文化的なまなざしとも確かに繋がる課題であるといえよう。

迎講の説話が投げかけ、読み取られることは、その最も初期の『今昔物語集』において、きわめて豊かであり、かつその本質的な問題を示唆するものであった。そこに、往生人の伝記、と言うよりむしろ往生の奇蹟物語と迎講の始まりが結びつき、迎講がその始源の記憶を喚びおこす儀礼の場であること、そして、往生人が念仏聖その人であり、彼が主体となつて迎講儀礼を始めることにより寺院の本願、つまり開創者<sup>フンゾウ</sup>として構え出した一箇の宗教空間が練供養の祭儀に該当するものであった。源信による迎講の始修がもたらした宗教運動の到達点は、そのまま源信の誕生の故地に近い、二上山の東麓の古代寺院に安置された偉大な観経浄土変の綴織當麻曼荼羅の本願尼と伝える、中将姫の往生を記念し再現する毎年恒例の「當麻のレンゾ」の迎講に受け継がれ、それはいままも盛大に修せられている。

室町時代中期、興福寺の尋尊が『大乘院寺社雜事記』にその盛況を伝える當麻寺の迎講は、伝存する遺品から鎌倉時代には既に行われていた可能性があるが、それを確かに當麻寺自身が記しづけるのは、文亀曼荼羅制作に伴う勸進の

ために享祿四年（一五三一）に制作された『當麻寺縁起』絵巻においてである。

絵は土佐光茂によつて描かれ、後奈良天皇はじめ朝廷公家の染筆によつて成つた三巻の末尾に、勸進聖宗胤の発願によつて當麻寺の御供養の一段が横川花台院から移されたという由緒と共に、南都絵所芝座の琳賢によつて描かれた。この三巻本の絵巻は、鎌倉時代の『當麻曼荼羅縁起』絵巻（光明寺本）や、掛幅縁起絵（當麻寺蔵）を元にしながら、更に西誉聖聡『當麻曼荼羅疏』に拠つて、中巻を藤原豊成の娘中将姫の受難流離再会の因縁物語とし、下巻を曼荼羅織成縁起とする。そして、完成した曼荼羅の前に、弥陀と聖衆の来迎を受けて往生する鎌倉絵巻の来迎図に代えて、當麻寺において、本堂の當麻曼荼羅を浄土として営まれる迎講の光景を、絵巻の長大な画面を活用して、曼荼羅堂から娑婆堂までの間を行道する聖衆と、堂前の来迎の弥陀、そして娑婆堂には中将法如尼の像が、これを迎える聖の役割を負つてあらわされている。迎講の説話のなかで宗教儀礼の主役として立ちはたらいいた聖人は、この當麻寺の迎講において、本願尼法如という傳承上の女人となつて再び現われる。迎講に参る人々は、中将姫が往生を遂げた日に営まれる来迎儀に再現される往生を見物しながら、この聖なる女人を介して浄土へ往生する導きの記憶を新たにしたことであろう。

1 瞻西の著述に「迎接佛可為立像證文」一部があつた（『阿婆縛抄』）と伝えるが現存しない。ただ、これが迎講の来迎仏の事を説くものとすれば興味深い。なお、現存する迎講に用いられる（或いは用いられた）阿弥陀仏像は全て立像である。

2 『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―』（龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）に参考図版として掲載される。

3 『浄土宗全書』統第九卷「先徳要義集」一九七四年、所収。

4 『纂婦絵』巻八には、覚如が貞和二年（一三四六）十月に大原に赴き迎講に結縁したことを伝える。翌貞和三年十月には、前年十月横川花台院慈観の勸進により、迎講始修の故地である花台院で迎講が再興され、大原の来迎院と勝林院の僧衆が勤仕したことが『横川花台院迎講記録』（叡山文庫・魚山叢書）に見える（鈴木治子『横川花台院迎講記録』解説ならびに翻刻『史料と研究』、二〇〇三年）。

『今昔物語集』の本話（巻十五第二十三話および満仲出家譚（巻十九第四話）を用いて、迎講の考察を行い、ひいては「来迎芸術」として浄土教美術研究に新たな視点を切り拓いたのは、大串純夫「来迎芸術論」（一九四〇〜四一年）、「来迎芸術」、法蔵館、一九八三年）であった。本稿もこの論文から大きな示唆を与えられたことを銘記しておきたい。

（阿部泰郎）

### 第三章 大坂梅田練供養図のこと

#### 1 さまざまな練供養

寺院の年中行事である仏教法会は、神社の祭礼と比較すると堂内や境内で執行され、法会の種類による類型化がみられ、寺院の位置する地域による特色は少ないと考えられがちである。例えば、我々が思い描く練供養とは、境内の二つの堂舎の間に仮橋を架けて、二十五菩薩役などが来迎（行道）する形態であるものの、歴史的にはさまざまな練供養があった。

筆者に負託された描かれた練供養図に関しては、『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―』（龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）に多くの事例が紹介されている。

同書に掲載された絵画群が、描写当時の凡その事実を描いていたとするならば、仮橋を架ける練供養以外にも、実際の橋を利用したり、地面を行道する形態があった。前者の事例として、京都東山雲居寺の練供養を描いた南北朝時代の『秋夜長物語絵巻 断簡』（米国・メトロポリタン美術館蔵）が挙げられているが、これは架橋工事後の「橋供養」とのかかわりも考慮される必要があるう。

また後者としては、中世當麻寺の事例（享祿四年ハ一五三二V『當麻寺縁起 卷下』當麻寺蔵）などが掲載されているが、同様の事例は江戸時代の一枚摺『備前国邑久郡千手山弘法寺脚供養之図式』（岡山県立博物館蔵）にも描かれ、これらは仮橋に先行する形態なのであろう。

近世の練供養図としては、印刷文化を背景として、地誌（版本）や一枚摺（色摺・墨摺）として描かれるものの、肉筆絵はほとんど確認されておらず、本稿で紹介する大坂梅田練供養図は未紹介の貴重な一図である。

#### 2 大坂梅田練供養図

大阪府立中之島図書館蔵『幕末維新絵物語 卷一 自文政末 至安政四巳』の三十五丁表（全四十丁）に「梅田ねりくやう」図が収載される（『幕末維新絵物語』全六冊の映入、各縦二三・八、横一六・三cm）。本文冒頭の「卯」歳は安政二年（一八五五）であり、五ヶ月後、江戸では安政大地震が起こっている。構図としては、信者が見守る仮橋の上を天冠を被った天人役が「南無妙法蓮華經」の題目が書かれた散華を捧げ持ち、続く高僧が散華をまきながら練り進む。二十五菩薩役は見当たらず、画面外に後続するものか不明である。つまり、タイトルと最後の俳諧では「ねりくやう」とあるものの、天女と僧のみの行道ならば、他の練供養とは様相を異にし、この法会が練供養と考えられるものか、後考を俟ちたい。

以下、本文を翻刻する。

梅田ねりくやう

卯五月梅田境内に



「幕末維新絵物語 卷一」  
（大阪府立中之島図書館蔵）収載  
「梅田ねりくやう」図（筆者撮影）

法善堂までかくのごとく

念仏堂より足場をしつらい

ねりくやう名有僧立チ

其日をはれと美をかざり

天人姿三人アリ所々に

立とまり題目乃

書たる蓮花をちらし

これをひらふ群集ナリ

へ聖武天皇千年忌となへ

三昧まに法花堂と

申立大堂を

建立する

へかほし棧はしに華はなぞ

散りけりねり

くやう

供養

### 3 梅田と難波、二つの寺院

『幕末維新絵物語』は幕末維新期における大坂を中心とする見聞記事であり、梅田とは大坂の梅田であろう。その上で寺院の比定であるが、近世後期の曾根崎村の一部「梅田」に該当する寺院としては、近隣の曾根崎村の寺院である長教寺や藤井寺の可能性もあろう。

一方、本文には宝暦年間（一七五一～一七六四年）の聖武天皇千年忌に際し、三昧に法花（華）堂を立てたとあり、本図の最有力は梅田墓（三昧）を管理し

ていた普門院の法会である。

江戸時代初期、天満周辺に散在していた墓所を、曾根崎村（現在の大阪駅前第一ビル付近と推定）に分割移転させたのが右の始まりであった。その後、現在の「うめきた」南西部「梅田」に、貞享年間（一六八四～八八年）に再移転されたと考えられている。同墓は「大坂七墓」の一つとしてよく知られ、近松門左衛門の「曾根崎心中」や「心中天網島」などの文学作品にも取り上げられている。明治二〇年（一八八七）頃に有縁の墓石は各所に移転され、その後無縁の墓が残された。

普門院の同舎が幕末に法善堂と称されていたならば、隣接する墓域の念仏堂（法花堂）との間に架けられた仮橋において、宝暦年間以降、練供養が催されたのではなかろうか。

また、法善堂と念仏堂の間に仮橋を架けて練供養が行われた大坂市中の寺院として、もう一つの可能性は梅田ではないものの、以下の難波の寺院が連想される。

著名な歓楽街「法善寺横丁」の天竜山法善寺（大阪市中心区難波一丁目の浄土宗、本尊阿弥陀如来）の可能性を挙げておこう。

法善寺は第二次世界大戦で罹災し、旧境内は「法善寺横丁」と俗称される繁華街となり、水掛け不動で著名な西向不動明王と金比羅堂が再建され、今なお水商売などの庶民信仰を集めている。

法善寺は『難波鑑』によると、「寛永年中のころほひより、千日の念仏をとりたてしより、人こぞりて、千日寺といへり」とある。江戸時代には、同寺開基の日より千日目に千日念仏、二千日目に二千日念仏と、千日目ごとに念仏法要を積み重ね、多くの参拝者を集めていったことがわかる。このおよそ三年に一度の「千日念仏」から、「千日寺」とも呼ばれるようになった（地名「千日前」の由来）。

本図は梅田三昧普門院の練供養を描いた可能性が高いものの、難波法善寺を描いたと仮定するならば、本文の聖武天皇千年忌も右の「千」にまつわる法会と思われ、庶民の念仏信仰を背景にした「千日念仏」とあわせて行われた練供養とも考えられよう。

例えば、大阪市平野区の大念佛寺の練供養は「万部おねり」とも称されるように、明和六年（一七六九）に創始された阿弥陀経一万部を読誦する万部会があわせて行われている。

いずれにせよ、練供養が行われた梅田の寺院の寺院に関しては、大念佛寺や、かつての四天王寺の練供養などとあわせて、研究が進展することを願いたい。

（福原敏男）

第三部 各地の来迎会（練供養）調査報告

# 1 浄真寺じょうしんじ（東京都世田谷区）

## 1 名称

「二十五菩薩来迎会」あるいは「二十五菩薩練り供養」の名称が正式であるが、一般には「お面かぶり」の通称で親しまれている。

## 2 実施期日

平成二十六年までは、三年に一度、八月十六日に行われていたが、平成二十九年以後は五月五日に行われるようになった。

八月十六日の午後には虫干し法要が行われていたが、五月五日の午後には千部法要が行われる。

## 3 実施場所

二十五菩薩来迎会は、九品山 唯在念佛院 浄真寺（以下、浄真寺と表記する）の本堂（龍護殿とも）と上品堂との間に橋をかけて行われる。本堂の正面が上品堂、向かって右手が中品堂、左手が下品堂である。

本堂と上品堂を結ぶ橋には、「善の綱」（晒の布）がはられる。この両端は、本堂の釈迦如来像の指と、上品堂の三体の阿弥陀如来像の指に結ばれた「五色の糸」に繋がる。また、橋の中央付近には大きな塔婆が立てられ、「善の綱」はここにも巻かれる。

## 4 地域

浄真寺は東京都世田谷区奥沢七十四一―三に所在し、周囲は住宅地である。

## 5 組織

二十五菩薩来迎会の行列には、阿弥陀如来と菩薩・付添、僧侶、稚児、振籠ほかが従う。ただし、浄真寺の二十五菩薩来迎会には、来迎・往相・還相の三度の行列があり、それぞれで行列の構成が異なる（後述）。

阿弥陀如来と菩薩は、現在は檀家・信徒に限らず、一般の人々からも希望者を募る。参加する人は、地元の世田谷に住む人が多いようである。

かつて、二十五菩薩来迎会の諸役は、寺から仕事をもらうなどしている出入職の人々や檀家・講の人々によって担われていたが、出入職が少なくなり、講がなくなったことにより、同行事は大きな変貌を遂げている。なお、本堂と上品堂とを結ぶ橋は現在も、出入職によって作られる。

## 6 行事内容

平成二十九年五月五日、二十五菩薩来迎会は、午前十一時と午後四時の二度行われた。



2008年8月16日 浄真寺 二十五菩薩来迎会



2017年5月5日 浄真寺 二十五菩薩来迎会

まず、阿弥陀如来・菩薩（以下、二十五菩薩と表記する）の面を被る人々は装束に着替え、付添の方々とともに本堂を出て、架けられた橋を渡り、上品堂へ入る。上品堂には、二十五菩薩の面が置かれている。

二十五菩薩役が渡り終えると、次に楽人（僧侶）が橋を渡って上品堂へ向かう。

當麻寺の練供養会式は、曼陀羅堂と娑婆堂の往復であるが、浄真寺の二十五菩薩来迎会は、①来迎（極楽浄土より、娑婆へ二十五菩薩が来迎する様子）、②往相（二十五菩薩とともに往生人が極楽に生まれる様子）、③還相（浄土より往生人が娑婆へ戻り、人のために尽くす様子）より構成される。他に比べて、③が有ることが、同行事の特徴である。

#### ①来迎

上品堂より、本堂へ架けられた橋を二十五菩薩ほかの行列が練る。

行列は、楽人、会奉行（僧侶）、二十五菩薩の順である。浄土からの来迎の様子であるので、開山・珂碩上人像は従わない。

二十五菩薩の名称と持物は、次の通りである。

- |          |     |          |    |
|----------|-----|----------|----|
| 1 観世音菩薩  | 蓮台  | 2 大勢至菩薩  | 合掌 |
| 3 阿弥陀如来  | 来迎印 | 4 薬上菩薩   | 玉幡 |
| 5 薬王菩薩   | 幢幡  | 6 普賢菩薩   | 幡蓋 |
| 7 陀羅尼菩薩  | 团扇  | 8 法自在王菩薩 | 百味 |
| 9 白象王菩薩  | 篳篥  | 10 虚空蔵菩薩 | 腰鼓 |
| 11 徳蔵菩薩  | 笙   | 12 宝蔵菩薩  | 龍笛 |
| 13 金蔵菩薩  | 箏の琴 | 14 光明王菩薩 | 琵琶 |
| 15 山海恵菩薩 | 箏篋  | 16 金剛蔵菩薩 | 琴  |
| 17 華嚴菩薩  | 鈺   | 18 日照王菩薩 | 羯鼓 |

19 衆宝王菩薩 擊鏡 20 月光王菩薩 振鼓

21 三昧菩薩 天華 22 獅子吼菩薩 乱拍子

23 大威徳菩薩 風琴 24 定自在王菩薩 太鼓

25 無辺身菩薩（地藏菩薩） 錫杖・宝珠

なお、菩薩たちの所作はない。

#### ②往相

本堂へ入った二十五菩薩は、本尊の釈迦如来を一周した後、本堂より上品堂へと練る。

行列は、来迎の行列の前に振籠（2本）、後ろに散華を撒きながら進む衆僧、開山・珂碩上人の像、稚児、傘を差し掛けられた山主ほかが続く。珂碩上人像を担ぐのは、出入りの職人たちである。振籠は、紙吹雪ほかを振り落としながら進む。

#### ③還相

上品堂に入った二十五菩薩及び会奉行は同堂で待機する。調査者は上品堂内で読経が行われることのみしか確認していないが、昭和三年頃に参観した北野博美の報告（「奥澤九品仏の来迎会に詣て、」）によれば、珂碩上人の像の輿を上品堂の上品上生の阿弥陀如来像の前に据え、読経が行われる。この後、衆僧、珂碩上人像、稚児、山主は、本堂へと練る。これは浄土より往生人が娑婆へ戻る様子である。山主は、橋の真ん中付近（大塔婆付近）で、「なむあみだぶ」と唱えて、人々に「十念」を授ける。

この後、面を外した二十五菩薩が橋を渡って本堂へ入り、同行事は終了する。

#### 7 由来・歴史

山田桂翁『宝曆現来集』卷十（天保二年（一八三一）自序）に「文政十年四月、目黒在九品仏とて寺あり、此寺において毎年四月は千部有けり、今年始め

て極楽の体相を致し、参詣の人々を迷はして金銭を取り、観音勢至二十五菩薩の姿に作りなし、瓔珞法衣を着せて天蓋を拝して」とある。同記事を二十五菩薩来迎会の起源とする見解も有る。なお、これは、同行事を行って取り締まられたとするものである。

大郷良則が文政十年（一八二七）・十一年に見聞したことをまとめた『道聴塗説』四「廿五の菩薩」には、「当住俗才多き故にや、仏の装束、仮面など数多用意し、参詣の者を廿五の菩薩に打扮せ、ねりの行道、毎日三度に及ぶ、希代の奇観なり。件の菩薩にならんとて、我もくと競進み、各金子を納て、我は二度なりたり、三度なりたりといふに至る」、雀庵が天保年間（一八三〇～一八四四）から文久三年（一八六三）にかけてまとめた『さへづり草 むしの夢』には「又因に記す、文政十二年の頃にや、世田谷奥澤村なる九品の浄刹において、是に（二十五菩薩来迎会に；引用者）似たる事ありしとか、されどいさ、か異也、こはその施主願主を観音聖（ついで）至などの菩薩に仕立、諸僧音楽にてこれを警固し堂中を歩行せし也ときけり、か、ればこれは地獄にあらねど、又極楽の沙汰も黄金次第にてせしことなればにや、ほどもなく此れ浮屠家たちもみな罰せられしときけり」とある。

これらも、二十五菩薩来迎会を行い、僧侶が取り締まられたとするものである。年代も文政年間と共通しているため、この頃には、年中行事ではなく臨時に行われたようである。

また、戦前は一日四回～八回、三日間続いたため三〇〇人以上が面をかぶつたとされる。このうち、二〇〇人以上は三浦からの人であった。北野博美「奥澤九品仏の来迎会に詣で、」によれば、昭和三年頃は、八月十六、十七、十八日に行われ、十六日に五回、十七日に二〇回、十八日に三回以上行われたようである。希望者は金二円を奉納すれば、背に「南無阿弥陀仏」の六字を記した白木綿の襦袢などをもらって、行列の一員となることが出来たようである。

また、小寺融吉は「昔に返したい」において、五十銭の時代もあったこと、その頃は男ばかりが面をかぶっていたことなどを述べる。

#### 参考文献

- 北野博美「奥澤九品仏の来迎会に詣で、」（『民俗芸術』創刊号、一九二八年）
- 北野博美「奥澤村九品仏の来迎会」（『民俗芸術』第三卷第九号、一九三〇年）
- 小寺融吉「昔に返したい」（『民俗芸術』第三卷第九号、一九三〇年）
- 『文化財総合調査報告 浄真寺』（世田谷区立郷土資料館編、一九八六年）
- 入江宣子・福原敏男「二十五菩薩練供養」（『東京都の民俗芸能―東京都民俗芸能調査報告書―』、東京都教育庁地域教育支援部管理課編刊、二〇一二年）

（調査年月日 二〇一七年五月五日）

（写真・文責 大東敬明）

## 2 十念寺じゅうねんじ（長野県小諸市）

### 1 名称

一般的には「おねり」と呼ばれるが、「二十五菩薩来迎会」として昭和四十五年（一九七〇年）に小諸市重要無形民俗文化財に指定されている（以下は「来迎会」で統一表記する）。

### 2 実施期日

来迎会には決まった実施の期日はなく、かつては十念寺を信仰の拠り所とした人々の念仏修行のなかで、満願の日に最後をかざるものとして行われていたとされている。また、干ばつの際に雨乞いとして行われることもあったようである。「おねりを行えばたとえ三粒でも雨が降る」と伝えられている。

現在は伝承地域での定期的な実施はないが、近隣の寺院や市のイベント等において実施、公開がされている。小諸市にほど近い上田市の小泉大日堂では、



写真1 仏面、行者像



写真2 十念寺跡

六十年に一度の御開帳（本開帳）と三十年に一度の御開帳（中開帳）の際に来迎会が披露されている。また、小諸市で五年おきに開催される「郷土伝統芸能のつどい」でも一部分ではあるが披露されている。

### 3 実施場所

かつては時宗紫雲山十念寺（長野県小諸市平原区）の境内にて行われていたとされるが、昭和二十四年の火災により十念寺は焼失し、現在は近隣の寺院や市のイベント等において実施されている。来迎会で用いられる仏面（鳥、天人、不動明王等、計二十九面）、衣装、持物等の諸用具は十念寺の本堂とは別棟の蔵に収められていたため火災にはあわず、焼失を免れている。現在、仏面については保存環境や防犯上の観点から地区外の施設で保管がされているが、毎年三月末には、地区公民館で「面出し祭典」と呼ばれる法要が行われ、全ての仏面が一般公開される。かつてはこの面出し祭典でも来迎会の一部が披露されていたが、現在は行われていない。



写真3 二十五菩薩来迎会



写真4 二十五菩薩来迎会

#### 4 地域

来迎会が伝承される長野県小諸市平原区は、長野県の東（東信地域）に位置する小諸市の東部にあり、十念寺は区を横断する北国街道沿いに所在する。

#### 5 組織

来迎会は、平原区の住民によって構成される二十五菩薩来迎会保存会（以下「保存会」とする）がその伝承を担っており、仏面や用具の管理も同時に行っている。この保存会のほかに、十念寺世話人会（以下「世話人会」とする）という組織があり、来迎会披露の依頼があつた場合には、保存会と世話人会が協議をしたうえで可否を決め、加えて菩薩の所作や和讃の稽古等についてもサポートを行っている。

来迎会を行う演者については、小学校高学年から中学校までの男児が、和讃や太鼓の演奏については成人男性が担当し、実施の前に数日間の練習期間を経



写真5 二十五菩薩来迎会



写真6 鳥面、天人面、行者像



写真7 仏面



写真8 仏面

て当日に臨んでいる。十念寺に伝わる来迎会は、菩薩の所作や和讃の調べが独特であるため習得することが難しい。保存会ではこれまでの実施の様子を収めた映像記録を保管し練習に活用する等、保存継承に取り組んでいる。

#### 6 行事内容

来迎会を行う前に、菩薩が渡る来迎橋を架設する。本来は阿弥陀堂と娑婆堂の間に架設するものだが、十念寺の場合には本堂のみで娑婆堂がなかったため、本堂の前に来迎橋を作つて娑婆堂の代わりに張りだしの舞台を作り行者救済の演技を行つていたとされる。現在は披露する場所に合わせて来迎橋を架設している。来迎会の準備が整うと、まずは来迎橋に塩をまいて場を清め、太鼓を演奏する信者が太鼓の前に着座する。来迎会は全ての動作がこの太鼓の音を合図に行われるため、太鼓は重要な役回りといえる。

太鼓の音に導かれ、最初に二人の「鳥面」が来迎橋を渡つて現れる。鳥面は

音に合わせて立ったりしゃがんだりを繰り返しながら中央まで進み、そこで戯れるような所作をした後本堂へ入っていく。次に二人の「天人」が来迎橋を渡って現れる。天人は太鼓の音を合図に腕を広げ、左右に体を揺すりあげる所作を繰り返しながら進み出る。中央まで来ると留まって舞を踊り、舞台上に極楽浄土の雰囲気を作り上げていく。天人が本堂に入ると、紋付き袴姿の数名の信者が来迎橋を渡って太鼓のそばに着座する。彼らは和讃を唱える役割を担っている。

和讃を唱える信者が席に着くと、不動明王を先頭に二十五の菩薩が面と衣装を身に着けそれぞれを象徴する持物を持ち、太鼓の音に合わせて体を左右にねらす独特な所作を繰り返しながら一列に並んで来迎橋を渡る。

全ての菩薩がそろって観音菩薩と勢至菩薩が中央に進み出る。二人の菩薩が進み出ると、太鼓のそばに着座する信者が鉦を鳴らしながら「前願」という和讃を唱えはじめ、その後はこの二人の菩薩によって行者救済の演技が行われる。

写真9 面保管箱

来迎会のなかで唱えられる和讃「前願」は四節で構成されており、行者救済の場面が描かれている。最後の第四節で行者が救済されると、二人の菩薩はそのほかの菩薩の列に戻り、すべての菩薩がそろって整列したところで、太鼓の音に合わせてゆっくりと本堂のなかに入っていく。

全体でおよそ一時間半を要し、その間、菩薩を演じる演者たちは体の大部分を覆う衣装を身に着けて極端に視野の狭い面を被って動くため疲労が大きい。

く、なかには体調を崩して倒れてしまう演者もいるという。

## 7 由来・歴史

十念寺は、正和二年（一一三三）に大元によって創建された時宗の寺院で、踊躍念仏の道場として周辺の人々の信仰の拠り所であったとされている。来迎会については、恵心僧都（源信）によって平原の地にもたらされたと言われているが、どのように伝わり現在の形となったかは明確な史料がないため定かではない。来迎会に使われる仏面のうち古いものから推察すると、伝わったのは室町時代中期頃ではないかとされている。

十念寺で念仏修行が盛んに行われていた江戸時代には、若者たちによって長い時には三十日間という期間をかけて修行が行われていたとされている。時代を経るに従って次第に簡略化され日数は減るものの、近隣の村々からの「助念仏」も参加し、多くの若者が交代しながら昼夜を通して鉦切らずの念仏を唱えていたという。昭和に入り戦争の影響で一時途絶えることもあったが、昭和二十七年に「二十五菩薩来迎会」として助成の措置を講ずべき無形文化財に選定されたことを契機に保存の機運が高まり、当時の古老への聞き取りを基に平原区の住民の努力によって来迎会は復興を遂げ、現在まで継承されている。

\*

最後に、本調査に際し二十五菩薩来迎会保存会様からは写真をはじめとした資料の提供等多くの協力を受けたことに感謝の意を表します。

### 参考文献

- 『小諸市誌 歴史篇（一）』（小諸市誌編纂委員会編、小諸市教育委員会、一九七九年）
- 永原秀山「十念寺の『お練り』」（『文化財信濃』第十四巻第二号、長野県文化財保護協会編、一九八七年）
- 『無形文化財二十五菩薩来迎会』（二十五菩薩来迎会保存会、一九九一年）



- 宮林昭彦『探訪・信州の古寺第2巻 浄土教・日蓮宗』（郷土出版社、一九九六年）
- 『小諸の文化財』（長野県小諸市教育委員会、一九九九年）
- 『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―』（龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）

（調査年月日 二〇一九年十月十五日・十八日）

（写真 二十五菩薩来迎会保存会提供、文責 村田幸子）

### 3 蓮華寺（愛知県あま市）

#### 1 名称

「はちすか弘法二十五菩薩練供養会」、「来迎会」などと呼ばれ、あま市指定無形民俗文化財としての名称は、「二十五菩薩お練り供養」となっている。

#### 2 実施期日

毎年四月第三日曜日の蜂須賀弘法大師開帳の日に行われる。調査年の平成三十一年は、四月二十一日に行われた。二十年程前までは、四月二十一日と日が定まっていたという。

また、十七年に一度、愛西市西條町西條八幡神社の境内にある勝軍延命地蔵菩薩の御開帳に合わせて蓮華寺から練供養の出開帳が実施される。近年では平成三十年九月二日に行われた。

#### 3 実施場所

練供養は、池鈴山蓮華寺（愛知県あま市蜂須賀大寺一三五七、真言宗智山派）の境内の大師堂及び来迎橋で行われる。

また、前述の十七年に一度の出開帳では、林證寺（愛西市西條町）から勝軍延命地蔵堂までお練りが行われる。

#### 4 地域

蓮華寺は、あま市北西部の蜂須賀に位置する。あま市は、平成二十二年に海部郡の七宝町・美和町・甚目寺町の三町が合併し誕生した。元は海部郡美和町で、旧村では、旧蜂須賀村にあたる。旧蜂須賀村は、丹波、中橋、蜂須賀、目比の四つの字からなる。丹波、中橋、蜂須賀はあま市であるか、目比は、稲

沢市となっている。

#### 5 組織

僧侶、行者衆（二十五名）、稚児、花籠、取り持ち等が関わる。

蓮華寺の住職が練供養を取り仕切り、法類の寺や近隣関係の寺から来た手伝いの僧侶がそれを補佐する。蓮華寺の法類となっている寺は、吉祥寺（津島市）、千手寺（愛西市）、坂中地教会（弥富市）、高福寺（一宮市）で、近隣関係寺院として、不動院（津島市）、恵林寺（名古屋市）、長曆寺（稲沢市）、地泉寺（愛西市）、宝寿院（津島市）、自性院（大治町）などからもきてもらっているという。

菩薩に扮する人々は、「行者（衆）」と呼ばれ、男女を問わず、二十五名が出る。その内訳は、旧蜂須賀村の四つの字の同行組から各二名、愛西市西條町の勝軍延命地蔵の崇敬者から二名、一月に行われる一般募集に申し込んだ人で、おおよそ半分ずつになるという。どの菩薩の面をつけることになるかは、事前には知らされていない。当日、授与されるお守りの中からそれぞれが一つ選び、そのお守りの裏に番号と菩薩名が記されており、記された菩薩になるということであった。

稚児は、主に未就学児で、練供養の際には、菩薩役に先駆けて大師堂から来迎橋を渡る。調査年は、男児一名、女児一名の二名だった。

花籠は、花の造り物を持ち、先導して歩く役割があり、男性二名が担当する。取り持ちは、あま市の森山地区、篠田地区、北苅地区の同行の男女が務め、大師堂での受付、練供養で菩薩役の人びとが来迎橋を渡る際に、掴むロープの調整や前後の間隔を開けるように伝える役割等をしていた。

## 6 行事内容

まず、旧蜂須賀村の同行の男性らを中心に、幟や吹き流しを一週間前に準備し、来迎橋（棧橋）は前日に設置する。また、旧蜂須賀村の同行の女性らを中心に大師堂の掃除を行い、篠田の同行の人たちは奥の院の掃除を行う。二十五菩薩面や衣装・各種の持物の準備は寺側が前日に行う。

調査年の練供養では、行者衆は、一三時頃に客殿に集まり、住職の挨拶後、二十五菩薩の歴史と菩薩になるといふこと、修行の心がけなどの話を聞き、二時頃から浄食（精進料理）を食す。精進料理は、住職らが用意し、竹の子ごはん、竹の子汁、胡麻豆腐、山菜やお神酒などである。一三時半前に、お授けと金剛身があり、お授けで、どの菩薩となるかがお守りを取ることによって決まり、金剛身で身を清めた上で腕に金剛線（腕輪）をつける。

大師堂では、一二時前には、来迎和讃のテープが流され、練供養で行者衆がつける菩薩面や、各種の持物が並べられ、行者衆が座る椅子の上に黄色の手袋が置かれていた。



写真1 参拝者に散華、福餅やお菓子を授ける行者衆

一三時には、来迎橋を取り囲むように、参拝者が集まっていた。一三時頃になると、来迎橋の上で、太閤連による徳島阿波踊りが一時間弱の間、披露される。これは、当地の出身の戦国武将である蜂須賀小六正勝の息子家政が阿波国を治めたことを縁として、平成十八年頃から弘法大師開帳の日に行われるようになったという。

十四時になると、大師堂（極楽浄

土に見立てられる）の喚鐘が打ち鳴らされ、来迎橋の下で待つ人々に対して僧侶らが塗香と洒水を施す。その後、行者衆は面を付けずに、来迎橋を散華と「福の餅」、お菓子などを撒きながら進み「写真1」、大師堂に入る（稚児も一緒に入る）。大師堂の中で、行者衆らは、黄色の手袋をつけ、菩薩の面をかぶり、それぞれの菩薩に伴う持物を持ってお練りの順序に並ぶ。

大師堂を花籠、稚児が出た後に、二十五菩薩が来迎する。二十五菩薩に扮する行者衆の後ろに僧侶が続く。練供養では、来迎橋を往復する「写真2」。来迎橋を往復する間、二十五菩薩は来迎橋の下に集まった参拝者の頭を撫でさせる「写真3」。菩薩に頭を撫でもらうことで厄難が払われるとされ、多くの参拝者が合掌の上、頭を撫でもらっていた。

なお、二十五菩薩の順序は以下の通りである。一、観世音菩薩 二、大勢至菩薩 三、薬王菩薩 四、薬上菩薩 五、華嚴菩薩 六、大威徳菩薩 七、虚空蔵菩薩 八、徳蔵菩薩 九、寶蔵菩薩 十、白象菩薩 十一、金剛蔵菩薩 十二、光明王菩薩 十三、獅子吼菩薩 十四、日照菩薩 十五、衆宝王菩薩



写真2 お練りの様子



写真3 参拝者の頭を撫でる菩薩

十六、陀羅尼菩薩 十七、法自在菩薩 十八、普賢菩薩 十九、三昧菩薩 二十、金藏菩薩 二十一、大自在王菩薩 二十二、山海惠菩薩 二十三、月光菩薩 二十四、定自在菩薩 二十五、無辺身菩薩（地藏）。

十五時前に、お練りを終え、大師堂にて厄除け大護摩供法要が行われた。

法要では、護摩が焚かれる中、読経が続き、菩薩を務めた行者衆の名前と住所が読み上げられた。般若心経が唱えられる中、ご開帳された弘法大師に参拝が行われる。法要の終わりには、「願わくは此の功德を以て あまねく一切に及ぼし 我らと衆生と皆共に 仏道を成ぜんことを 南無大師遍照金剛」が唱えられ、喚鐘が打ち鳴らされた。

来迎橋は法要が終わると、すぐに解体される。菩薩面は汗などが拭きとられた後、片づけられ、衣装はクリーニングに出される。各種持物は、平成三十年にかけて数回に分け新調したという。

## 7 由来・歴史

『美和町史』（五〇六頁）によれば、蓮華寺の二十五菩薩の由来は、以下の通りである。

「元亀二辛未年（一五七二）九月十二日、織田信長が比叡山を焼き打ちにした時に、兵火のなかから一人の僧が現れ、恵心僧都が描いた二十五菩薩来迎の一軸であると述べ、軍士に託したことから焼失を免がれることができた。

織田家の家臣の戸田六左衛門政勝が、この仏画を乞い受けて清洲に持ち帰り奉祀した。その子の戸田平左衛門政勝が、慶長十三戊申年（一六〇八）、菩提を弔うために当寺に奉納したので、以来、事あることに来迎会を修してきたものであるといわれている。

なお、二十五菩薩の面は、天保十三年（一八四二）に大阪一心寺で出開帳の節に作られ、それ以降行列が行われるようになったといわれている。」

現在、蓮華寺には、二十五菩薩来迎の仏画はないということであるが、前述した菩薩面は残されている。

## 8 記録類

練供養に関する縁起などを記したものは寺の資料としてはないということであった。『名古屋叢書三篇 第五卷』の「尾張年中行事絵抄 上」には、「蜂須賀弘法大師御影供結日骨堂供養」の様子を描いた絵があるが、二十五菩薩面をかぶった練供養の様子は見られず、僧侶らの行道の様子のみである。

\*

最後に、本調査に際し、蓮華寺の三輪照法ご住職、並びに、あま市生涯学習課文化振興係美和歴史民俗資料館の近藤博様より行事次第や関連資料等についてのご教示をいただいたことに感謝の意を表します。

### 参考文献

- あま市公式ホームページ  
<https://www.city.amachi.jp/index.html>（最終閲覧日：二〇一九年九月二十九日）
- 「尾張年中行事絵抄 上」（『名古屋叢書三篇 第五卷』、名古屋蓬左文庫編、名古屋市教育委員会、一九八八年）
- 「美和町史」（美和町史編さん委員会編、愛知県海部郡美和町、一九八二年）

（調査年月日 二〇一九年四月二十一日・九月二十四日）

（写真・文責 猪岡叶英）

## 4 地蔵堂（愛知県愛西市）

### 1 名称

勝軍延命地蔵の御開帳の期間中に「二十五菩薩のお練り」が行なわれる。

### 2 実施期日

勝軍延命地蔵の御開帳は、十七年に一度（実際は十六年に一度）開催される。近年の御開帳は、平成三十年八月二十六日から九月十五日であった。九月二日には中開帳があり、この日に「お練り」が行なわれた。

### 3 実施場所

八幡社（愛知県愛西市西條町二町田三五）の境内にある地蔵堂において勝軍延命地蔵の御開帳が行なわれる。練供養は、この地蔵堂の東方にある真宗大谷派の林證寺（愛西市西條町伊重一・二）を出発し、地域を約一時間程度練り歩き、地蔵堂に到着する。

### 4 地域

愛西市は愛知県の西部に位置している。この地域は土地が海水面より低い、いわゆる「海拔0メートル地帯」で、市の西方には一級河川（木曾川・長良川・揖斐川）が流れ、木曾川の伏流水による河川も多い。平成十七年に海部郡佐屋町・立田村・八開村・佐織町が合併し誕生した市である。林證寺と八幡社、地蔵堂は旧佐屋町域に位置する。

### 5 組織

勝軍延命地蔵の御開帳は、西條地蔵尊御開帳奉讃会が中心となって行なわれ

る。

また、中開帳に合わせて行なわれるお練りには、僧侶・二十五菩薩の面を被る者（二十五名）、稚児等が関わる。平成三十年のお練りには約三〇〇名もの稚児と一緒に練り歩いた。面を被る者は、かつては地元の青年団であったが、現在は西條町や、その周辺に在住する若者が中心となっている。

なお、一連の法要については池鈴山蓮華寺（愛知県あま市蜂須賀大寺一三五七、真言宗智山派）の住職が関わっている。

### 6 行事内容

御開帳は平成三十年八月二十六日に行なわれた。大きくは初開帳、中開帳、開帳という三つの行事からなる。

初開帳では、あま市の蓮華寺の住職が法要にあわせ、地蔵堂の厨子に納めら



写真1 お練りのようす



写真2 御開帳のようす

れた勝軍延命地蔵の御開帳を行なう。この勝軍延命地蔵は、平安時代、桓武天皇の時代に伝教大師最澄が自ら彫刻したものと伝えられる。この仏像に祈れば願力が叶うとされており、現代では安産のご利益を祈願する多くの参詣があるという。

中開帳の九月二日の午後には、法要の後、二十五菩薩のお練りが行なわれる。花火の合図をもとに行列が出発する。行列は林證寺を出発し、反時計回りに町内を進む。最終地点は勝軍延命地蔵の地蔵堂で、地蔵堂を一周して終了となる。おおよそ一時間ほどの行事となる。最後には餅ホカリ（餅まき）が行なわれる。

勝軍延命地蔵の右手宝珠から延びる「善の綱」が西條町内を巡っており、この「善の綱」に沿って行列が進むことになっている。お練りの行列は、楽人・氏子役員・二十五菩薩・来賓・稚児（散華を撒く）の順番を基本とし、稚児の後ろに稚児の保護者などが続く。沿道では、人びとがご利益にあやかるため、二十五菩薩に触れてもらおうと頭を垂れる光景が見られる。

最終日の九月十五日には、厨子の扉が閉じられて、一連の行事が終了する。

#### 設備・道具

勝軍延命地蔵の御開帳の中開帳の日に行なわれる「お練り」で用いられる二十五菩薩面や衣装は、蓮華寺で所有されているものである。蓮華寺は勝軍延命地蔵が収められている厨子の鍵を管理している。

なお、勝軍延命地蔵は「木造勝軍延命地蔵菩薩立像」として愛西市指定文化財となっている。

## 7 由来・歴史

勝軍延命地蔵は地蔵堂に隣接する八幡社（県指定文化財・文明二年の棟札あり）に安置されていたことが縁起や棟札で確認することができ、江戸時代に分離されたことがわかっている。

当地の勝軍延命地蔵の御開帳時にお練供養が行なわれる理由や時期については不明である。氏子らは「前回に御開帳した時と同じように実施する」ことを第一として、この行事を伝えている。

\*

最後に、本調査に際し、写真資料の提供など、愛西市教育委員会の高橋秀光氏にご協力を頂いたことに感謝の意を表します。

#### 参考文献

- 『佐屋町史 資料編四』（佐屋町史編纂委員会編、佐屋町史編纂委員会、一九八八年）
- 『勝軍延命地蔵大菩薩御開帳記念』（愛西市西條町、二〇一八年）
- 〔映像〕 『勝軍延命地蔵大菩薩御開帳記念』（クローバーTV、二〇一八年）

（調査年月日 二〇一九年十二月二十四日）

（写真 愛西市教育委員会提供、文責 上田喜江）

## 5 西蓮寺さいれんじ（三重県伊賀市）

### 1 名称

廿五菩薩練供養

### 2 実施期日

平成二十九年まで四月十二日に行われていたが、平成三十年は四月十五日（日）に変更になった。これは日曜日に行うことで、多くの人に参加してもらうためである。

廿五菩薩練供養は天台真盛宗の宗祖、また西蓮寺の中興の祖である真盛上人御遠忌法要の際に行われるものであり、法要は四月十一日が建夜、十二日が本日であった。

### 3 実施場所

天台真盛宗別格中本山 醫王山無量壽院西蓮寺（三重県伊賀市長田ながた一九三一）において行われる「写真1」。

### 4 地域

伊賀市長田は伊賀市西部に位置し、伊賀地域の中心である旧上野市街からほど近い地域である。集落内には氏神である射手神社いけ、天台宗の常住寺等がある。

西蓮寺は比自山の東麓に鎮座し、



写真1 雲上橋と本堂

この地で遷化された真盛上人の本廟がある天台真盛宗別格中本山である。本尊は阿弥陀如来。伊賀城代家老藤堂采女家の菩提寺でもあり、芭蕉の高弟服部土芳の墓所もある。

### 5 組織

この行事に関わるのは、西蓮寺山主（住職）等、寺関係者、西蓮寺末寺二十九ヶ寺1の他、西蓮寺の檀家となる。檀家は地元である伊賀市長田、旧上野市街等に約五五〇軒、大阪府や京都府、奈良県等に約四一五軒となる。長田の家々はすべて西蓮寺の檀家である。檀家のうち長田と上野等から選出された総代九名がこの行事を取り仕切る。またその下の世話人が三十名おり、様々な準備に当たる。

菩薩の面をかぶる人は、西蓮寺の檀家の人が十五名、末寺の檀家が十名、ここにそれぞれ介添人がつき、二十五組となる。年明け頃から長田なら各小字から、他の地域はそれぞれに役員が菩薩役になってもらえる人を選出する。末寺の人は寺自体が毎年当たるわけではないので、様々な人が選ばれるが、長田の人は小字こざから選出されるのでここ数年同じ人が当たっているということもある。誰がどの菩薩面をかぶるか決まっていないが、二十五菩薩の先頭と最後尾は西蓮寺の檀家が務めることが多く、真ん中に末寺の檀家が並ぶことが多い。また七十歳前後の人が多いが、年齢も決まっていない。男女にも決まりはなく、夫婦や友達が菩薩役と介添人の組になることが多い。

稚児は、三歳から小学校五年生頃までの男児女児。昨年までは日曜日の行事ではなかったのですが、平成三十年は十六人集まったという。楽を演奏する楽人は長田の射手神社の楽人をお願いしている。また、ご詠歌を奉納するのも地元の檀家の人々である。

## 6 行事内要

行事に先立ち、二週間前頃（平成三十年は四月一日）に菩薩役や稚児は西蓮寺から委嘱状をもらい、菩薩役、また稚児は保護者とともに説明会に参加する。説明会では食事が提供され、リハーサルも行われる。

当日は午前中に真盛上人御遠忌法要を行い、午後、廿五菩薩練供養となる。

一時五〇分、僧侶が藏心院へ列を組んで向かう。藏心院は、地藏菩薩が祀られている堂であり、この行事では現世世界を表す。

二時、楽人・ご詠歌の人々は行列には加わらず、本堂で待ち受ける。先にご詠歌があり、楽人は演奏が始まり練供養となる。

藏心院から練供養の行列が発する。終始、紅白の幕を張った雲上橋の上を渡る。まず本堂の前を通り、寺務所の前で左手に折れ、本廟のほうへ上がり、また左に折れ、極楽浄土を表す本堂に入る。平成二十六年までは練供養の行列は地上を歩いてきた。しかし、総代などから菩薩は橋の上で歩いてもらおうという案が出て、平成二十七年より一m八〇cmの高さの雲上橋を設け、行列が橋の上を歩くようになった。しかし、

高すぎて危ないことと、その高さのため手すりを付けたことよって見栄えが良くないこと等から平成三十年は雲上橋の高さを九〇cmにするこ  
ととなった「写真2」。

行列は、総代、僧侶の後、二十五菩薩が続く。二十五菩薩は①無辺身菩薩（地藏）、②観世音菩薩、③大勢至菩薩、④薬王菩薩、⑤薬上菩薩、⑥普賢菩薩、⑦法自在王菩薩、⑧獅



写真2 雲上橋の設置



写真3 お練りの様子（地藏菩薩）



写真4 お練りの様子

子吼菩薩、⑨陀羅尼菩薩、⑩虚空蔵菩薩、⑪徳蔵菩薩、⑫宝蔵菩薩、⑬金剛蔵菩薩、⑭金蔵菩薩、⑮光明王菩薩、⑯山海慧菩薩、⑰華嚴王菩薩、⑱衆宝王菩薩、⑲月光王菩薩、⑳日照王菩薩、㉑三昧王菩薩、㉒定自在王菩薩、㉓大自在王菩薩、㉔白象王菩薩、㉕大威徳王菩薩、となる。その後、末寺の僧侶、稚児、山主、稚児と続く。稚児は往路のみの参加で、本堂に到達すると解散となる。地藏菩薩が二十五菩薩の先頭を行くのは、真盛上人が地藏菩薩の化身であるという伝承があり、藏心院で地藏菩薩をお祀りしているからであると思われる。また、現在のように雲上橋が架けられる以前は、地藏菩薩は大きな杓を持ち、ここに賽銭を入れてもらうようにしていたという。橋が架けられてからは危険であるという理由からなくなった「写真3・4」。

行列着座の後、堂内では法要が始まる。

二時五三分、山主の法話も終わり、退堂となる。

三時、二十五菩薩は雲上橋の上に残り、参拝の人々に向けて餅撒きが行われる。



写真6 面と衣装



写真5 餅撒き

三時八分、餅撒きが終了すると、参拝の人々は三々五々帰っていく。総代や世話人は片付けに入る。また集合写真を撮る〔写真5〕。

## 7 由来・歴史

この行事の古い記録として、藤堂藩伊賀城代家老日誌を翻刻した『序書類編』の文化四年（一八〇七）二月二十一日の項に「西蓮寺練供養之義願出候段奉行申出候事」とあることから、すでにこの頃には行われていたことがわかる。しかし、いつ始まったのかを示す記録は残っていない。また、その後においても中断等あり、古い形がそのまま残っているわけではない。昭和八年の集合写真が二枚残されている。この時には現在と変わらず、菩薩や稚児の姿がある。一枚は境内で写されているようであるが、もう一枚は道路で写されており、現在のように寺の境内ではなく、外に出て練られていた可能性も考えられる。

平成十二年には、天台真盛宗の総本山である西教寺（滋賀県大津市坂本）で行われた不断念佛相続十八万日<sup>2</sup>において、西蓮寺が廿五菩薩練供養を行っている。

西蓮寺ではここに宗祖の本廟があることから、御遠忌法要を特に大切にし、それとともに行われる廿五菩薩練供養を残そうと試行錯誤をされている。行事の古い形は残らずとも、信仰の心は見取れる。

また、衣装や面については、平成二十七年頃に、その前のものが痛んできたので新調したという。古い衣装や面に墨書等は記されていない。〔写真6〕

## 参考文献

- 『醫王山―西蓮寺写真集―』（西蓮寺写真集編集委員会、二〇〇五年）
- 『伊賀市史 第二巻 通史編 近世』（伊賀市、二〇一六年）
- 加藤綾香「西蓮寺の来迎信仰について」（帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要）第一六号、帝塚山大学大学院人文科学研究科、二〇一四年
- 『日本歴史地名大系 二四 三重県の地名』（平凡社、一九八三年）

1 末寺の数は、加藤綾香「西蓮寺の来迎信仰について」の記載による。また、末寺は旧阿拝郡に多く存在し、京都府や奈良県にもある。

2 文明十八年（一四八六）真盛上人は西教寺に入り、不断念仏の道場とし、弥勒菩薩が衆生救済に現れるとされる五六億七千万年後まで念仏を絶たないという誓願を立てた。西教寺では真盛上人遷化後、二万日ごとに萬日法会を行っている。

（調査年月日 二〇一八年四月十二日・十五日）

（写真・文責 奥村晃代）

## 6 新善光寺しんぜんこうじ（滋賀県栗東市）

### 1 名称

平成二十二年催行時の呼称は「二十五菩薩来迎会式」である。他に「聖衆来迎楽」（近江栗太郡高野郷新善光寺縁起）（栗太郡志 卷五）所収、「新善光寺二十五菩薩練供養」（新善光寺廿五菩薩練供養版本）（里内文庫No.三七一七）とも記される。

### 2 実施期日

不定期に開催され、昭和二十八年善光寺から阿弥陀如来を新善光寺に分身した七〇〇年記念法要、昭和五十六年の本堂改修供養、平成九年山門改修供養、平成二十二年法然上人八〇〇回遠忌供養など、大きな法要に合わせて実施されている。他に、平成十一年には「二十五菩薩練供養」として練り供養単独で実施された。また現任職によると、明治期（昭和初期ごろには春の彼岸会の一部として練り供養がなされていた。他に、平成十一年には「二十五菩薩練供養」として練り供養単独で実施された。また現任職によると、明治期（昭和初期ごろには春の彼岸会の一部として練り供養がなされていた。

### 3 実施場所

浄土宗九品山新善光寺（滋賀県栗東市林二五六）で行われる。臨時に新善光寺境外に娑婆堂（山門や同寺総代の家、公民館

### 4 地域

などが宛てられる）が設けられる。極楽に見立てた本堂と娑婆堂を行き来する。新善光寺が位置する栗東市は滋賀県南部に位置している。市域は南北に長く、琵琶湖岸に向かって伸びる北側の平野部には旧東海道、旧中山道が通過している。また南側には山がちな地形が広がり、天平五年（七三三）に良弁が開いたと伝わる金勝寺こんしょうじが営まれる金勝山こんせやまなどが連なる。

新善光寺は旧東海道に面した大字林はやしの集落にある。建長五年（一一五三）、夢告を得た高野宗正が信濃国善光寺の阿弥陀如来の分身を請来したことに始まり、文化三年（一一八〇）に描かれた「東海道分間延絵図」にもその伽藍が描かれる。林の集落には新善光寺のほか、浄土真宗本願寺派の長徳寺があり、林の集落の多くは長徳寺門徒である。一方、善光寺本尊の分身の阿弥陀如来を本尊とする新善光寺は林のみならず、近隣の村々から信仰を集める寺院である。

### 5 組織

毎年の彼岸会で行われていた時代のことは不明だが、不定期に開催されるようになってからは練り供養のためだけの組織はなかった。練り供養を行うことが決まると、寺が中心となって準備が進められる。

また、平成二十二年の催行を契機とし、催行直後に新善光寺二十五菩薩来迎会式奉賛会が組織され、定期的に練り供養を実施することとされたが、その後令和元年に至るまで実施されておらず、組織は現在休止状態である。

菩薩面は別表のとおり、二五面と地藏菩薩一面の計二六面ある。定期的に行われていた昭和初期までは一〇〜一五歳くらいの男児がこの面をつけた。昭和五十六年以降は、男女を問わず、父母ら近親者の極楽往生を願う成人の希望者が菩薩役となる。



昭和28年善光寺如来分身七〇〇年記念法要  
後列2・3列目が菩薩役 新善光寺提供

別表 菩薩名・持物一覧

No.	菩薩名	持物
	地藏菩薩	錫杖
1	觀世音菩薩	蓮台
2	大勢至菩薩	合掌
3	藥王菩薩	幢幡
4	藥上菩薩	幢幡
5	普賢菩薩	幡蓋
6	法自在王菩薩	華鬘
7	獅子吼菩薩	鼓
8	陀羅尼菩薩	(舞いながら袖を持つ)
9	虚空蔵菩薩	腰鼓
10	徳蔵菩薩	笙
11	宝蔵菩薩	笛
12	金蔵蔵菩薩	琴
13	金剛菩薩	箏
14	光明王菩薩	琵琶
15	山海慧菩薩	筚篥
16	華嚴王菩薩	磬
17	衆宝王菩薩	鏡
18	月光王菩薩	振鼓
19	日照王菩薩	羯鼓
20	三昧王菩薩	天華
21	定自在王菩薩	太鼓
22	大自在王菩薩	華幢
23	白象王菩薩	宝幡
24	大威徳王菩薩	曼珠
25	無辺身菩薩	焼香

## 6 行事内容

新善光寺山門、あるいは同寺総代宅、公民館などを娑婆堂とし、本堂を極楽に見立てる。地藏菩薩を先頭にほかの二十五菩薩が本堂を出て娑婆堂まで練り歩き、極楽往生を願う身内の位牌を取りに行く。位牌を手にした菩薩は娑婆堂から本堂へと練り歩く。

なお、平成十一年催行分については次第の記録があるのでここに記す。菩薩役は新善光寺内で着付けをし、面をつけて本堂に入り、その後僧侶も本堂に入る。本堂で出発法要が行われ、御詠歌がうたわれる。御詠歌開始をきっかけに、僧侶が席を立つ。本堂正面には本堂下に降りる仮設のスロープが設置されており、僧侶がスロープを降りたところで、本堂下で待機していた先払い役と総代が先頭にたち、僧侶、同じく本堂下で待機していた稚児が続く。稚児のあとに地藏菩薩と二十五菩薩が続く。行列は林の地域内を練り歩き、娑婆堂となつている林公民館を目指す。娑婆堂では諸霊供養法要が行われ、菩薩役はそれぞれ供養したい人物の供養札を胸に納める。法要が終了すると、再び同じ順番で行

列をなし、本堂へ向かう。本堂へ到着すると稚児は本堂前に留まり、僧侶、地藏菩薩と二十五菩薩は仮設スロープを通つて本堂へ入る。本堂では来迎法要が行われる。法要では開経偈が詠まれ、僧侶二名が左右に分かれて菩薩役から供養札を回収する。回収した供養札は本尊前の別の僧侶二名に渡され、三宝に乗せられて本尊前に置かれ、法要は終了する。なお、本堂出発から帰着までの行列で、菩薩役が特別な所作を行うことはない。

## 7 由来・歴史

『栗太郡志 卷五』（栗太郡役所、一九二六年）の新善光寺の項には、寛文二年（一六六二）に同寺を庇護した膳所藩主本多俊次が記した「近江栗太郡高野郷新善光寺縁起」を収録しているが、その中に同寺の「御縁日」として複数の日程が記されている。この御縁日のひとつとして「春彼岸聖衆来迎楽」がある。これに従うと、寛文二年にはすでに春彼岸に合わせて練り供養が行われていたことになるが、春彼岸の内容としてもうひとつ「戦死者回向」とある。ただし、「戦死者」という表現は近世ではあまり見られない近代的な表現であるので、取り扱いには注意が必要だ。残念ながら本多俊次が記した「近江栗太郡高野郷新善光寺縁起」の原本を確認することができないが、御縁日の部分は後筆の可能性も考えられる。

前述したとおり住職によると、明治期から昭和初期は春の彼岸会の際に練り供養が行われており、『栗太郡志 卷五』の記述とは一致する。新善光寺の彼岸会は大変にぎやかなもので、林の集落を通過している草津線に臨時停車場を設けることもあったほどである。地域の一大イベントであった彼岸会の一幕として練り供養が行われたのだろう。

新善光寺の練り供養は資料が限られているが、栗東歴史民俗博物館には「新善光寺廿五菩薩練供養版木」（里内文庫No.三七一七）や、「善光寺如来御分身



新善光寺二十五菩薩練供養版木（湿拓反転）  
栗東歴史民俗博物館提供

七〇〇年記念大法要チラシ」（里内文庫No.六九四五のうち）にその痕跡が残る。前者は年代不明の版木で、「五月十五日ヨリ廿一日マテ／近江新善光寺／廿五菩薩練供養／稚児音楽大法要／北ほりえあみだ池」とある。なお北堀江の阿弥陀池には新善光寺と同様、信濃国善光寺の阿弥陀如来の分身を本尊とする和光寺がある。後者は「善光寺如来御分身七〇〇年記念大法要」として昭和二十八年四月十一日から十三日の三日間法要を行うことを告知し、初日の四月十一日は御詠歌舞奉納を、十二日は万霊永代回向として廿五菩薩稚児練供養を、十三日は戦没者追悼大法要を行うことが記される。

新善光寺に伝わるように、同寺では一定の期間、春の彼岸会に二十五菩薩による練り供養が行われていたのだろう。それとは別に何らかの法要に合わせたりして、練り供養が行われていたのだろう。定期の練り供養は昭和初期に断絶し、以後は大きな法要に合わせて練り供養が行われてきた。

なお、面は二十五面と地藏菩薩が一面の計二十六面あり、昭和五十六年の催行

にあたって、修理が行われた。衣装についてはこのとき新調されている。

## 8 記録類

「新善光寺廿五菩薩練供養版木」（栗東歴史民俗博物館蔵 里内文庫No.三七一七）  
「善光寺如来御分身七〇〇年記念大法要チラシ」（栗東歴史民俗博物館蔵 里内文庫No.六九四五のうち）

## 参考文献

- 『栗太郡志 卷五』（栗太郡役所、一九二六年）
- 「京都新聞」二〇一〇年九月二十四日付け朝刊（滋賀版）
- 「京都新聞」二〇一〇年一〇月十一日付け朝刊（滋賀版）

（調査年月日 二〇一九年十月二十二日）

（文責 大西稔子）

## 7 阿弥陀寺（滋賀県栗東市）

### 1 名称

阿弥陀寺で来迎会が初めて行われた嘉永二年（一八四九）の記録では「二十五菩薩接会式」と記される。

昭和五十四年に遠忌法要に合わせて行われた際には二十五菩薩を含む御詠歌隊・僧侶・稚児などの行列全体を「お練り」と呼び、特別な名称は用いず、法要に伴う行列の一部として行われた。

### 2 実施期日

不定期に開催される。近年では昭和三十五年ごろ、昭和五十四年に行われた。昭和五十四年は善導大師一三〇〇年遠忌・法然上人降誕八五〇年遠忌法要の際に合わせて行われた。

### 3 実施場所

浄土宗金勝山阿弥陀寺（滋賀県栗東市東坂四六八）において行われる。総代の家から村内を練り歩き、阿弥陀寺本堂に至る。

### 4 地域

阿弥陀寺が位置する栗東市は滋賀県南部に位置している。旧近江国栗東市に市域全体が含まれる。旧栗東市にはほかに、草津市域の全域、守山市域、大津市域の一部が含まれる。

市域は南北に長く、琵琶湖岸に向かって伸びる北側の平野部には旧東海道、旧中山道が通過している。また南側には山がちな地形で、天平五年（七三三）に良弁が勅願により開いたと伝わる金勝寺の営まれる金勝山などが連なる。

阿弥陀寺は南側の山がちな地形にある大字東坂の集落にあり、応永二十（一四一三）年、隆堯がこの地に草庵を結んだことに始まる。

東坂にはほかに宗安寺がある。いずれも浄土宗寺院で東坂の集落の檀那寺はこの宗安寺であり、阿弥陀寺は近世においては近隣の末寺を束ねる浄土宗の本山であり、近年は浄土宗知恩院滋賀教区金勝支部を構成する一二寺院の中核をなす寺院となっている。

なお栗東市域には旧東海道、旧中山道が通過するほか、東坂の集落には旧東海道から分岐し、石部へ抜ける中郡街道が通過している。

### 5 組織

大規模法要に合わせて不定期に開催されるため、練り供養のためだけの組織はない。

昭和期に限ると、大規模な法要は阿弥陀寺が位置する東坂を含む金勝地域（現在の大字上砥山・御園・東坂・井上・観音寺・荒張の範囲）の浄土宗寺院一二寺院とその総代・檀家たちが運営する。この寺院・総代たちが遠忌法要に合わせて練り供養を催行するかどうかを決定する。法要全体を催行するのは、この一二寺院と総代で、練り供養は、一二寺院のうち阿弥陀寺、薬師寺（蔵町※大字御園のうち）、善徳院（観音寺）の三寺院と総代が運営する。お練りの催行が決定すると、三寺院の総代はそれぞれの集落で菩薩役に相応の年齢の男子がある家に打診して決定する。菩薩役は小学校高学年程度から中学生程度の男子が担当。なお菩薩役を希望する場合は一定額の寄進が必要となる。

なお、嘉永二年に初めて練り供養が行われた際は、蔵町の発起人が中心となって催行にかかる寄進を集め、東坂、蔵町を含む金勝地域の村々はもとより、草津や石部、信楽、水口など広い範囲から寄進を集めている。また菩薩役も金勝地域を中心としながらも、同様に広い地域から担っており、昭和期よりも広範

囲に支える村々があったことが分かる。こうした村々は阿弥陀寺との本末関係や、金勝寺とのつながり、街道網など様々な要因で阿弥陀寺につながり信仰を寄せた村々であったと推察されている。

なお、菩薩面の詳細を表1に、嘉永二年催行の際の寄進者、菩薩役等のデータを表2、表3として掲載した。

## 6 行事内容

昭和五十四年に行われた際の行事の進行については次のとおりである。

このときの遠忌法要は二日間かけて行われた。初日は阿弥陀寺総代の家から阿弥陀寺まで、二日目は蔵町にある薬師寺総代の家から阿弥陀寺まで、二十五菩薩を含む御詠歌隊・僧侶・稚児などのお練りの行列が行われた。

お練りは阿弥陀寺での法要に先駆けて行われ、総代の家を出発して阿弥陀寺山門から本堂へと入った。行列の順序はその日出発地点となる阿弥陀寺もしくは薬師寺の総代を除く、金勝地域の浄土宗一寺院の総代が先導し、そのあとに一二寺院の御詠歌隊である吉水講が鈴を鳴らし、御詠歌を詠じて従った。二十五菩薩は吉水講のあとを歩いた。菩薩の順序は面が納められた箱の蓋書のとおりである。菩薩のあとには阿弥陀寺もしくは薬師寺の総代、一二寺院の住職と続き、稚児行列が最後に続いた。前述したとおり、行列は山門を経て阿弥陀寺境内へ入る。山門から石段を通り、本堂へ続く石畳を進んだ。本堂では住職らによる法要が営まれたが、菩薩役は法要に参加することはなかった。

なお、行列中に菩薩役が来迎を思わせる特別な所作を行うことはなく、境内においても娑婆堂や来迎橋など特別な装置が設けられることもない。

## 7 由来・歴史

嘉永元年（一八四八）、以前から迎接会を営みたいと考えていた信仰を寄せ

る東坂の隣村蔵町の住人四郎右衛門が、寺の開祖である隆堯の四〇〇回遠忌法要に合わせて、近隣の村々に寄進を募り面や衣装を整えて始めたもの。これにより嘉永二年二月八日から十三日まで「二十五菩薩接会式」が営まれた。近代にいたるまで「二十五菩薩接会式」が営まれた記録は見られないが、昭和三十五年ごろ、昭和五十四年に行われたことが分かっている。

## 8 記録類

次の、栗東町史編さん室調査資料は、栗東歴史民俗博物館が管理している。

〔二十五菩薩新規造営勸化帳〕（栗東町史編さん室調査資料No.01-011-003）

〔二十五菩薩寄進付覚帳〕（栗東町史編さん室調査資料No.01-011-006）

〔二十五菩薩寄進名前帳〕（栗東町史編さん室調査資料No.01-011-010）

〔二十五菩薩番付〕（栗東町史編さん室調査資料No.01-011-010）

〔幡随意上人像裏書〕（栗東町史編さん室調査資料No.01-011-053）

また、参考文献にあげた、松岡久美子「阿弥陀寺の二十五菩薩面と近江湖南の迎講」（『民俗文化』第三〇号、近畿大学民俗研究所、二〇一八年）に翻刻文が収録されている。

### 参考文献

□ 『栗東の歴史 第四巻』（栗東町、一九九四年）

□ 松岡久美子「阿弥陀寺の二十五菩薩面と近江湖南の迎講」（『民俗文化』第三〇号、近畿大学民俗研究所、二〇一八年）

（調査年月日 二〇一九年十月十四日）

（写真 阿弥陀寺総代より提供・文責 大西稔子）

表1 菩薩名・持物一覧

No	箱 墨 書 銘			現状の持物	装束類 (現状)	法量 (単位:cm)					
	名称 (蓋表書)		蓋裏書の持物			寄進者 (箱側面墨書)	頂・額	面長	面幅	耳張	面奥
1	第壱番	観音菩薩	蓮臺	東坂 三浦小右衛門	笙 1	法衣 1、袴 1、袈裟 1、冠飾 2、(頭布なし)	32.1	16.5	12.1	16.5	13.8
2	二番	勢至菩薩	合掌	東坂 鶴飼藤右衛門	-	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.7	16.5	12.4	16.5	13.1
3	三番	薬王菩薩	幢幡	成谷 三浦隼人	-	法衣 1、袴 1、袈裟 1、冠飾 2、(頭布なし)	31.7	16.8	13.4	16.6	13.8
4	四番	薬上菩薩	玉幢	蔵町 三浦■右衛門/伊地知三良兵衛	バチ (?) 2	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.6	16.2	13.7	16.3	14
5	五番	普賢菩薩	幡蓋	蔵町 奥村市良右衛門/成谷 三浦七右衛門	幡 1、垂飾 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	32.1	16.8	13.9	15.6	14.9
6	六番	宝自在菩薩	歌舞	小脇 社納徳兵衛/ミノコ 同 喜助	幡 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.4	16.8	13.3	16.5	13.6
7	七番	獅子吼菩薩	腰鼓	蔵町 青木市兵衛/同 利兵衛/落ノ井 東田清治/東坂 宮出久兵衛	-	法衣 2、袴 2、袈裟 1、頭布 1、冠飾 2	31.6	17.3	13.2	16.2	14.0
8	八番	陀羅尼菩薩	-	蔵町 九右衛門/同 源七/同 富右衛門/井上新右衛門/小脇 甚五郎/成谷 三浦官次/同 半左衛門/日相 次左衛門	鏡鍔 1 組、鼓 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	32.1	17.2	13.6	16.7	12.4
9	九番	虚空蔵菩薩	舞臂	蔵町 薬師寺 檀中	横笛 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	32.4	16.8	13.1	19.8	13.4
10	十番	徳蔵菩薩	笙	観音寺村 善徳院 檀中	宝鉢 1、鼓 1	法衣、袴、袈裟各 1 (頭布なし)、冠飾 2	32.5	15.0	12.7	15.6	13.5
11	十一番	宝蔵菩薩	笛	上砥山村 浄西寺 檀中	笛 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2、冠飾の垂飾のみ 1	32.2	16.5	12.5	16.3	14.9
12	十二番	金蔵菩薩	琴	東坂 鶴飼藤右衛門	バチ (棒) 1、琴 1、箏篋 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.8	16.3	11.2	15.8	13.8
13	十三番	金剛蔵菩薩	琴	膳所家中 富岡覚太夫/上砥村 治右衛門	振鼓 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	32.2	17.0	13.7	16.8	13.3
14	十四番	光明王菩薩	琵琶	-	T字形棒 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2 (うち 1 点は垂飾亡失)	32.2	16.8	12.4	16.2	14.0
15	十五番	山海会菩薩	箏篋	-	バチ (棒) 1	法衣 2、袴 2、袈裟 1、頭布 1、冠飾 2	31.0	17.0	13.4	16.0	13.4
16	十六番	華嚴王菩薩	鈺	-	持物 (板状のものを連ねる。楽器?) 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.6	16.8	13.8	16.0	15.6
17	十七番	衆宝菩薩	鏡	-	-	法衣 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2、冠飾の垂飾のみ 1、袴なし	31.6	17.2	12.9	16.7	13.7
18	十八番	月光王菩薩	振鼓	-	宝珠 1、バチ (棒) 1	法衣 1、袴 1、袈裟 1、冠飾 2 (頭布なしか?)	31.0	17.2	13.3	16.4	13.1
19	十九番	日照王菩薩	撃鼓	-	バチ (頭が丸い) 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.7	17.4	14.1	16.5	14.3
20	二十番	三昧王 (菩薩)	棒形	-	T字形棒 2	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.5	17.1	13.5	15.7	13.6
21	二十一番	定自在王菩薩	太鼓	-	琴 1	環付袈裟 1、法衣 (紫) 1、冠飾 2 (ともに垂飾亡失)	32.2	16.8	12.2	16.5	12.7
22	二十二番	大自在王菩薩	華幢	-	持物 (花形の棒状のもの) 1	法衣 1、袴 1、袈裟 1、冠飾 2 (頭布なしか?)	32.2	16.2	13.7	16.2	14.0
23	二十三番	白象王菩薩	-	-	バチ (棒) 2	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2	31.3	17.5	12.6	16.1	13.5
24	二十四番	大威徳王菩薩	-	-	バチ (頭が丸い) 1	法衣 1、袴 1、頭布 1、袈裟 1、冠飾 2、胸飾 2	31.6	16.8	14.5	15.8	13.5
25	二十五番	地藏菩薩	錫杖	梅之木村 三上治良兵衛/大橋 茂兵衛	錫杖頭 1、華籠 1	-	22.7	18.8	13.9	16.5	14.0

\*松岡久美子「阿弥陀寺の二十五菩薩面と近江湖南の迎講」(『民俗文化』第30号 近畿大学民俗研究所 2018年)の付表から転載

表2 嘉永2年二十五菩薩接会式菩薩面寄進者菩薩役等一覧(栗東市域)

	集落名	催行寄進者	面寄進者	菩薩役						金勝浄土宗12寺院(近年の催行主体)	備考
				2/8	2/9	2/10	2/11	2/12	2/13		
a	東坂	○	1,2,7,12	15	18	24	(13)	14,15	8,9,(20)	阿弥陀寺、宗安寺	
b	蔵町	○	4,5,7,8,9	2,6,19,20	2	(2),10,11,12,13	-	-	(2),12	薬師寺	現在の大字御園の一部
c	観音寺	○	10	9,10	11,12	6,7,(15)	-	11,12,18,19	17,18	善徳院	
d	井上	○	8	-	-	-	-	-	-	-	
e	山入	○	-	-	-	-	-	9	-	常福寺	現在の大字御園の一部
f	上依山	○	-	-	-	-	-	-	-	-	現在の大字御園の一部
g	辻越	○	-	-	-	-	-	-	-	-	現在の大字御園の一部
h	上田	○	-	-	-	-	-	-	-	-	現在の大字御園の一部
i	御園	○	-	-	-	-	-	-	7	-	現在の大字御園の一部
j	小脇	○	6,8	1,14,16	1	(1),(14)	-	-	6,14	金胎寺	現在の大字荒張の一部
k	目相	○	8,12	7	14,22	(16),(17),25	-	1,20	-	正徳寺	現在の大字荒張の一部
l	走井	○	-	-	16	-	-	-	22	広徳寺	現在の大字荒張の一部
m	片山	○	-	24	-	-	-	-	-	敬恩寺	現在の大字荒張の一部
n	成谷	○	3,5,8	5	5	5	(5)	5	(5)	宝樹院	現在の大字荒張の一部
o	雨丸	○	-	13,18	15,17,20	18,19	(4)	3,4,10,13	19,24	地藏院	現在の大字荒張の一部
p	美ノ郷	○	6	3	3	(3)	-	7	-	-	現在の大字荒張の一部
q	上砥山	○	11,13	21,23	19,23	8,9	23,24	8,25	3,4,21	浄西寺	
r	小柿	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
s	新屋敷	○	-	-	-	-	-	-	-	-	現在の大字小柿の一部
t	川辺	○	-	22	24	-	(16)	-	-	-	
u	目川	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
v	坊袋	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
w	安養寺	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
x	下鈎	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
y	小野	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
z	六地藏	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
a'	梅ノ木	○	25	8,17	12,13	22,23	19,20	16,17	10,11	-	現在の大字六地藏の一部
b'	伊勢落	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
c'	高野	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
d'	大橋	-	25	25	25	-	25	2	25	-	
e'	手原	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
f'	林	○	-	-	-	-	-	-	-	-	
g'	七里	○	-	-	-	-	-	-	-	-	現在の大字総の一部

\*本文記録類に示した栗東町史編さん室調査資料No01-011-006より催行寄進者の所属集落を、菩薩面取納箱蓋書から面寄進者の所属集落を、No01-011-010から嘉永2年2月8日～13日にかけて行われた練り供養の菩薩役の所属集落をひろった。面寄進者、菩薩役欄の番号は表1の面の番号を示す。ただし、菩薩役欄の( )は集落名が明記されていないが、他の日程の記述から所属集落が分かるものを示している。

\*本表集落に付したa～gの記号は「菩薩面寄進者・菩薩役所属集落分布図(栗東市域)」と対応する

\*地図の集落名は現在の大字名のみを示す

\*大字御園に蔵町、山入、上依山、辻越、上田、御園が含まれる

\*大字荒張に小脇、目相、走井、片山、成谷、雨丸、美ノ郷が含まれる

\*大字小柿に新屋敷が含まれる

\*大字六地藏に梅ノ木が含まれる

\*大字総に七里が含まれる



昭和54年 お練り(二十五菩薩)  
阿弥陀寺総代提供



昭和54年 お練り(吉水講・二十五菩薩) 阿弥陀寺総代提供

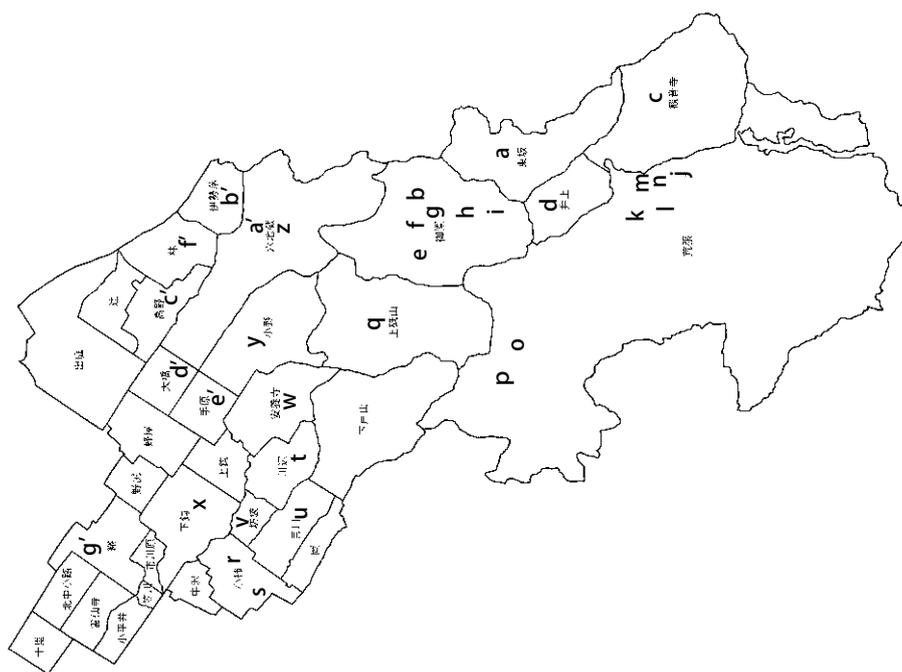
表3 嘉永2年二十五菩薩接会式菩薩面寄進者菩薩役等一覧（滋賀県域）

	集落名	催行寄進者	面寄進者	菩薩役					
				2/8	2/9	2/10	2/11	2/12	2/13
A	追分	○	-	-	21	-	21	-	-
B	草津	○	-	-	-	-	-	-	-
C	青地	○	-	-	-	-	-	-	-
D	大路井	○	7	-	-	-	-	-	-
E	下笠	○	-	-	-	10.11.12.13	17.18	-	-
F	志那中	○	-	-	-	-	-	-	-
G	矢橋	○	-	-	-	-	-	-	-
H	下物	○	-	-	-	-	-	-	-
I	馬場	○	-	-	-	-	-	-	-
J	志那	○	-	-	-	-	-	-	-
K	集	○	-	-	-	-	-	-	-
L	南笠	○	-	-	-	-	-	-	-
M	大萱	○	-	-	-	-	-	-	-
N	大鳥居	○	-	-	22.24	-	-	-	-
O	桐生	○	-	-	-	-	-	-	-
P	枝	○	-	-	-	-	-	-	-
Q	羽栗	○	-	-	-	-	-	-	-
R	三上	○	-	-	-	-	-	-	-
S	西寺	○	-	-	-	-	-	-	-
T	東寺	○	-	-	-	-	-	-	-
U	柑子袋	○	-	-	-	-	-	-	-
V	石部	○	-	11	4.10	20.21	3.15.21.22	-	15.16
W	針	○	-	-	-	-	22	-	-
X	水口	○	-	-	-	-	-	-	-
Y	信楽	○	-	-	-	-	6.7.8.9.10.11	-	-
Z	田代	○	-	-	-	-	-	-	-
A'	牧	○	-	-	-	-	-	-	-
B'	信楽江田	○	-	-	8.9	-	-	-	-
C'	信楽神山	-	-	-	6.7	-	-	-	-
D'	畑	○	-	-	6	-	-	-	-
E'	上野	○	-	-	-	-	-	-	-

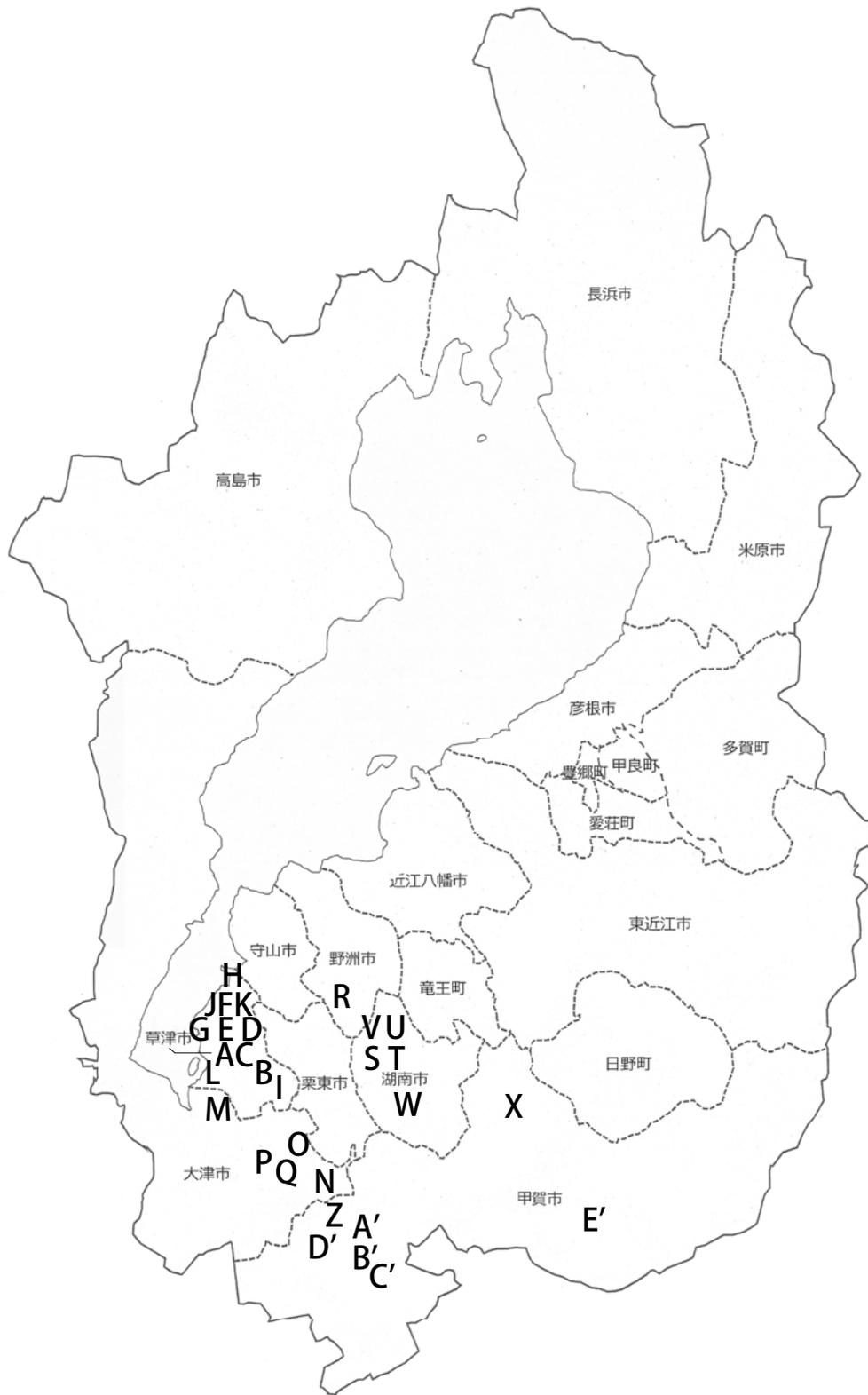
\*本文記録類に示した栗東町史編さん室調査資料No01-011-006より催行寄進者の所属集落を、菩薩面収納箱蓋書から面寄進者の所属集落を、No01-011-010から嘉衛2年2月8日～13日にかけて行われた練り供養の菩薩役の所属集落をひろった。面寄進者、菩薩役欄の番号は面の番号を示す。ただし、菩薩役欄の（ ）は集落名が明記されていないが、他の日程の記述から所属集落が分かるものを示している。

\*本表集落に付したA～E'の記号は「菩薩面寄進者・菩薩役所属集落分布図（滋賀県域）」と対応する

\*寄進者の所属集落にはこのほかに膳所藩家中、京都立売、八幡がある。



嘉永2年二十五菩薩接会式菩薩面寄進者菩薩役等分布図（栗東市域）



嘉永2年二十五菩薩接会式菩薩面寄進者菩薩役等分布図（滋賀県域）

## 8 光明寺こうみょうじ（京都府長岡京市）

### 1 名称

例年の御忌で配布される「御忌・講讚導師紹介」等には、「二十五菩薩行道会」と表記されている。

### 2 実施期日

御忌は毎年四月十九日から二十五日までの七日間修せられ、うち二十一日から二十五日までの五日間は、講讚導師が出座する日中法要が盛大に執り行われる。

### 3 実施場所

西山浄土宗総本山光明寺（京都府長岡京市粟生西条ノ内二六―一）の御忌（法



写真1 阿弥陀堂を出る観音菩薩



写真2 御影堂回縁の行道



写真3 楽人に続く二十五菩薩



写真4 二十五菩薩の後に続く地藏菩薩

### 4 地域

然上人の忌日法要にて行われる。

光明寺のある粟生広谷は、四三歳の法然上人が浄土宗を開宗して初めて説法した地である。法然のもとで出家し弟子となった熊谷次郎直実（法力房蓮生）が建久九年（一一九八）に建立し法然を開山に迎えた念仏三昧院が光明寺の前身とされる。

### 5 組織

（一）大導師と講讚導師

日中法要のなかで、大導師である光明寺法主の名代として「歎徳之疏」（法然の徳を讃え法要の趣旨を述べる表白文）を唱える役僧を講讚導師といい、四

月二十一日から二十四日の四日間は、全国の南部、中部、東部、西部それぞれ  
の教区の末寺の住職が輪番で勤めることになっている（二十五日は光明寺宗務  
総長）。

(2) 二十五菩薩・地藏菩薩役

二十五菩薩（加えて地藏菩薩）の菩薩の役は、講讃導師をつとめる寺が檀信  
徒等を招集する。菩薩行道会への参加は、担当寺院と檀信徒らの意思に任され  
ているため、行道会が行われない年もある。平成三十年（二〇一八）は、二四  
日に報恩寺（大阪府狭山市）住職高野延弥師が講讃導師を勤め、その檀信徒に  
より菩薩行道会が行われた。平成三十一年は、二十三日に鷲林寺（和歌山県由  
良町）住職の神尾侶章師が講讃導師を勤め、その檀信徒と近隣の法林寺の檀信  
徒と合同で出仕し菩薩行道会が行われた。檀信徒にとって、御忌の菩薩役は、  
ほぼ一生に一度さりの経験である。



写真5 後門から入堂～式衆が後に続く



真6 行道散華～手前が菩薩役の席

(3) 雅楽奏楽

西山雅楽会が奉仕している。同会は、昭和六十一年（一九八六）、現会員で  
ある田辺隆桁氏（京都府木津川市西念寺現副住職）、淡路島出身の高橋隋宜氏（現  
非会員）ら京都西山短期大学学生三名が、当時の大学学鑑（事務局長）であつ  
た長講堂（京都市下京区）住職に雅楽習得を勧められ、いちひめ雅楽会（下京  
区市比賣神社）の飛騨富久氏に師事し、大学のクラブ活動として始まった。  
御忌や各末寺の法要に奏楽奉仕したが、田辺氏らの卒業や後継不足により五年  
ほどのち活動休止した。しかし平成二十三年（二〇一一）法然上人八百周年大  
御忌を目前にして再結成の機運が高まり、再度会員を募って平成十五年頃から  
活動を再開した。平成十五年から二十五年の十年間は、平安雅楽会会員を講師  
に呼び、三管（龍笛・笙・篳篥）の指導を受けたという。現在の会員数は十名  
で、田辺氏、守中隆明氏（京都市西京区長恩寺）ら僧侶をはじめ、寺住職配  
偶者や光明寺近隣住民で構成されている。守中氏は全国西山浄土宗寺院への出  
張奉仕のほか、毎年の光明寺御忌日中法要に奏楽出仕している。菩薩の行道が  
ない場合も出仕する。日中法要のなかで演奏する曲目に明確な決まりはないが、  
例年ほぼ同じという。

6 行事内容

(1) 行事次第

以下、平成三十一年四月二十三日の日中法要の場合を記す。\*印は、調査報  
告者未見のためおおよその時刻を示している。

準備 一〇時三〇分\*、菩薩役、リハーサルを行う。一一時四五分\*、菩薩役  
は装束をつける。

仏讃歌 一二時〇〇分\*、御影堂にて仏讃歌の会による演唱。

日中法要 一二時二〇分、御影堂においては参拝者による念仏一会そのあと参

拝者に対してのお説教。阿弥陀堂においては、菩薩役の勤行（十念・四奉請・四誓偈・十念・聞名得益偈・撰益文・念仏一会・御回願・十念・導師出堂）。

この間、菩薩役は面をつける。一二時三〇分\*、太鼓が鳴らされる（釈迦堂に参集している式衆への合図）。釈迦堂での儀式（報告者未見）。このときの式衆は、全国末寺の住職がつとめる。一二時三八分、喚鐘が鳴らされる（釈迦堂の式衆への合図）。一二時四二分、阿弥陀堂において《平調音取》発奏。一二時四四分、平調《越殿楽》を奏す。衆人・菩薩役は御影堂に向かって行道の開始する。一三時一五分、釈迦堂から出発した式衆が菩薩のあとに続いて堂内内陣を廻る。一三時一五分、菩薩が退堂したあとはそのまま行道散華（四奉請）に移行する。一三時二三分、献香。この間の付け衆は笙一管による《平調調子》。一三時二四分、講讀導師・維那（光明寺法主）出座。その間、衆人は《皇靈急》を奏す（導師の磬で止める）。このとき行道時の管方衆人のうち二名が太鼓・鞆鼓を担当する（平成三十一年の法要では、鞆鼓奏者なし）。一三時三一分、講讀導師による歎徳之疏。一三時四一分、講讀導師の磬を合図に、衆人《五常衆急》を奏す。講讀導師は礼盤を下りる。一三時四六分、開経偈・真身観（平成三十年は阿弥陀経）・三念仏・自信偈。平成三十一年の法要では、この間、御影堂の左脇陣の一隅に座していた菩薩役の人々が着替えのために阿弥陀堂に向かった。一三時五〇分、日中礼讀（三尊礼三匝行道）。一三時五九分、続けて礼讀（無常偈）。一四時一〇分、白木念仏（双盤を用いる念仏）。一四時一三分、御回願・下化十念。一四時一四分、御垂示（維那による説教）。一四時二三分、一枚起請文唱和・同称十念（堂内一同）・無言三拜。一四時二三分、導師・式衆退殿。このとき衆人《陪臚》を奏す。そのあと説教。一四時四三分、喚鐘が鳴らされる。このとき堂内の檀信徒もほぼ退出。

**後門弥陀経** 一五時〇〇分\*、式衆御影堂へ出座、そのあと阿弥陀経読誦。このときの式衆は光明寺山内の僧侶による。一五時一六分、自信偈。一五時一八

分、白木念仏。一五時一九分、御回願・退殿。

(2) 二十五菩薩の順と持ちもの

光明寺の現行行道会における菩薩の練り順と持ちものは次のようになっていゝる。持ちものの名称は、行道時のアナウンスによるもので、報告者が補った名称は「」付で表記した。

- ① 観音…はず〔連台〕 ② 大勢至…〔合掌〕 ③ 薬王…または〔真幡／幢幡〕  
④ 薬上…ぎよくばた〔玉幡〕 ⑤ 普賢…天蓋 ⑥ 文殊…〔蓮華〕 ⑦ 獅子吼…〔拍板〕 ⑧ 陀羅尼…〔合掌〕 ⑨ 虚空蔵…つづみ〔鞆鼓〕 ⑩ 徳蔵…笙 ⑪ 寶蔵…よこぶえ〔横笛〕 ⑫ 金蔵…こと〔箏〕 ⑬ 金剛…銅鑼 ⑭ 山海慧…〔筥篋〕 ⑮ 光明王…琵琶 ⑯ 華嚴蔵〔華嚴王〕…〔磬〕 ⑰ 衆寶王…はち〔饒鉢〕 ⑱ 月光王…ふりこ〔振鼓〕 ⑲ 日照王…鉦鼓 ⑳ 三昧王…華鬘 ㉑ 自在王…火焰太鼓 ㉒ 大自在王…いんしょう〔印鉦／印金〕 ㉓ 白象王…〔尺八〕 ㉔ 大威徳王…けこ／はなざら〔華籠〕 ㉕ 無辺身…香炉 ㉖ 地蔵…つえ〔錫杖〕と宝珠
- 実用楽器（銅鑼・饒鉢・印金）を持つ菩薩は、適宜楽器を鳴らしながら行道する。

(3) 行道の経路〔図1〕

丈六の阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂を極楽浄土にみたて、法然上人の御影を安置する御影堂を現世の娑婆世界にみたてて、二十五菩薩と地蔵菩薩が娑婆世界たる御影堂に來迎し、堂内に集う衆生を引撰して阿弥陀如来のもとに歸入するさまを示す会式である。

行道順は、先導の僧・衆人（笙一名・篳篥三名・龍笛二名の順）・先導の僧・二十五菩薩と地蔵菩薩（後述）。行列は、御影堂の回縁を右繞一匝して後門（背面扉）より堂内に入る。衆人は堂内左脇陣に座し、演奏を続ける。菩薩は内陣を右繞一匝して後門から出て、阿弥陀堂に歸る。阿弥陀堂で面をとった後、御影堂左脇陣の指定された一隅に座す（堂内における菩薩役の座す場所は年毎に

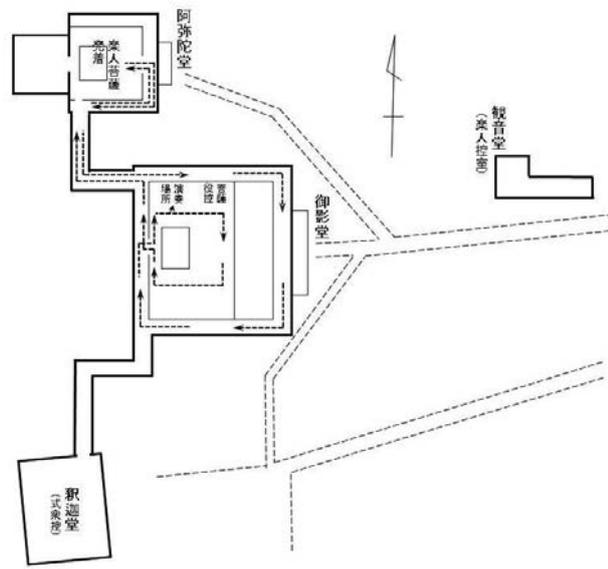


図1 諸堂の配置と行道の経路

異なり、また阿弥陀堂帰入後の対応も年毎に異なる。楽人・菩薩が歩くコースには、白線のはいつた敷物が敷かれ、菩薩役はその白線をたよりに進む。コーナーに僧侶が立って、菩薩の方向転換を助ける。

## 7 由来・歴史

光明寺では明和四年（一七六七）に西谷浄音上人五百回忌を記念して二十五菩薩来迎会が修され、天明六年（一七八六）の阿弥陀堂再建の結縁法要にも修されている。以後途絶えたままであったが、宝暦十年（一七六〇）に詠えられた菩薩二十五面が寺庫に保管されていることが明らかとなったのがきっかけで復興の機運が高まり、平成八年（一九九六）の西山上人七百五十回御遠忌にあわせて復興されることとなった。過去を物語る資料は、菩薩面のみで文献が伝

存せず会式の詳細は不明であったため、大念佛寺（大阪府大阪市平野区）や當麻寺（奈良県葛城市）の練供養を参考にしたという。また、宝暦の菩薩面は状態が悪く、使用に耐えないため、菩薩面・装束・楽器や幡などの採りもの等もすべて新調された。菩薩行道を復活した当初は、阿弥陀堂を出て、御影堂の回縁を廻っただけで阿弥陀堂に帰っていたが、その後、御影堂内陣も行道するようになったという。

なお、光明寺には、発見された宝暦の菩薩面よりも古様の「三枚共うんけい之作」などと墨書がある菩薩面三面が伝存する（ただしその筆跡は新しいという）。松岡久美子氏によれば、「伏し目がちだが強さのある眼差しや顔の輪郭、装飾的な冠台の表現から、制作時期は十一世紀に遡る可能性がある」という（『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―』展示品解説）。

### 参考文献

- 『御忌参拝のしおり』（光明寺発行リーフレット、毎年発行）
- 『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術』（龍谷大学 龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）
- 『宗祖法然上人第八〇七回御忌講讀導師紹介』（光明寺発行リーフレット、二〇一八年）
- 『宗祖法然上人第八〇八回御忌講讀導師紹介』（光明寺発行リーフレット、二〇一九年）
- 『総本山光明寺御忌』（和歌山県第九組南紀西山明秀会作成リーフレット、二〇一九年）
- 『総本山光明寺第八〇八回御忌参拝ノ栞』（和歌山県第九組南紀西山明秀会作成リーフレット、二〇一九年）

（調査年月日 二〇一八年四月二十四日〔御忌日中法要〕、二〇一九年四月十五日〔西山雅楽会練習〔於光明寺信徒会館〕〕、同年四月二十三日〔御忌日中法要〕）  
（写真・図・文責 田鍬智志）

## 9 即成院そくじょういん（京都府京都市東山区）

### 1 名称

正式には「即成院二十五菩薩お練り供養法会」というが、「即成院二十五菩薩お練り供養」と略されることもある。

### 2 実施期日

十月の第二日曜日。戦前は五月と十月、年二回行われていたという。昭和四十一年の段階では、十月の第二日曜日に実施していたが、平成元年度から十月の第三日曜日になった。

### 3 実施場所

真言宗泉涌寺派総本山泉涌寺塔頭で準別格本山である即成院（京都市東山区泉涌寺山内町二七）において行われる。

### 4 地域

即成院は、伏見九郷のひとつ即成院村（現在の京都市伏見区桃山町泰長老付近）に創建された。室町時代の『拾芥抄』巻下第九に「伏見寺、即成院、俊綱朝臣建立」、建治元年（一二七五）の完成とされる『阿婆縛抄』巻第二〇〇諸寺略記に「伏見寺在伏見村修理大夫俊綱建立」とある。つまり藤原頼通の次男である橘俊綱が持仏堂として建立し、伏見寺とも即成院とも呼ばれていた。中原康富の日記『康富記』の嘉吉二年（一四四二）九月二十八日条に「即成院者慶雲年中草創之寺也、宣陽門院有御再興」とあり、慶雲年間（七〇四〜七〇八年）の創建で、後白河天皇の第六皇女である宣陽門院が再興したとも伝える。なお、江戸時代の『雍州府志』（黒川道祐著）には、正暦二年（九九一）に恵

心僧都が光明院を開創し、それを伏見長者（橘俊綱）が山莊を営んだ際に持仏堂として移したとある。その後、文禄二年（一五九三）の伏見城築城に際して深草大亀谷（伏見区深草大亀谷東寺町、跡地は天理教山国大教会）に移建され、明治五年（一八七二）には廃仏毀釈の影響で廃寺となった。

明治二十年、廃寺の際、仏像などを引き取った泉涌寺の大門付近に飯堂が設けられた。明治三十二年には法安寺と合併したことから寺号を法安寺とした。明治三十五年には泉涌寺の総門付近の現在地に移転し、昭和十六年に即成院の寺号が復活した。

後述の伏見の吞海講どんかいは、即成院と深く結びつき、伏見を離れ、東山の地に移転した後も、行事などを通じて即成院を支えてきた。

### 5 組織

菩薩会という信徒団体が行事全体の世話方を勤め、御詠歌は吞海講が勤める。法要は泉涌寺の僧侶の出仕により、お練りにおける引頭や奉行も勤める。行者講は聖護院を拠点とする平安連合会によって構成される。

二十五菩薩の役は、菩薩会や住職の縁を頼って依頼する。性別や年齢に制限はないが、衣裳が小さいことから、女性が多い。未就学児が稚児として参列し、小学校に入学して菩薩となる場合も多く、若くして十年以上のベテランも多い。また、三世代に渡って出仕した例もある。二十五菩薩のうち「極楽浄土の舞」を舞う観音菩薩・勢至菩薩は、大正三年から昭和二十年代まで、茂山千作の社中の子弟で奉仕してきたが、近年は高校生から二十代前半のベテランの女性が勤めている。

吞海講は、主に伏見の住人によって組織された御詠歌の講である。吞海が作ったとされる御詠歌の節「吞海節」を伝え、お練りの当日は吞海節による御詠歌や来迎和讃が詠唱される。吞海講は明治期の復興の際、御詠歌を歌って市中勤

募をして復興費用を集めたほか、境内の整地や普請の手伝いも行ったという。二十五菩薩お練り供養会式の他にも、平成元年までは本堂裏の「那須与一の墓」を祀る「おつや法要」を、春秋の彼岸におこなっていた。平成十八年頃、講員の高齢化によって活動を休止したため、二十五菩薩お練供養は東寺流の大師講が奉仕していたが、平成二十五年に旧構成員の一部も参加して吞海講が再結成され、現在は、ほぼ旧来の形で奉仕されている。

## 6 行事内容

### (1) 行事次第

十月初旬になると、本堂から地蔵堂まで約六〇mの懸橋（渡廊）が架けられる。また、観音・勢至・普賢の三菩薩の演者と吞海講の都合の良い日に、極楽の舞の練習をする（一時間程度）。直前の練習として、前日に衣装合わせを兼ねて集まる。極楽の舞の指導は、住職や菩薩会によって行われるが、かつて、当代の茂山千作丈が指導にあたったこともあったという。

当日は朝から本堂や地蔵堂の会場を整える。懸橋に手すりを設け、橋板に緋毛氈を敷く。九時から内陣特別拝観を実施する。本尊阿弥陀如来の定印からは、善の綱が張られ、懸橋の手すりを伝う。以下、令和元年の次第を略述する。

一三時五分、本堂の喚鐘（第一鐘）を合図に、本堂から地蔵堂へ向う行列が出発する。引頭（僧侶一名）、会旗（修験衆一名）、楽人（笙、篳篥、龍笛）、修験衆（八名）、修験稚児（二名、保護者介添）、普通稚児（二二名、保護者介添）の順。修験稚児と普通稚児は、供物の入った華籠を持つ。出発時には修験衆の法螺貝が鳴らされ、道中は楽人が雅楽を演奏する。

地蔵堂に到着すると、修験稚児と普通稚児は供物を供え、花を受け取る。

一三時一八分、往路と同じ行列で、本堂へ戻る行列が出発する。修験稚児と普通稚児は花を持つ。道中、修験衆の法螺貝が鳴らされる（雅楽は演奏しない）。

本堂に到着すると、修験稚児と普通稚児が、花を内陣に供えた後、修験稚児二名と普通稚児二名）のみ、散華の入った華籠を受け取る。この四名は、三日の往路で輿を運ぶ天人の役である。

一三時二七分、本堂から地蔵堂へ吞海講を含む行列が出発する。引頭、会旗、吞海講（九人）、楽人、修験衆、修験稚児、普通稚児の順。道中、天人の稚児は散華を撒く。出発時には修験衆の法螺貝が鳴らされ、道中は楽人が雅楽を演奏する（御詠歌は演奏しない）。

地蔵堂に到着すると、修験稚児と普通稚児が、百味（供物）を受け取る。

一三時三三分、往路と同じ行列で、本堂へ戻る行列が出発する。修験稚児と普通稚児は百味を持つ。道中は、修験衆の法螺貝が鳴らされる。

本堂に到着すると、修験稚児と普通稚児が、百味を内陣に供えた後、散華の入った華籠を受け取る。天人の四名は輿を持つ。

一三時五〇分、本堂の喚鐘（第二鐘）を合図に、本堂から地蔵堂へ向う行列が出発する。引頭、会旗、吞海講、修験衆、奉行、式衆、導師、総代、来賓、世話方、御輿（天人四名）、稚児、楽人、



写真1 吞海講の行道



写真2 観音菩薩・勢至菩薩の行道

奉行（僧侶一名）、地藏菩薩、観世音菩薩、勢至菩薩、その他の二十五菩薩（それぞれ世話方がつく）の順。道中は衆人が雅楽を演奏する（御詠歌は演奏しない）。道中、式衆、来賓、世話方は散華を撒く。式衆は、懸橋の曲がり角（地藏堂前）で立ち止まり、庭ノ讀（声明）をおこなう。観世音菩薩は両手で蓮台を持ち、勢至菩薩は合掌姿で、いずれも一步踏み出すごとに、いったん腰を落としながら腕も下げ、足を踏み出す際には、顔を正面に向けたまま、体を大きく左右交互に向ける。

地藏堂に到着すると、式衆が伽陀を唱え、巻物が取められた宝塔を、中央の台座から御輿に遷す。菩薩は、地藏堂で、いったん面を外し着席して待機する。一四時二五分、地藏堂の喚鐘（第三鐘）を合図に、地藏堂から本堂へ戻る行列が発する。引頭、会旗、修験衆、吞海講、奉行、地藏菩薩、観世音菩薩、勢至菩薩、その他の二十五菩薩（それぞれ世話方がつく）、奉行、式衆、導師、御輿（天人四名）、稚児、衆人、来賓、世話方の順。稚児、修験稚児に加え、市会議員および解脱会役員（四名ほど）、泉涌寺一山の僧侶（数名）が本堂へ向う。稚児のうち数人が、過去帳を納めた宝塔を載せた輿を運ぶ。道中は吞海講が御詠歌を演奏する。御輿は本堂の内陣と外陣の境の卓に載せ、宝塔を取り出して内陣側の小卓に遷す。僧侶は本尊に向かって、前讀一、理趣経（中略）、後讀一、回向を行い、終われば外陣へ向く。

一五時、僧侶による法要が終わり次第、極楽浄土の舞（ごくらくのまい）がおこなわれる。吞海講の来迎和讀に合わせて、観音、勢至、普賢の三菩薩が本尊を背にして立ち、「時に大悲観世音」の歌詞で、まず蓮台を持った観音菩薩が道中の歩みと同じく宝塔の前に進み、その後ろを天蓋を持った普賢菩薩が歩く。「次に勢至大薩タ」の歌詞で合掌した勢至菩薩が宝塔に向かう。観音菩薩と勢至菩薩が宝塔を左右に挟んで向かい合い、「大定智慧の手をのべて」で勢至菩薩両手を高く差し上げ、「行者の頭をなべ給う」で、掌を揺らしながら左

右に手を広げて下げ、再び高く差し上げる所作を二回おこなう。「金蓮台にのせ給う」で勢至菩薩が宝塔を観音菩薩の蓮台に載せる。そして、蓮台を観音と勢至の両菩薩が左右から支えながら、横歩きで二歩進んでは一步下がる足運びで、ゆっくりと本尊に近づいていく。「安養浄土に往生す」で宝塔は蓮台ごと僧侶が受け取り、舞は終わる。

二十五菩薩が、本堂内陣の導師に挨拶をして控え室に戻る間、吞海講の御詠歌がある。一五時一〇分頃、菩薩退座終了を見計い、中央より職衆、導師が退座をする。その後、修験衆が内陣に集まり、般若心経などをあげて退座する。

#### （2）設備・道具

懸橋（渡廊）の橋板は十三枚からなり、幅は約一五一・五cm。橋板側面に、寄進者の名前があり、信仰圏の広がりがうかがえる。①中塚豊一、②山科西野山・中塚つたゑ、③日野屋山本・山本康裕、④乾大佛堂・乾益蔵、⑤音羽屋・田中稔、⑥東淀川瑞光・那須宏芳、⑦東淀川大桐・太田直行、⑧七條新町・



写真4 極楽浄土の舞



写真3 宝塔を載せた御輿

塩見信夫、⑨松原富小路・神田平八郎、⑩堺町夷川・猪野愈、⑪吉祥院西ノ茶屋・中塚幸三郎、⑫清水二丁目・若林利子、⑬河原町丸太町・山本一子。

輿の轅は昭和十三年四月のもので、「京都大佛師／乾見治郎作也」と墨書がある。これは橋板④の乾大佛堂のことである。

菩薩面、衣装は大正三年春に新調（ただし、適宜修理をしている）。

(3) 扮装・楽器

装束箱は甲號・乙號があり、いずれも蓋表に「廿五菩薩御装束函／泉山即成院／菩薩會」、蓋裏に「大正三年春新調」と墨書がある。菩薩面、楽器、衣装はこの時に新調されたものであるが、その後、適宜修理をしてきている。

(4) 歌詞・詞章

吞海講は、行道の際に柳華節で「本尊阿弥陀如来御詠歌」、着座すると「即成院御和讃」、極楽の舞は吞海節で「来迎和讃」、菩薩の退出の際は鴨川節で「本尊二十五菩薩御詠歌」を奏する。

「来迎和讃」

糸竹の調べ雲を分け 徘徊よそおい地を照す

時に大悲観世音 やうやく歩み近づきて

紫魔金の身をまげて 蓮台かたぶけ寄せ給う

次に勢至大菩薩 聖衆同時に讃談し

大定智慧の手をのべて 行者の頭をなべ給う

遂に引接し給いて 金蓮台をのせ給う

輪廻生死のふるき里 この時ながく隔たりぬ

即ち金蓮台にのり 仏の後に従いて

須臾の間をふるほどに 安養浄土に往生す

## 7 由来・歴史

即成院の二十五菩薩お練り供養法会の創始は、詳らかでない。本尊の阿弥陀如来坐像の両脇の二十五菩薩像（本尊とともに重要文化財）の姿がお練り供養会式の扮装に共通するなど、かつて行事が行われてきた可能性を示唆するものの、明確な史料は確認できていない。

現在の二十五菩薩お練り供養法会は、大正三年に始められた。その後、昭和十八年からの五年間は中止されたが、昭和二十三年に再開されて以降、連綿と続いている。

創始に深く関わった茂山「二世」千作は、何度も當麻寺に通って実際のやり方、面や装束を調査し、なるべくその通りに写したという。ただ、極楽の舞については「観音と勢至の二人の菩薩が、来迎和讃に合せて型をしますのだけは私の思い付き」と述べている（『狂言八十年』）。

極楽の舞は、本堂に御輿で運ばれた宝塔を、観音菩薩と勢至菩薩が蓮台に載せ、勢至菩薩が両手で撫でるような所作をした後、両菩薩が本尊のほうへ送る所作である。當麻寺では、娑婆堂で中将姫の坐像を迎える際、観音菩薩の持つ蓮台上に中将姫の像を載せ、勢至菩薩が左右の手で交互に撫でるようなしぐさをした後、両菩薩によって極楽堂のほうへと送るといふ所作（奉奏舞）があるため、全くの創作とはいえない。型に新たなアレンジを加えたと考えるべきだろう。

即成院の独自性は、その所作よりむしろ、音楽すなわち吞海節による御詠歌が重要な役割を果たしていることである。その中心となる吞海節は、大正時代以降の全国的な御詠歌再編に飲み込まれなかった、いわゆる旧節のひとつである。吞海節は、鎌倉時代の時宗の吞海（遊行上人四世）が始めたとも言われるが（『日本国語大辞典』など）、典拠となる史料はない。むしろ現在にみられる御詠歌の節回しの成立は、近世以降のものであるというのが通説である。

(調査年月日 二〇一九年十月十九日)  
(写真・文責 福持昌之)

『枚方市史』の「鍵屋」の項に「明治維新前後の当主呑海師は、夙に呑海節と名づける詠歌を編み出し、之を以て諸国を巡錫し、一面鍵屋宣伝にも努めた」とある。鍵屋は、枚方宿の船宿として知られ、吉川太兵衛「過去帳による推定で二代」(一七七一頃〜一八五〇)の三男と思われる人物が、呑海(一八〇五頃〜一八六九)である。浄土宗の察厳和尚(天保二年没)に師事し(吉川家過去帳)、天保の頃には説教師として活動した様子がうかがえる(『枚方市史』第七卷 資料編)。太兵衛の死後は鍵屋を継ぎ、明治二年に没した後は実子の太平(一八四八頃〜一九一五)が継いだ。呑海の玄孫の女性は、昭和三十年頃、野崎観音(慈眼寺)に「呑海節の本来」として母と共に招かれて歓待を受けたと語る。したがって、呑海節の成立は、江戸後期から幕末にかけて、と考えるべきであろう。

京都・大阪間が、淀川北岸の鉄道によって結ばれるのは明治十年のことであり、それまでは伏見や枚方を中継点とした淀川舟運が輸送の主流だった。上方落語「野崎詣り」にも、寝屋川舟運が描かれている。枚方宿の呑海が、京・大坂をめぐり、その一環で呑海節を伏見に伝えた可能性は高い。

#### 参考文献

- 『枚方市史』(枚方市役所、一九五一年)
- 『狂言八十年』(茂山千作翁記念刊行会編、都出版社、一九五一年)
- 『民間念仏信仰の研究』(佛教大学民間念仏研究会編、隆文館、一九六六年)
- 『枚方市史 第七卷 史料編 近世』(枚方市史編纂委員会編、枚方市、一九七〇年)
- 田口稚子「橋俊綱造立の即成院木造聖衆来迎像」(『美学・美術史学科報』二四、跡見学園女子大学美術史学科、一九九六年)
- 齊藤利彦「泉涌寺即成院二十五菩薩お練り供養法要」(『京都府の民俗芸能―京都府民俗芸能緊急調査報告書―』、京都府教育委員会、二〇〇〇年)
- 梅原猛「即成院と二十五菩薩練供養」(同『京都発見 四 丹後の鬼・カモの神』、新潮社、二〇〇二年・初出一九九九年)
- 田村菜々子「御詠歌・和讃のふしと詞章に関する研究―五七と七五をうたう―」(『口

# 10 百萬遍知恩寺ひやくまんべんちおんじ（京都府京都市左京区）

## 1 名称

二十五菩薩練供養という。

法然上人生誕の地とされる誕生寺（浄土宗特別寺院、岡山県久米郡久米南町里方八〇八）の「法然上人御両親御追恩二十五菩薩天童迎接練供養会式大法要」（岡山県指定重要無形民俗文化財「誕生寺二十五菩薩練供養」の出開帳として、行われている。

## 2 実施期日

三年に一度、四月二十五日。

毎年四月二十三日から二十五日の三日間、法然上人御忌大会が行われ、日中と連夜の法要が勤められる。そのうち、最終日の日中の法要にあわせて、三年に一度、二十五菩薩練供養が行われる。直近では、平成十年から三年毎に催しており、直近では平成三十一年に行われた。

## 3 実施場所

浄土宗の大本山である長徳山功德院百萬遍知恩寺（京都府京都市左京区田中門前町一〇三）において行われる。境内の阿弥陀堂から御影堂に向かって行列が進む。

## 4 地域

百萬遍知恩寺は、平安時代に円仁が創建したと伝えられる。賀茂社の神宮寺として、現在の相国寺（京都市上京区）付近にあったとされる。浄土宗の開祖法然上人が一時ここに住んだとされ、法然上人入滅後、直弟子の勢観房源智が

伽藍を整備し、如空のとき功德院知恩寺と称したという。源智は法然上人が後半生を過ごした大谷禪坊を知恩院として再興し、知恩寺と知恩院は鎮西義の京都での有力な拠点となった。

元弘元年（一三三二）第八世善阿空円は、後醍醐天皇の勅命により百万遍念仏を行って疫病を治めたことから「百萬遍」の号が下賜されている。永徳二年（二三八二）に相国寺が建立される際、一条小川（京都市上京区元百万遍町）に移転した。

大永三年（一五二三）、知恩寺二五世慶秀と知恩院二五世存牛との間で本寺争いとなった際、第一の座次を知恩院に譲ることになった。

文禄元年（一五九二）に、豊臣秀吉により土御門（京都市上京区寺町通荒神口上る）に、その後、寛文二年（一六六二）に現在地に移転した。百万遍知恩寺の西にある、東大路通（府道一〇一号）と今出川通（市道一八一号）の交わる交差点及びその周辺を、通称「百万遍」と呼ぶのは、百萬遍知恩寺が所在することによる。

## 5 組織

百萬遍知恩寺が旧末寺に呼び掛けて、菩薩役を募集する。菩薩役は、その年の一月に書面で旧末寺（門末寺院）に呼び掛ける。参加資格は二十歳以上の男女で、募集人員は二十五名であるが、お手引き（介添え）も同時に申し込むことになっている。締め切りは四月一日（平成三十一年の場合）。申し込み多数の場合は、抽選となる。

百萬遍知恩寺の塔頭（子院）は、善導院、琢窓院、寿仙院、龍見院、如意寺、瑞林院、了蓮寺、養源院の八箇所である。

かつて、末寺は三二八箇所あったとされ、旧末寺はその流れをくむ寺院である。京都府四四、愛知県三一、滋賀県二八、大阪府二四など、一四七箇所が門

末寺院となっている（令和元年九月現在）。

## 6 行事内容

四月第三日曜日に誕生寺で誕生寺二十五菩薩練供養が行われる。行事は午後三時頃に終わり、同日夕方、知恩寺が委託している京都の法衣業者が、衣裳や面を専用の箱に入れて百萬遍知恩寺に車で運ぶ。百萬遍知恩寺に到着するのは、午後七時から八時にかけてで、鍵のかかる部屋に入れて四月二十五日まで保管する。

四月二十二日、法然上人御忌大会に先立って、午後三時から開白法要が行われる（三〇～四〇分）。

四月二十三日から三日間の法然上人御忌大会は、午前六時二〇分から晨朝法要（約一時間）、午前十一時から日中法要（約九〇分）と数珠繰り（約三〇分）、午後二時から速夜法要（約一時間）の法要が繰り返される。ただし、最終日（二



写真1 阿弥陀堂での面付



写真2 阿弥陀堂での法要



写真3 御影堂へ向かう行列

十五日）の速夜法要は行わない。それぞれ、三〇分前に洪鐘（晨朝は四〇分前）、二〇分前に一番法螺、一〇分前に二番法螺があり、時間になると喚鐘が鳴らされて御影堂に昇殿する。

百萬遍念仏大念珠繰りには御影堂の外壁いっぱい広がるほどの大数珠を使用する。普段は二連の大数珠が、長押なげしの位置に吊り下げてあり、大念珠繰り際にはそれを下して使用する。大念珠繰りでは、僧侶が二枚の鉦を向い合せにした双盤鉦を、両方同時に叩く。法要の期間中、後醍醐天皇から拝領し空海の筆と伝わる「利劔名号軸」（字画が劔頭に象られた六字名号）が掛けられており、参拝客は大念珠繰りの後、順次参拝・焼香し、「利劔名號御守」を授与されて退出する。

二十五菩薩練供養が行われる年は、四月二十五日は、菩薩の役に当たる人たちは午前九時三〇分に集合する。大方丈で着替えなどの支度をし、準備が整うと阿弥陀堂に移動する。その際、面は被らずに手に持って移動する。大方丈の縁で僧侶によりお

清めを受ける。

午前一〇時頃、

法鼓が鳴らされる。

その頃、菩薩の一

行は、すでに阿弥

陀堂に到着し、コ

の字形に着座して、

面をつける。午前

一〇時二〇分、大

導師、式衆（法要

係）等が衆会堂を

出発して、阿弥陀堂に向かう。

午前一〇時二五分頃、阿弥陀堂での法要が始まる（五分）。法要の次第は次の通り。発願文、撰益文、念仏一会、回向文（維那独唱）、同唱十念。

午前一一時三〇分頃、法要が終わると洪鐘が鳴らされ、阿弥陀堂前に整列した後、お練りの行列が発発し、御影堂までの参道を歩く（約七〇m、約二〇分）。行列次第は次の通り。式務、伶人、二十五菩薩、典調、法要係、先進、役席、幹事長、大導師（法主台下）、伴僧、典調、一般出勤、式務。

午前一一時頃、一行が阿弥陀堂に到着すると、回廊（縁）を時計まわりに一周してから、正面から外陣に入堂し、二十五菩薩は式務に案内され、内陣の東西に分かれて着座する。

平成三十一年度の二十五菩薩練供養当日の日中法要の次第は次の通り。無言三拝、登高座、着座（止楽）、甲念仏（本山婦人会三名による献供）、開経偈、阿弥陀経（二十五菩薩は東西一人ずつ順に退堂）、散華（中段）、御諷誦、一枚



写真4 御影堂に入堂



写真5 百萬遍念仏大念珠練



写真6 御廟参拝

起請文、撰益文、念仏一会、自信偈、御当日御回顧、十念、四誓偈、心淨偈、

御回顧、十念、四誓偈、回向文、婦人会会員回向、十念、総回向偈（維那）、同唱十念、百萬遍念仏大念珠練、下高座、無言一拝、授与十念（奏楽）、利剣名号（焼香）、退堂（数珠を片付ける）、御廟参拝。

午前一一時一五分頃から、二十五菩薩は順に退堂し、裏堂にて光背を外し、大方丈に戻る。午前一二時三〇分頃、大方丈の前で記念撮影をおこなったあと、装束を解く。

僧侶らが退堂した後、御影堂の回廊の北東隅で、御廟参拝をする。

## 7 由来・歴史

法然上人の忌日法要は、大永四年（一五二四）、後柏原天皇より「大永の御忌風詔」が出されたことにより「御忌」法会と呼ばれるようになった。百萬遍知恩寺では、もとは一月に勤めていたが、明治十年から四月に勤めるようになった。

平成十年、百萬遍知恩寺と誕生寺とのご縁により、出開帳として始められた。

\*

最後に、本調査に際し、長谷雄良祐執事長及び大河内良博執事にご教授頂いたことに感謝の意を表す。

（調査年月日 二〇一〇年四月二十五日、二〇一九年四月二十五日）

（写真・文責 福持昌之）

# 11 大念佛寺だいにんぶつじ（大阪府大阪市平野区）

## 1 名称

「万部おねり」、または「万部法要」と称す。

平成十四年に大阪市指定無形民俗文化財となり、その名称は「二十五菩薩聖聚来迎阿弥陀経万部法要」である。「万部」とは、阿弥陀経を一万部読誦する法要「阿弥陀経万部会」の意であり、それが「二十五菩薩聖聚来迎会」と融合した行事である。

## 2 実施期日

毎年、五月一日から五日まで五日間行われる。

## 3 実施場所

融通念佛宗総本山大念佛寺（大阪府大阪市平野区平野上町一七二六）で行

われる「写真1」。

## 4 地域

平野の地は、征夷大將軍、坂上田村麻呂の次男・坂上広野麻呂の莊園があった場所であり、その子、坂上当道が祇園社を創建したのが最初とされる杭全神社がある。戦国時代には町の周りに壕を巡らした環濠都市が形成され、自治を行った地域である。

大念佛寺は、良忍上人が鳥羽上皇の



写真1 本堂と来迎橋

勅願により大治二年（一一二七）に念仏道場として創建したのが始まりとされる。日本で最初の念佛道場である。大念佛寺が杭全神社の地にあったなど、寺地が一定の地に定まっていなかったが、元和元年（一六一五）、現在の地に定まり、寛文年間（一六二四～一六七二）には伽藍が営まれた。

## 5 組織

万部おねりは、大念佛寺、その末寺三五ヶ寺の僧侶。そして、大念佛寺に  
関わる様々な講の講員などが携わる。

まず、当日の僧侶の役割からみていきたい。

大導師は大念佛寺の管長が務め、副導師は融通念佛宗の僧侶の長老で、一年交代で選出される人が務め、紫金職と呼ばれる。次に大衆と呼ばれる十四人の僧侶で、法要の際本堂内陣に座る。楽役は楽僧が務め、本堂の右側余間で雅楽を奏する。讃師役は本堂左側に座し、声明を唱える。維那師は鉦などの鳴り物を鳴らす役である。本堂左側讃師役とともに座る。座奉行は法要の遂行を取り仕切る執行役である。菩薩役は菩薩面をかぶり、二十五菩薩となる。体力のいる役であるため、年齢の若い方が就くことが多く、年配の方は菩薩をする人の装束や面を付ける役割にまわる。

次に、大念佛寺に関わる講についてみていきたい。

豊講と呼ばれる八尾市周辺の檀家で構成する講がある。名のごとく大念佛寺の豊を入れ替える役割を行う講で、この行事では本堂の入り口で受付を担当する。燈明講は、主に松原市周辺の檀家で構成し、大念佛寺の線香やろうそくを奉納する講である。別時講は奈良県生駒郡三郷町勢野周辺や大和郡山市矢田周辺の檀家で構成する講で、管長の警護や身の回りのお世話をする役割がある。禅門講は奈良県生駒市や生駒郡に広がる檀家で構成する講で融通念佛集団の中核となっている。それぞれに大念佛寺と深い由縁を持つ講である。

## 6 行事内容

五月一日から五日まで、午前中には朝六時三十分より朝のおつとめ、九時三十分より阿弥陀經の読誦があり、一〇時一五分頃より様々なイベントが催される。調査を行った二〇一九年では、五月一日はラジオの公開講座、魚山流詠讚歌舞奉納の後、布教（法話）があった。二日は大念佛寺奉賛会祈願法要、東安堵大寶寺六斎念佛講（安堵町）による六斎念仏の奉納、魚山流詠讚歌舞奉納、落語（桂文福）の後、布教。三日は融通念佛宗聖歌隊による仏教讀歌奉納、融通声明研究会による融通声明コンサート、魚山流詠讚歌舞奉納の後、布教。四日は仏教讀歌奉納、楽融会による雅楽演奏と舞楽、魚山流詠讚歌舞奉納の後、布教。最終日の五日には八島町六斎念仏鉦講（奈良市）による六斎念仏の奉納、魚山流詠讚歌舞奉納、世界平和祈願護摩供養の後、布教が行われる。

そして午後から二十五菩薩のお練りや阿弥陀經読誦が行われる。お練りを行う来迎橋は、事前に本堂向かって右手に架けられたもので、仮設の橋である。

法要の構成としては、二十五菩薩などが本堂の裏から本堂へ向かって来迎橋を渡り、本堂に至る行列を入御、堂内での法要、そして再び来迎橋を渡って帰る還御となる。本堂の裏からお練りが出発するが、出発地点を娑婆の世界（現実世界）とし、本堂を極楽の世界として再現されている点においては、當麻寺とは逆向きの世界観が展開される。還御で元の娑婆の世界に戻る意味は、極楽の世界にたどり着いた者は、再びこの苦しみ（娑婆）の世界に戻って、人々を幸せの極楽の世界に渡す努



写真2 入御

力をしなければならぬと説明されている。

一三時、入御のお練りが始まる。

これは、本堂に表された極楽の世界へ向かう様子を具体的に表現されたもので、仏の教えと救いによって、幸せの世界に必ず行きつくことができるといったことを表している。

お練りの次第は、稚児、融通教会の詠讚歌舞、鉦を叩いて踊躍念仏をする大和禪門講や、昼講、燈明講、六斎講、来賓の人々、聖歌隊、献茶の女性（慈風庵社中）、献花の女性（慈風庵社中）が渡る「写真2」。

次に、一三時三十分、法要開始の鐘を合図に楽役のうち龍笛僧によって「乱声」が演奏され、やがて「音取」、そして二十五菩薩が登場すると「菩薩」となる。行列次第は、場を清める洒水の僧侶を先頭に、楽役（笙、箏、龍笛）、天華（紙吹雪）、感得幡を持つ僧侶、鉦を鳴らす僧侶、万部輿、執事、続いて二十五菩薩となる。

二十五菩薩は、①観世音菩薩（蓮台）、②勢至菩薩（金剛合掌）、③薬王菩薩（幢幡）、④薬上菩薩（玉幡）、⑤普賢菩薩（幡蓋）、⑥金藏菩薩（瑟）、⑦獅子吼菩薩（拍子板）、⑧華嚴王菩薩（鉦鼓）、⑨虚空藏菩薩（腰鼓）、⑩徳藏菩薩（笙）、⑪宝藏菩薩（横笛）、⑫法自在菩薩（箏）、⑬金剛藏菩薩（鉦）、⑭山海慧菩薩（空候）、⑮光明王菩薩（琵琶）、⑯陀羅尼菩薩（鳳簫）、⑰衆宝王菩薩（銅鑼）、⑱日照王菩薩（羯鼓）、⑲月光王菩薩（振鼓）、⑳定自在王菩薩（太鼓）、㉑三昧王菩薩（華鬘）、㉒自在王菩薩（華幢）、㉓白象王菩薩（寶幢）、㉔大威徳王菩薩（供華）、㉕無辺身菩薩（香炉）の順でお渡りする「写真3・4」。そし



写真3 入御

て、感得幡を持つ僧侶、釣香炉を持つ僧侶、十一尊天得如来と称するご本尊を護持する僧侶、仏天蓋をかざす僧侶、鉦を鳴らす僧侶、維那師、讃師、別時講中が務める布衣、経函を持つ侍者、大導師、香侍者、別時講中が務める布衣、隨身、紫金職、大衆、礼勤となる。隨身とは、大導師に付く随伴者のこと。また礼勤とは、融通念佛宗における修行を終えて、色衣をまとうことを許された青年僧のことである〔写真5〕。

昭和六年に書かれた「平野大念佛寺練供養拝観記」の次第によると、喚鐘を合図に音楽乱声が始まり、行列次第は洒水、音楽、楽太鼓、天華、二十五菩薩と地藏菩薩、幡、釣香炉、御本尊、仏天蓋、鏡、鉦、讃師、別時講、紫金職、執事長、素襖大紋、大衆と続いた。

一三時四〇分、極楽に見立てられた本堂に入ると、いったん本堂の奥に入った菩薩十人が出て、菩薩伝供と呼ばれる献花が行われる。楽役による「略十天楽」と讃師による「四智讃」が唱えられるなか、本堂入り口に置かれた五色の紙で作られた造花を、菩薩が須弥壇前まで順番に並び、手渡しのリレー形式で



写真4 入御



写真5 入御



写真6 菩薩伝供



写真7 法要の様子

供えていく。造花は蓮（金色）・菊（黄色）・菖蒲（青色）・牡丹（赤色）・百合（白色）である〔写真6〕。菩薩伝供が終わると菩薩はまた本堂の奥に戻る。

一四時二五分、副導師を務める紫金職が焼香ののち、散華の儀が始まる。次に法要の一日目と最終日には、法要の趣旨を仏祖に報告する「宣疏」があり、「阿弥陀経」一巻の転読がある。次いで、法要の三、四日のみ「迦陵頻」と「胡蝶」の童子舞（舞楽）が奉納され、そののち大導師による焼香、「阿弥陀経」の転読、「撰取偈」、伏鉦を用いた如法念仏となる〔写真7〕。次に大導師による祈祷「内外十念」が終わるとご本尊、万部壇に三拝し、還御となる〔写真8〕。



写真8 還御（観世音菩薩）

一五時二七分、洒水の僧を先頭に入御の行列次第と同じ順で来迎橋を渡って本堂の裏へ戻る。

一五時四五分に終了となった。

## 7 由来・歴史

二十五菩薩聖聚来迎会の始まりは、貞和五年（一三四九）、大念佛寺第七世法明上人が生前に臨終の様を拝みたいと思ひ立ち、菩薩面、衣装、楽器などを調べ、奈良県の當麻寺で行われる練供養を模したといわれている。この行事は一世一代と言って大念佛寺法主在職中に一度限り盛大に修されていた。

その後、明和六年（一七六九）、第四九世堯海上人が極楽往生と檀信徒の追善のために阿弥陀経を一万部誦誦する法要を勤修し、以後、毎年四月一日から十日間にわたって行われた。

この二つの行事が天明四年（一七八四）に併せて行われるようになり、現在に至っているという。

## 8 記録類

菩薩面や衣装については、二十五菩薩とも同じであるが、宝冠については、観世音菩薩には正面に阿弥陀如来が、勢至菩薩には葉壺がみえる。

現在、岡山県瀬戸内市にある弘法寺の跏趺かた供養でみられるような、阿弥陀如来像の内部に入ることができると思われるお像が大念佛寺にもある。江戸時代の作で、迎講阿弥陀如来立像と呼ばれており、胸に刻まれた卍が内部まで貫通しているため、中から外を見ることが出来る。このことから大念佛寺でも、ある時期、迎講阿弥陀如来立像のなかに入って本堂で入御の菩薩を迎えていたが、現在は行われていない。

また、元禄九年（一六九六）の年紀の入った道具類が残されている。

最後に、本調査に際し、行事次第等について大念佛寺教学部次長吉田貴寛氏にご教授頂いたことに感謝の意を表する。

\*

### 参考文献

- 吉村暉英「七 融通念仏宗の仏具」（『仏具大辞典』、鎌倉新書、一九八二年）
- 『新修 大阪市史 第二卷』（新修大阪市史編纂委員会編、大阪市、一九八八年）
- 『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―』（龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）
- 南木生「第六回行事 平野大念佛寺練供養拝観記」（『上方』第六号、上方郷土研究会、一九三二年）
- 広報誌『大念仏』第八十四（融通念仏宗総本山大念佛寺、二〇一九年）

（調査年月日 二〇一九年五月二日・三日）

（写真・文責 奥村晃代）

## 12 常光寺（大阪府八尾市）

### 1 名称

常光寺の案内パンフレットには「大般若会（お練供養）」と記される。境内に貼られたチラシには「八尾地蔵お練供養」。

### 2 実施期日

四月二十四日が地蔵菩薩の命日であることからその日に行われるが、現在は二十四日が休日でない場合は直近の休日（四月最終日曜日）の午後三時より行われる。また地方選挙が行われる年は開催しない。

### 3 実施場所

大阪府八尾市本町五十一の一の臨濟宗南禅寺派常光寺（写真1）。常光寺は天平十七年（七四五）行基による創建で、当初は新堂寺と称し聖武天皇の祈願所であったと伝わる。本尊は地蔵菩薩で小野篁作の地蔵菩薩を安置したと伝えられるが、南北朝時代、常光寺付近にあったとされる八尾城が焼き払われた際に常光寺も焼かれ、至徳年間に再建されたと伝わる。現在の本尊はこの頃の作とされる。

その後、室町時代には足利義満が「初日山」「常光寺」の扁額を揮毫したことから、初日山常光寺と称するようになった。また八尾は大坂夏の陣においても戦場となり、本堂裏にはその時に戦死した藤堂家臣の墓が祀られている。宝永四年（一七〇七）の大地震では本堂、阿弥陀堂、行者堂が被害を受け、本堂は天明二年（一七八二）に再建された。

常光寺の主な年中行事は、四月に行われる大般若会と毎年八月二十三、二十四日に行われる山門施餓鬼会である。施餓鬼会は「八尾地蔵盆踊り」の名称で



写真1 常光寺



写真2 境内に設置された橋掛り

親しまれている。『河内名所図会』にも、七月二十四日に地蔵盆会と縁日が盛大に開かれる様子がみえる。お練供養は、阿弥陀堂から本堂にかけて長さ50m、高さ2mの仮設の回廊（写真2）を境内に設置して行われ、往きのお練りと還りのお練りの間に本堂では大般若経の転読が行われる。

### 4 地域

八尾市は大阪府の中央部東寄りに位置し、市の東は奈良県に接する。中世後期から近世初期にかけては八尾村という郷村であった。村の北側には八尾街道、立石街道）、南北にも河内街道が通り、これら街道沿いに集落が形成された。昭和二十三年（一九四八）中河内郡八尾町を中心に、竜華町、久宝寺村、大正村、西郡村が合併して八尾市となる。その後、南高安町、高安村、曙川村、志紀町、松原市の一部を編入して現在に至る。

八尾市の大部分は平野部であり、市街地は中世の頃に八尾と久宝寺が一向宗の寺内町として形成されたことにより、近世を通じて商業の中心地として発展

した。現代における主な産業は金属工業や化学工業、紡績業などの近代工業が盛んで、宅地開発も進み大阪市の振興都市となっている。

## 5 組織

『大阪府の民俗芸能—大阪府民俗芸能緊急調査報告書』によると、戦前までに組織されていた初日講が戦争によって途絶え、終戦翌年に起きた南海大地震によって被害を受けた本堂・山門を修復するため、篤信者有志により地蔵講が再発足されたとある。地蔵講の講員となるには、「(一) 本尊地蔵菩薩を信仰奉賛する信徒であること、(二) 常光寺の布教活動、および儀式行事を催行するための奉仕と経費援助をおこなうこと」である。

楽人は笙一名、篳篥二名、龍笛一名の構成で、近隣の寺関係者(大阪楽所の会員も含まれる)が務めており、常光寺のほか大念佛寺の万部法要へも楽人として参仕している。稚児行列は親鸞役(男の子)や小坊主、天冠を付けた男の子、女の子など六十名までと決められており、四月中旬頃まで稚児参加者の申し込みを受け付けている。

## 6 行事内容

会式の開始アナウンスの後、阿弥陀堂内において楽人による奏楽が始まる。奏楽の中、阿弥陀堂より①赤鬼「写真3」、②青鬼「写真4」、③閻魔大王「写真5」、④楽人(笙、篳篥、龍笛)「写真6」、⑤親鸞(子供)「写真7」、⑥小坊主「写真8」、⑦稚児「写真8」、⑧七如来「写真9」、⑨地蔵菩薩「写真10」、⑩僧侶の順番で出発し、橋掛りを本堂に向かって練り歩く。楽人は本堂に着くと、堂内に着座して奏楽を続ける。

阿弥陀堂を出発した僧侶が本堂へ到着すると、楽人は奏を止める。続いて、堂内で読経が始まり、大般若経の転読(「大般若経祈祷転読法要」)が続く。転読法要の間、僧侶は本堂前に集まった参拝者一人一人に大般若経を肩に当てる祈願成就、無病息災を願う「写真11」。転読終了後、再び読経がおこなわれて法要は終了となる。奏楽が始まり還りのお渡り(「練り返し」と呼ぶ)が始まる「写真12〜14」。

練り返しでは、①赤鬼、②青鬼、③閻魔大王、④楽人、⑤七如来、⑥地蔵菩薩、⑦僧侶の順番となり、最後に⑧講元、⑨親鸞、⑩小坊主、⑪稚児が橋掛りの上で餅まきをおこなう「写真15」。楽人は阿弥陀堂へ到着した後も、餅まきが始まるまで奏を付ける。餅まき終了後、稚児行列は橋掛りを通って阿弥陀堂へと戻り、お練り供養が終了とな



写真3 赤鬼



写真6 楽人



写真5 閻魔大王



写真4 青鬼



写真8 稚児（後ろが小坊主）



写真7 親鸞（稚児）



写真10 地藏菩薩



写真9 七如来



写真12 練り返し



写真11 祈祷法要



写真14 練り返し（僧侶）



写真13 練り返し（七如来）



写真15 餅まき

る。

## 7 由来・歴史

「大般若会」と称するように、当初は大般若経を転読する法要であったと考えられる。お練供養は明治の末に始まったと伝えられるが、資料が残っていないことから詳細は不明である。常光寺のお練り供養は、現世の苦悩の世界より来世への極楽浄土の世界をあらわしたものである。

橋掛りを練り歩く赤鬼・青鬼は地獄の世界を描き、閻魔王は善悪を裁いて悪人を地獄へ、善人を極楽の世界へ導く様子をあらわしている。また、当寺の本尊でもある地蔵菩薩を信仰することにより、閻魔王の裁きを受けて地獄に落ちた衆生を極楽の世界へ導くという地獄極楽絵巻をあらわす。現在のお練供養は地蔵菩薩による厄払い、家内安全、町内繁盛を地蔵尊に祈る儀式ともなっている。

### 参考文献

- 『大阪府の民俗芸能―大阪府民俗芸能緊急調査報告書―』（大阪府教育委員会文化財保護課編、大阪府教育委員会、二〇〇九年）
- 常光寺パンフレット

（調査年月日 二〇一八年四月三十日）

（写真・文責 出口実紀）

## 13 久米寺くめでら（奈良県橿原市）

### 1 名称

一般には「久米寺の練供養」と呼ばれることが多いが、「久米会式えしき」ともいい、久米寺では「二十五菩薩大練供養法要」とする。

### 2 実施期日

毎年五月三日。明治二十五年板行の「大和國高市郡白檀村大字叡靈禪山久米寺東塔院眞図」に記載の畧縁起には、「御説開祖来目皇子ガ最初建立ノ當時本尊薬師如来ヲ天得シ玉フ時ニ聖衆ノ菩薩来臨セリト故ニ當山例會毎年旧四月八九両日ニ廿五菩薩ノ練供養アルハ蓋シ之ヲ表スルモノナリ」とあり、かつては四月八日、九日の両日に行われていた様子である。その後、昭和三十六年以前は五月八日におこなわれていたという（岩井宏實「久米寺の会式」一九六九年）。

### 3 実施場所

真言宗御室派別格本山、靈禪山久米寺（奈良県橿原市久米町五〇二）において行われる。

### 4 地域

久米町は、橿原市南部に位置し、東西約一・二キロ、南北七五〇メートルの地域である。東端は国道一六九号（中街道）で、石川町に接し、西は学校法人聖心学院（奈良芸術短期大学、橿原学院高等学校、聖心学園中等教育学校）付近で西池尻町と接する。北は橿原神宮の境内を一部含み、南は昭和四十五年（一九七〇）頃より入居が始まった橿原ニュータウンと接する。橿原ニュータウンは、久米町、見瀬町、鳥屋町、南妙法寺町にまたがっていたが、平成三年に住

居表示が変更され、白檀町となった。おおよそ、現在の白檀町一丁目が旧久米町に含まれていた。

地域のほぼ中央に久米寺と久米御縣神社が南北に位置している。その西側の、北から字キタ、垣内、大門、そして久米御縣神社の南側の宮ノ谷、東側の東浦から、旧集落を形成していた。現在は、宅地が続いているが、かつては田畑がひろがっていた。

久米寺は「和州久米寺流記」に、推古天皇の勅願により、聖徳太子の弟、来目皇子が建立したとあり、また、女性の脛を見て煩惱をおこして神通力を失った久米仙人が建立したという説話も伝えられている。現在の堂舎のほとんどは、江戸時代の建立で、国宝の多宝塔（重要文化財）は、万治二年（一六五九）に御室仁和寺から移築されたものである。

久米御縣神社は、近世には天神社、久米宮と称し、もとは久米寺の鎮守として境内にあった。明治の神仏分離で独立することとなり、数年かかって造営及び大修繕がなされ、明治二十四年に現在地に鎮座した（明治二十四年「大和国高市郡寺院明細帳」）。

明治十二年の「大和国高市郡寺院明細帳」の久米寺の項には「檀徒 三百六十人」とあり、明治二十四年の「幣社明細帳」の久米御縣神社の項には「氏子 九拾六戸」（明治四十三年に「百六戸」、昭和十九年に「参百弍戸」と訂正）とある。

### 5 組織

二十五菩薩の面をつけて練る者と稚児は、久米寺の檀信徒から募集される。法要に出仕する他寺の僧侶は約二〇名で、奈良県内の真言宗御室派の寺院から来る。なかでも、不動院（大和高田市本郷町）、日光寺（吉野郡下市町大字阿知賀）との関係が深い。御詠歌衆は、その日光寺を拠点に活動しており、日光寺瑜



写真1 大般若経会



写真2 観音堂での御詠歌



写真3 合掌道場の二階でお練り出発前の法要

伽会を名乗る。

当日までの準備や、当日の裏方にあたる地元住民は、役員(約二〇人)、親交会(約三〇人)、婦人会(約一〇人)。そのほか、仙人講(約一五人)、御詠歌衆(約一〇人)、二十五菩薩(二五名)と付添い(二五名)が当日参加する。

## 6 行事内容

### (1) 行事次第

四月三十日頃、久米町の役員および若手有志による親交会で、来迎橋を架ける。女性はもち米洗いをする。五月二日には、本堂と合掌道場(玄関には「合掌之道場久米寺」とある)との間に、木製の仮橋が架けられる。これが娑婆と極楽浄土をつなぐ来迎橋である。

五月三日の当日は、本堂における一三時からの大般若経会、一五時から練

供養および餅撒き、観音堂での御詠歌(終日)の三部からなる。本堂入口脇には誕生仏が祀られ、自由に甘茶をかけることができる。

一三時、合掌道場の喚鐘が鳴らされ、式衆が、合掌道場から本堂まで架けられた約六〇mの来迎橋を渡って本堂に向かう。その間、本堂の脇に建つ観音堂では御詠歌衆(平成二十三年は六名)が御詠歌をあげる。

一三時一〇分頃、僧侶が本堂内陣に着座し、法要がおこなわれる。一三時二〇分頃から、大般若経会が行なわれる。内陣の礼盤の東側に祭壇を設け、釈迦・十六善神像を掛け、赤い蠟燭をともし、導師がその正面に着座し、式衆は、礼盤と導師を三方から囲むように着座する。導師が経文をあげたあと、合図となる発声と共に、式衆が折本の大般若経を使って転読する。一三時四〇分頃に法要が終了し、僧侶は仮橋を渡って戻る。釈迦・十六善神像は取り外され、大般若経も片付けられる。

一四時頃から、合掌道場の二階で菩薩の着替えが始まる。菩薩の役にあたるのは、壮年の男性である。衣装の着付けには四〇分ほどかかり、その後、面をつける。介添えを勤めるのは菩薩の役の内の人たちで、老若男女を問わず、輪袈裟をかけて参加する。一五時少し前に、合掌道場二階の祭壇で僧侶が読経し、祭壇前に置かれていた阿弥陀如来坐像を観世音菩薩の役に手渡す。



写真4 観世音菩薩（救い仏）のお練り

一五時より、お渡りが始まる。お渡りの到着に先立って、内陣の礼盤の西側に設けられた護摩壇に火が入られ、不動明王坐像を祀る。

お渡りは、先頭旗（二十五菩薩練供養法要）と染め抜かれた赤い幟旗）、檀家総代、御詠歌衆、仙人講、山伏（法螺）、僧侶（楽人。笙、箏、龍笛、太鼓）、僧侶（式衆）、稚児（二人、龍頭を持つ）、山主（住職）、十弟子、稚児、の順に出発し橋

の上をわたって本堂に進む。橋の上にて僧侶による読経があり、それが終わってから、二十五菩薩が発する。二十五菩薩の順序は、①観世音菩薩（救い仏）、②大勢至菩薩、③普賢菩薩、④薬王菩薩、⑤薬上菩薩、⑥陀羅尼菩薩、⑦法自在菩薩、⑧白象王菩薩、ここで鼓台車及び稚児（二人）が入る。そして、⑨虚空蔵菩薩、⑩徳威菩薩、⑪宝蔵菩薩、⑫金蔵菩薩、⑬山海恵菩薩、⑭金剛蔵菩薩、⑮華厳菩薩、⑯日照王菩薩、⑰衆宝王菩薩、⑱月光王菩薩、⑲三昧菩薩、⑳獅子吼菩薩、㉑大威徳菩薩、ここで大鼓台車及び稚児（四人）が入る。㉒定自在菩薩、㉓大自在菩薩、無辺身菩薩（地藏菩薩）、㉔妙音菩薩、希望する参拝者、と続く。菩薩と稚児には、それぞれ介添えが付き、それぞれの菩薩名が書かれた旗を持つ。

本堂では、僧侶が護摩を焚き、お渡りを迎える。一五時三〇分頃、稚児行列までが本堂に到着する。二十五菩薩の先頭の観世音菩薩は、一歩進むごとに大

きく腰を落し、両手で持った阿弥陀如来坐像で救う所作をする。このことから「すくい仏」と言われる。二番目の大勢至菩薩から後ろの菩薩に所作はない。

稚児らは、本堂の縁を一周し、南東角で僧侶による加持をうける。御詠歌衆、楽人は、西余間に詰める。二十五菩薩も本堂の縁を一周するが、加持はなく、そのまま本堂正面から外陣に進む。一五時四五分頃、二十五菩薩が外陣に並ぶと、ほどなく退出し、仮橋を合掌道場へと戻る。一六時頃、法要が終わり、山伏、楽人、僧侶らが退出し、仮橋を戻る。

一六時一五分頃、仮橋に山伏、役員らが登場し、読経の後、法螺貝を合図に、餅まきがおこなわれる。餅は紅白丸餅である。大きな丸餅も数枚ある。この餅まきは五分ほどで終わり、すぐさま仮橋の解体が始まる。

お練りの間、高野山金剛流の御詠歌衆が相互供養和讃の一番から三番までを繰り返す。途中、僧侶による読経がある間、いったん休む。

#### (2) 衣装・楽器

面と装束は、明治十五年に詠えられたものが伝わっている。現在使用している面と装束は、平成二十五年から使用されたものである。

#### (3) 歌詞・詞章

御詠歌衆による、「相互供養和讃」の詞章は次の通り。

- |              |            |
|--------------|------------|
| 「相互供養和讃」     |            |
| 一 一樹の蔭の雨宿り   | 一 河の流れ汲む人も |
| 深き縁の法の道      | 歩むに遠き行手をば  |
| 二 情けに包む人の慈悲  | 供うる人も受くる身も |
| 共に仏の御光を      | 受けて輝く嬉しさに  |
| 三 施主の功德を称えつつ | 御名唱えて報いなん  |
| 南無大慈如来尊      | 南無大師遍照尊    |

## 7 由来・歴史

天理大学附属図書館蔵「久米寺練供養執行絵図」（以下「執行絵図」）には、「元和年中ニ此處江本堂ヲ移□□／本尊薬師如来ヲ迎エ奉ル／此行莊ヲ以テセシガイツシカ／装束モ汚損シ此式ノ永ク中絶／セシヲ今亦昔シヲ忘レンガタメニ／此行莊ヲ修行セント欲スルコトナリ／毎年旧四月八日九日両日練供養／明治十五年壬午旧三月日／大和國高市郡久米村／靈禪山久米寺講中」とあることから、元和年間の本堂落慶に際して本尊を移した際の行列を再現した法会だったが、中断を経て明治十五年（一八八二）に復興したことがわかる。

「執行絵図」の内容をみると、御影堂から本堂にかけて仮橋が架けられている点と、途中で一回直角に曲がっている点として行列の順序が現行のものとは異なる。菩薩に介添えが描かれていないほか、現在みられる御詠歌衆、仙人講、山伏（法螺）などもない。「執行絵図」が三月の板行に対し、練供養は四月であるため、「執行絵図」は計画段階で描かれた可能性もある。

明治十五年に詠えられたと考えられる面の箱と装束箱には、すべて明治十五年四月の墨書があり、面と衣装は一揃いとして同じ人物が施主であったこと、施主は一人の場合と複数の場合があること、施主は久米村以外の住人で大阪居住の人も含まれていることなどがわかる。なお、菩薩面の箱の蓋裏に「京都大門通佛光寺北江入／佛師職／乾清太郎作之」と墨書がある。現在の、乾大佛堂である。

昭和三十年頃から、法要につづいて献花、献茶式が行われるようになり、昭和四十年代にはいって、漫才などの余興も催されたという（岩井宏實「久米寺の会式」一九六九年）。昭和三十六年頃から、二十五菩薩の前に輿に安置した久米仙人像が出るようになったが（岩井宏實「久米寺の会式」一九六九年）、現在は出していない。

なお、久米寺の練供養の日は、農家にとってレンゾという春休みで、親戚が

訪れたり、嫁に行った者も里帰りをしたりする日であった。レンゾとは、当麻寺の練供養すなわち練道れんどうに始まる言葉であるという説がある。奈良県内では三月下旬から五月の中旬にかけて、田作りを始める前の休み日をレンゾと呼び、寺社の信仰とも結びついて現在の形になったと推察されている（平山敏治郎「れんぞ」一九六七年）。

## 8 記録類

天理大学附属図書館に「久米寺練供養執行絵図」がある。

### 参考文献

- 雲雲斎霞峰画「大和國高市郡白樺村大字桑靈禪山久米寺東塔院真図」（清水熊太郎、一八九二年）
- 豊田八十代「久米寺の練供養」（『奈良の年中行事』、豊田八十代編、奈良明新社、一九一九年）
- 平山敏治郎「れんぞ 大和一带」（平山敏治郎・平岡定海『大和の年中行事』、角川書店一九六三年）
- 岩井宏實「久米寺の会式」（山田熊夫・乾健治・仲川明・岩井宏實・森川辰蔵『大和路の年中行事』、大和タイムス社、一九六九年）
- 『重要文化財久米寺多宝塔修理工事報告書』（奈良県教育委員会事務局奈良県文化財保存事務所編、奈良県教育委員会、一九八六年）
- 『新堀歌乃』（一九二〇～三〇年代における大和流ご詠歌の成立過程）（同『近代仏教教団とご詠歌』、勉誠出版、二〇一三年・初出二〇〇七年）
- 『高野山金剛流 御詠歌経典』（高野山金剛流詠歌室編、高野山金剛講総本部、二〇〇〇年）
- 福持昌之「久米寺の練供養」（奈良県の民俗芸能―奈良県民俗芸能緊急調査報告書―奈良県教育委員会編刊、二〇一四年）

（調査年月日二〇一二年五月三日・二〇一三年五月三日）

（写真・文責 福持昌之）

## 14 矢田寺やたでら（奈良県郡山市）

### 1 名称

一般には「矢田寺の練供養」と呼ばれることが多いが、「金剛山寺の練供養」「矢田地蔵練供養」「矢田山満米まんまい上人地獄廻り練供養」ともいう。

### 2 実施期日

平成七年までは、毎年四月第三日曜日。

明治十三年（一八八〇）板行の「矢田山金剛山寺練供養図」の由緒書には、「満米上人弘仁年中ニ矢田寺ニ住シ給フ其比琰魔王小野篁ニ勅シ上人ヲ冥府エ請シ即日受戒之儀式有之後琰王上人ヲ引具シ地獄ノ有様ヲ歴覽被成候圖并上人戒行ニ因テ二十五菩薩來迎在ス圖此ノ佛鉢之粧ヲ以テ毎年旧四月一日二日兩日之間練供養」とあり、旧四月一日、二日の兩日に行われていた。その後、大正年間には四月二十三日、二十四日の兩日におこなわれていたことがわかる（豊田八十代編『奈良の年中行事』一九一九年）。

昭和五十年（一九七五）頃から一日だけ、四月第三日曜日の開催となり、その後、平成八年（一九九六）からの本堂の大修理に伴い、平成七年を最後に中断した。修理後は、本堂の床面が高くなり、それまで使用していた来迎橋の設置が難しくなったため、現在も休止のままとなっている。

### 3 実施場所

高野山真言宗別格本山、矢田山金剛山寺（奈良県大和郡山市矢田町三五四九）において行われてきた。

### 4 地域

矢田町は、大和郡山市西部の矢田丘陵の東麓に所在する。丘陵の西は生駒市および斑鳩町である。北は、暗越奈良街道を境に奈良市と接し、南端は大和郡山市総合公園施設、東端は奈良県立民俗博物館を含む大和民俗公園や国立奈良工業高等専門学校が立地する。

現在はアジサイの名所として知られる金剛山寺（以下、矢田寺とする）は、天武天皇の本願により、智通が建立したと伝える。もとは十一面観音を本尊としていたが、平安時代以降は地蔵を本尊とした。矢田寺には、現在は、本堂、講堂、鐘楼、閻魔堂、大師堂、天武天皇の御影堂などがあり、子院の四ヶ坊が輪番で事務局を預かり、矢田寺の住職を務めている。

享保九年（一七二四）の「金剛山寺明細帳写」によれば、別当職である北僧坊を筆頭に、大門坊、蓮花院、光明院、前之坊、西大門坊、水之坊、坂之坊、大福院、湯屋坊、東之坊、奥之院、南僧坊、脇之坊、西之坊、北之坊、新坊、阿弥陀院、南之坊、薬師坊の二〇ヶ坊を数え、勸人坊舎として、満米堂、焰魔堂、上念仏堂、一切経堂、骨堂、舍利堂、下念仏堂、不動堂の八ヶ坊があり、満米堂、焰魔堂、上念仏堂は正月七月に寺僧が勤行をしていた。二〇ヶ坊のうち、南之坊、薬師坊は無住であったが、満米堂、舍利堂、念仏堂の堂守がおり、二十一人の僧侶と、弟子七人、隠居三人、下僧一人、承任二人、下人九人がいたことがわかる。さらには約一キロ北にある東明寺（高野山真言宗）も末寺に数えていた。

なお、矢田寺の檀家は、矢田寺周辺のごく限られた軒数であり、矢田村の人々の多くは、融通念佛宗の檀家が多い。「明治十二年七月調 大和国添下郡寺院明細帳」（奈良県立図書情報館蔵 奈良県行政文書）によれば、「金剛山寺 信徒五人」「阿弥陀院 信徒二人」「南僧坊 檀徒一七人」「北僧坊 檀徒一八〇人」「満米堂 信徒二人」「水之坊 信徒二人」「奥之院 信徒二人」「蓮花

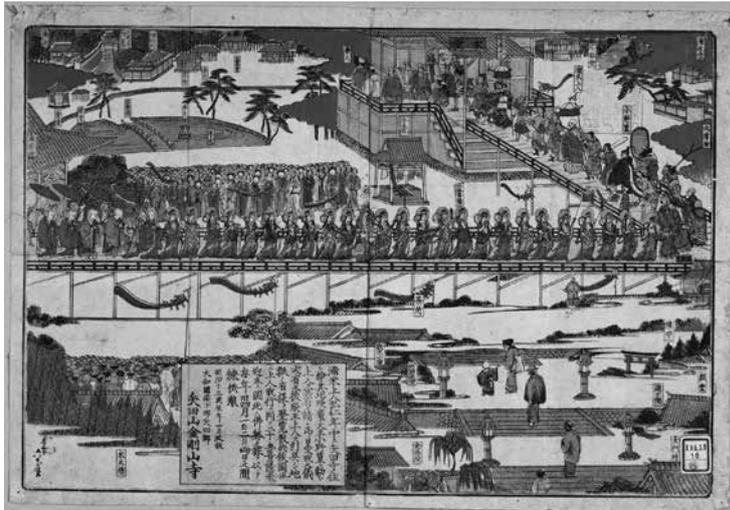


写真1 「矢田山金剛山寺練供養図」  
 (紙本多色摺、一枚、1880年、奈良県立図書情報館所蔵)



写真2 閻魔、満米上人 (昭和 41年 4月24日、喜多慶治撮影、  
 神戸女子大学 古典芸能研究センター 所蔵)

院 信徒二人」「大門坊 信徒二人」とある。

「延喜式」神名帳に記載される矢田坐久志玉比古神社は、矢田小学校の西に鎮座している。この社は、近世には大宮矢落大明神と称し、矢田寺と東明寺から二名ずつの僧侶が神役をつとめていたことが知られている。

## 5 組織

もともとは、明治十三年に装束を寄進した講や有志の組が、その衣裳を着用して行道する権利を持っていた。明治十五年「和州矢田山満米上人地獄廻り練供養図」に記された寄進者を見ると、大和郡山市(七着)、天理市(三着)、田

原本町(二着)、安堵町(二着)、三宅町・川西町(一着)、樫原市(二着)、下市町(二着)、大淀町(二着)、大阪(一八着)に分布し、矢田寺より南方への教線と、暗峠奈良街道を経て大阪への教線の広がりがみられる。

戦後の復興からは地元の菩薩講の協力を得ながら、かつて寄進してくれた講の人など、広く希望者を募るようになった。鬼役は、地元の青年団(のちに消防団)が担い、酒を飲んでから行列したこともあったという。お稚児さん行列は、各塔頭で幼稚園くらいの子供を募集した。

## 6 行事内容

### (1) 行事次第

現在は行われていないため、休止する直前の様子を紹介する。

当日は、菩薩たちは菩薩堂で着替えをし（但し、稚児は各塔頭で着替え）、午後一時より集会しゅうかいがあり、一五時に行道が始まった。いわゆる来迎橋は菩薩堂から出て、弁財天を祀る池をわたり、本堂の正面へと架けられていた。行道の途中、来迎橋の上で散華（道中散華）があり、本堂の正面までくると庭讃がある。

本堂の内陣に、本尊に背を向けて曲録が三脚用意されており、地藏菩薩を中心に満米上人らが着座する。その他の菩薩や稚児らが、外陣の長椅子に着



写真3 南僧坊から架かる来迎橋（昭和41年4月24日、喜多慶治撮影、神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵）



写真4 「第廿五番 無邊身菩薩」の面の箱蓋裏

座する。本堂では、前後讃・対揚・延命経などをあげ、法要は三〇分程度で終わる。

矢田寺の練供養は、満米上人の地獄めぐりを表しており、行列はまず閻魔王・満米上人・小野篁からなる「初」の行列と、二十五菩薩の「後」の行列、そして式衆（僧侶）の行列で構成されていた。しかし、戦後はやや省略された形で実施されてきたという。まず法被姿の金棒引き、火焰太鼓や楽人、矢田寺および近隣の真言宗寺院の僧侶による式衆（六名から一〇名、お稚児さん、そして閻魔王、二十五菩薩（九人から二〇人程度）、一番後ろは満米上人と地藏菩薩だった。三途の川辺にいとされる赤鬼・青鬼は、行列の前後を自由に動き、観客を怖がらせた。

水原渭江氏によると、練供養には、寺村から龍笛、外川村から箏築と龍笛、横山村から箏築・龍笛・鳳笙が一名ずつ出て後の二十五菩薩の先導をつとめていたという。

### (2) 設備・道具

来迎橋を収納する「橋小屋」と呼ばれる倉庫があり、現在も昭和五〇年代に新調されたスチール製の橋が保管されている。

### (3) 扮装・楽器

明治十三年に、京都の川田治兵衛が製作にあたった衣装が現存する。ただし、傷みが激しいうえに、明治時代の小柄な体型にあわせて作られているので、現代の人には窮屈であって、使用に耐えない。

## 7 由来・歴史

享保九年（一七二四）の「金剛山寺明細帳写」には、年

中行事として、年中行事として、正月元朝から十一日の修正の行（しゅしようのおこない）、二月一日から三日の修二の行（しゅにのおこない）、六月二十三日・二十四日の蓮華会、七月一日から十五日の舍利講并懺法、七月十四日の本堂・上念仏堂・焰魔堂・舍利堂などの式念仏、春秋の彼岸会があったことが記されるが、練供養は認められない。蓮華会は単に会式とも呼ばれ、彼岸会とともに参詣人が多かったと記されている。また、欲日（よくび）といって、正月十六日、二月八日、三月十五日、四月二十五日、五月二十四日、六月三日、七月十四日、八月十八日、九月十一日、十月九日、十一月十九日、十二月二十四日はその日にお参りすると靈験があらたかであるということで、参詣人が多かった。

ただ、水原渭江氏によると、明和五年（一七六八）の「大和国矢田郷矢田山金剛山寺練供養菩薩仏体銘」から、当時、初の二十二菩薩と後の二十五菩薩が加わって催されていたという。

現在伝わっている面や衣裳の箱の墨書からは、明治十三年の年記が確認できる。また、明治十三年板行の「矢田山金剛山寺練供養図」があることから、この年が復興もしくは始原といった画期であると考えてよい。

明治十五年「和州矢田山満米上人地獄廻り練供養図」には、閻魔十王・満米上人・小野篁からなる「初」が二人、「後」は二十五菩薩の二五人、式衆（僧侶）が九人描かれている。そのうち「初」と「後」の面・衣裳の寄進者が記された付箋がつく。ただし、「初」には九人分の装束について、寄進者が記されていない。しかし、「添下郡矢田村大字矢田金剛山寺付宝物明細帳」（明治二十五年の年記あり）によれば、「二十五菩薩画像 二十五面／但明治十三年大和河内撰津諸講社中ヨリ寄附」「兒装束四具／但全上」「花冠四具／但明治十年大阪上西吉平寄附」などの書き上げがあり、練供養の衣装や面、持物がほぼそろっていることや、大和・河内・撰津の諸講社中によって寄附されたことが判る。

なお、明治十三年に練供養が始められた経緯は、空圓による南僧坊の復興と関係が深いと伝えられている。空圓は、水之坊の空閑の弟子で、菩薩堂を創立し、南僧坊を再建したことから「明治重興」の祖とされる（空圓墓石碑文より）。明治十三年版行の「矢田山金剛山寺練供養図」では、南僧坊から来迎橋が渡されており、現在も橋を通すために切欠いた土塀が残されている。

戦後の復興は明らかではないが、塔頭の住職が復員してきた時期からみて、昭和二十二年以降であるという。

来迎橋は、木製で欄干があった。昭和五十年代になって、安全上の問題から橋桁を外して、地面に橋板と欄干を設え、その上を行道することになったが、数年後にはスチール製の来迎橋が完成した。

## 8 記録類

明治十五年（一九一八）に澤田喜藏が描いた「和州矢田山満米上人地獄廻り練供養図」が矢田寺に残されている。また奈良県立図書情報館に「明治十二年七月調 大和国添下郡寺院明細帳」（奈良県庁文書）がある。

### 参考文献

- 豊田八十代「矢田寺の練供養」（『奈良の年中行事』、同編、奈良明新社、一九一九年）
- 平岡定海「矢田地蔵練供養金剛山寺」（平山敏治郎・平岡定海『大和の年中行事』、角川書店、一九六三年）
- 平山敏治郎「れんぞ 大和一带」（平山敏治郎・平岡定海『大和の年中行事』、角川書店、一九六三年）
- 水原渭江「金剛山寺の練供養について」（同『日本における民間音楽の研究Ⅱ 民俗芸能における舞楽的要素の考察』、オーム書店、一九六九年）
- 岩井宏實「奈良祭事記―古都の行事めぐり―」（山と溪谷社、一九七二年）
- 「極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―」（龍谷大学 龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）
- 福持昌之「矢田寺の練供養」（『奈良県の民俗芸能―奈良県民俗芸能緊急調査報告書―』、

奈良県教育委員会、二〇一四年

(調査年月日 二〇一三年八月二十日)

(写真・文責 福持昌之)

## 15 得生寺とくしょうじ（和歌山県有田市）

### 1 名称

糸我得生寺の来迎会式（中将姫会式）

### 2 実施期日

毎年五月十四日に得生寺境内の開山堂から本堂にかけて橋がかりを設けてそこで来迎会式が行われる。

### 3 実施場所

雲雀山得生寺（和歌山県有田市糸我町二二九）境内

### 4 地域

天平宝字三年（七五九）、右大臣藤原豊成ゆきあきの女・中将姫が、継母のにくしみ

によって雲雀山に捨てられた遭難の旧跡とされ、姫の家士とされる伊藤春時が創建した草庵が最初とされる。承平年間（九三一〜九三八）に光勝大徳が中興し、「安養院」と呼ばれていた寺号をあらため、「雲雀山得生寺」と名付けて現在の寺号になったとされる。

文明年間（一四六九〜一四八四）に明秀光雲が中興し、西山浄土宗に改宗された。また、文龜年間（一五〇一〜一五〇四）以降、場所を転々とし、寛永



写真1 得生寺・開山堂

五年（一六二九）に現在の場所に移された。現在の本堂は、この年の建立とされる。また中将姫を祀る開山堂には中将姫のほか、伊藤春時夫妻の像も安置されている「写真1」。

### 5 組織

得生寺の来迎会式は、住職を大導師として行なわれる。その際近隣の僧侶も手伝いに来る。

また同寺の檀家は有田市糸我に多く、檀家によって世話人衆が結成され、二十五菩薩の着替え等の世話が行なわれる。また、二十五菩薩、中将姫の輿の担ぎ手、迦楼羅および和讃講は地元の小・中学生によって担われる。

### 6 行事内容

五月八日、地元の楽人で結成されている楽講の吹合せ会が行なわれる。また十日と十二日には婦人会による出仕があり、準備が進められる。

一四時の開式前、本堂内では鎌倉時代後期のものとされる當麻曼荼羅が開扉され、中将姫像が本堂中央の阿弥陀如来像の前に安置され、阿弥陀如来像と中将姫像に百味御膳が供えられる。

これは糸我区を中心に檀家を作ったものとともに近隣の鮎茶屋などによる御供となっている。また境内では出店が出され、「中将姫もち」が販売され、志納所では抹茶が提供される「写真2」。

一四時五〇分、本堂では多くの参拝



写真2 百味御膳



写真3 先導の僧侶と和讃講



写真4 地蔵菩薩と迦楼羅



写真6 大導師を中心とした法会



写真7 中将姫像をのせた輿

者が集り、紙芝居など中将姫にちなんだ演目が行なわれる。

一五時三〇分、開山堂では二十五菩薩の着替えが行なわれる。得生寺の菩薩は小学生が務めることになっており、父兄や世話人衆によって着替えが行なわれる。

一六時、楽講によって楽屋で道楽（抜頭楽）が奏され、道中清めの僧侶を先頭に地元小・中学生で組織されている和讃講一八名が鈴を鳴らし中将姫和讃を唱えながら橋上を進む。そしてそのあとに、地元の小学生四名の迦楼羅（赤面二名、黒面二名）を従えた地蔵菩薩がつづく。地蔵菩薩は遠方からの帰依者が務めている。この迦楼羅のあとに、二十五菩薩がつづく「写真3・4」。

二十五菩薩は世話人衆数名で介添えされる。そして二十五菩薩の中ほどには小学生四名で担がれた中将姫の輿がつく。菩薩のあとには得生寺住職が務める大導師を中心に随喜の僧侶がつづく。一行は橋を渡り、本堂へとむかう「写真5」。

一六時一五分、一行が本堂に到着すると中将姫像の前に地蔵菩薩が座り、二

十五菩薩のうち六菩薩がその脇を固める。前には中将姫の輿が置かれ、さらにその前には迦楼羅が座る。ほかの菩薩は面を外し、休憩となる。それに対し、先導を務めた僧侶が前、そのうしろには大導師が座す。その左右には随喜の僧侶たちが座る。

大導師が到着するとすぐに先導の僧侶によるお清めが行なわれ、その後すぐに大導師を中心に読経がはじまる「写真6」。

一六時三〇分、読経の途中、中将姫像が輿に遷され、本堂を出発する。この時の行列は開山堂を出た時とほぼ同じ列びではあるが、地蔵菩薩は二十五菩薩のあとにつづく「写真7」。



写真5 二十五菩薩の来迎

一六時四〇分、中将姫像が開山堂に安置されると二十五菩薩および和讃講は着替え後解散となる。僧侶は本堂での読経をつづけ、一六時五〇分終了となる。読経終了後、僧侶は本堂から退席し、終了となる。

(調査年月日 二〇一九年五月十四日)

(写真・文責 吉村旭輝)

## 16 太山寺たいさんじ（兵庫県神戸市西区）

### 1 名称

一般的には、「太山寺練供養」と呼ばれるが、正式には、「二十五菩薩聖衆来迎引撰会」である。

### 2 実施期日

毎年五月十二日に行われる。『兵庫県民俗芸能誌』（一九七七）によれば、元来は旧暦四月八日の花まつりであったとされる。

### 3 実施場所

練供養は、天台宗三身山太山寺（兵庫県神戸市西区伊川谷町前開二二四）の境内の本堂左方に位置する阿弥陀堂で行われる。

阿弥陀堂の正面には、灌頂棚が設置される。

練供養で用いられる二十五菩薩面、各種の持物、装束は、阿弥陀堂裏手の蔵（経堂）に保管されている。

### 4 地域

太山寺が位置する伊川谷町は、神戸市西区の南部に位置し、明石川水系の伊川沿いに東西に広がる農村地帯である。

西端を明石市と接し、十七の集落から成る。町内には、大歳神社、前開八幡神社、伊川谷惣社や太谷寺など多数の社寺がある。

一九四七年に神戸市の垂水区となるまで、明石郡伊川谷村と呼ばれていた。

一九八二年に神戸市垂水区が分区したことにより神戸市西区となった。

### 5 組織

練供養では、僧侶、菩薩、稚児が中心となる。

太山寺は、龍象院、成就院、遍照院、安養院、歓喜院の五ヶ坊（塔頭）からなり、練供養には、五ヶ坊の住職が出仕することとなっている。特に、五ヶ坊のうちの長老格が練供養を取り仕切る。平成十五年からは、歓喜院の住職が練供養行事全体の差配を務めている。

練供養で用いられる面、各種の持物、装束などの準備や片付けは、檀家の人びとを中心に行われているという。

練供養に参加する稚児の着付けは、歓喜院の住職の妻を中心とした「御詠歌講」の女性たちが行う。御詠歌講は歓喜院の檀家の女性たちが中心で、現在は十名程度が属している。御詠歌講では、月に一度、歓喜院に集まり、御詠歌を唱和しているという。

菩薩に扮する人びと（以下、菩薩役）は、元々は、檀家の男性であったとされるが、現在は、希望制で、男女を問わず、志納金の三千円を納めた人が務める。毎年のように菩薩役をしているという人もいれば、一度きりの場合もあるという。ただし、現在も、地域の檀家の代表となる信徒総代の男性が練供養に毎年加わっており、調査年は、地藏菩薩に扮していた。

稚児は、四から五歳の男児と女児が十数名で、練供養の際には、菩薩役に先駆けて、阿弥陀堂から行道する。近年では、稚児は、近隣の太山寺幼稚園に声を掛けて来てもらっているという。

### 6 行事内容

調査年は一三時前には、阿弥陀堂の本尊・阿弥陀如来坐像の左右に練供養で用いる面が二十五面飾られ、練供養で用いる各種の持物、装束が堂内に準備されていた。



写真1 阿弥陀堂正面の灌頂棚



写真2 着替えの様子



写真3 菩薩役らが身を清める



写真5 阿弥陀堂を出て回廊を廻る菩薩

阿弥陀堂の正面には、灌頂棚が設置され、灌頂棚の上には、水の入った水盤、仏飯の上に幣が立てられ、各種の供物（みかん、りんご、だいこん、さつまいも、きゅうり、にんじん）と生花が供えられていた「写真1」。

阿弥陀堂内の右方では御詠歌講の女性らによる稚児の装束の着付けと化粧が行われていた。

堂内には臨時の受付が設置され、ここで志納金を納め、名前と住所、回向で読みあげてもらいたい先祖供養の内容などを書き記すと、練供養でつける面の番号が伝えられる。

一三時半ごろになると、志納金を納めた人びとは、伝えられた番号の装束を持ち物が置かれた前に着座し、着替えをはじめ。法衣に天衣を纏い、頭巾をかぶり、白足袋を履く「写真2」。

一四時前になると、菩薩役にお経（三礼、懺悔文、三帰三竟）を記した紙が配られ、身を清め菩薩面を付けた後、阿弥陀堂の回廊を出て右回りに三周することが住職から説明される。

一四時になると、住職ら（調査年は三名）が本尊の前に着座し、読経の後、住職らが菩薩役に、塗香で身体を清めることを促し、洒水を行う「写真3」。菩薩役は塗香と洒水で身体を清めた後、住職らに続いてお経（「三礼」「懺悔文」「三帰三竟」）を唱える。その後、菩薩面が配られ、頭巾の上から面をつけ、輪光を背負い、面の裏に書かれた持物を持つ「写真4」。

面を付ける際には、住職らによって般若心経が唱えられ、堂内に散華が撒かれる。

準備が整うと、稚児らが先に堂を出て、お経（「四奉請」「円頓章」）を唱えながら歩く住職らの後ろに面を付けた菩薩役が続く「写真5」。太山寺練供養は、



写真4 菩薩面をつけ、輪光を背負う



写真6 回向の様子

阿弥陀堂の回廊を右回りに一列になり三周する。住職らの後に続く、菩薩役の列順は定まっておらず、堂を出た順番である。ゆつくりと三周すると、ふたたび阿弥陀堂の中に入り、面をとると着座し、住職による回向が行われる。菩薩に扮した一人一人の氏名が読みあげられ、先祖の菩提が弔われた「写真6」。

一四時四〇分頃に終了し、菩薩に扮した人びとは装束を脱ぎ、住職らから卒塔婆を受け取り、阿弥陀堂の正面に置かれた灌頂棚で水盤から櫛で水をすくい取り、卒塔婆にかけて供養すると、卒塔婆を納め、そのまま帰路に就いた「写真7」。



写真7 灌頂棚での供養の様子

十五時前から阿弥陀堂内の片付けがはじまり、一五時四〇分頃には檀家らによって裏の蔵に練供養で用いる面、各種の持物や装束が片づけられ、続いて灌頂棚も片づけら

れた。

なお、太山寺の練供養で、かつて御詠歌講が唱和していた御詠歌（「來迎會のご和讃」）は、『叡山流御詠歌和讃音譜集 第一輯』に採集されている。

永題 來迎會のご和讃

句頭

一、「來迎お会式早苗月」

綾や錦の晴姿

老いも若きも手をひいて

さっさ参ろう法の山

さっさ参ろう法の山

二、來迎お会式菖蒲月

弥陀讚歎の声に和し

浮ぶみ仏有難や

さっさ歌おうよ法の歌

さっさ歌おうよ法の歌

三、來迎お会式花五月

二十五菩薩縁起式

稚児も練り出すはなやかに

さっさ舞おうよ法の舞

さっさ舞おうよ法の舞

（『叡山流御詠歌和讃音譜集 第一輯』二四頁）

## 7 由来・歴史

昭和三十年頃まで本堂と阿弥陀堂は回廊で繋がっており、それ以前の練供養

では阿弥陀堂と本堂を往復していたとい<sup>1</sup>。

『兵庫県民俗芸能誌』によると、かつては阿弥陀堂での練供養の途中に、提婆達多という恐ろしい姿の悪者が荒々しく登場し、行道の邪魔をするが、釈迦如来に諭されて逃げてゆく一幕を演じていたとされる。

昭和五十年代に、比叡山延暦寺にて太山寺の練供養を行ったことがある。この際に、獅子吼菩薩の面が当地に残されることになったとされる。

練供養の際に、以前は臨時に楽人を雇い奏楽してもらったことや御詠歌講の女性らが御詠歌を唱和することもあったという。

信徒総代は、元は寺総代と呼ばれていたといい、寺総代を務める家は代々決まっていたという。

## 8 記録類

太山寺に関わる記録としては、「播州太山寺縁起」、「播州太山寺伽藍之圖」、「明治新撰播磨名所図絵」他、複数件ある。練供養に関わる古写真や記録等は檀家・崇敬者らで保管しているとのことであった。

\*

最後に、本調査に際し、太山寺歓喜院の辻井定宏ご住職、並びに信徒の皆様より行事次第や関連資料等についてのご教示をいただいたことに感謝の意を表します。

## 参考文献

- 喜多慶次『兵庫県民俗芸能誌』（錦正社、一九七七年）
- 桐山宗吉『菩薩の面』（兵庫県観光連盟、一九六六年）
- 『兵庫県の民俗芸能―民俗芸能レッドデータブック―』（兵庫県教育委員会編、兵庫県教育委員会、一九九七年）
- 『叡山流御詠歌和讃音譜集 第一輯』（叡山講福聚教会総本部二〇〇七、一九七三年）
- 神戸市西区・伊川谷町URL（最終閲覧日 二〇一八年六月十一日）

<http://www.city.kobe.lg.jp/ward/kuyakusho/nishi/midokoro/ikawa/>

<sup>1</sup> 『菩薩の面』によると、昭和三十三年から三十九年の本堂解体再建の際に、江戸末期ごろとみられる本堂と阿弥陀堂をつなぐ欄干の痕跡が見つかったとある。

（調査年月日 二〇一八年五月十二日・七月十四日）

（写真・文責 猪岡叶英）

# 17 大伝寺だいでんじ（鳥取県東伯郡湯梨浜町）

## 1 名称

大伝寺九品山会式（練供養）

## 2 実施期日

毎年旧暦三月十四日の日暮れから境内で九品ばやしの演奏があり、翌十五日には九品山会式が行われる。二〇一八年度、および二〇一九年度は以下の日程で行われた。

二〇一八年四月二十九日 流灌頂大施餓鬼受付

三十日 一時 大施餓鬼

一時三〇分

中将姫練供養（九品山会式）

一四時 精霊流し焼却

二〇一九年四月 十八日 流灌頂大施餓鬼受付

十九日 一時 大施餓鬼

一時三〇分

中将姫練供養（九品山会式）

一四時 精霊流し焼却

## 3 実施場所

九品山大伝寺（鳥取県東伯郡湯梨浜町引地五〇九）境内

## 4 地域

大伝寺は万寿元年（一〇二四）に後一条天皇によって開創されたと伝承されており、當麻寺から中将姫の遺跡を分移したとされる。その際練供養の儀式で迎えし、引き移したとされるため、当地は引地という地名になったとされている。応安四年（一三七一）、南条景宗によって南条氏の菩提寺として曹洞宗に改宗し再興された。しかし、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の敗戦によって焼失してしまう。当時、同じく南条氏の菩提寺であった景宗寺の住職・仙長が出雲大社の社人、杉谷佐太夫の家で子細を聞き、急ぎ長和田の草庵に閉じこもり、大伝寺の再興をはかった。慶長十年に成就し、あらためて再興された。この時、「二十五菩薩」の面もつくり、練供養を行ったと伝えられている。

しかし、間もなく本堂などを焼失し、面も半数以上を焼失してしまう。享保年間（一七一六〜一七三六）に長伝寺住職・嶺堂によって再建されている。

現在の本堂は、倉吉の行蔵院を買い受け、明治十年に建立されている。九品山会式は、旧暦三月十四日の日暮れから十五日にかけて行なわれてきた。地元では河村の三大会式（九品山・三徳山・一ノ宮）のひとつと称されており、十五日の午後には、流灌頂大施餓鬼につき、中将姫練供養が修行されている。また、大伝寺は、伯耆二七番札所となっている「写真1」。

## 5 組織

大伝寺では、二日間の大施餓鬼の際には鳥取県内各地の寺院からの参列があり、法要に参加する。参列す



写真1 大伝寺本堂

る寺院は長伝寺、長清寺、永福寺（湯梨浜町）、長景寺、興宗寺、国分寺（鳥取市）、満正寺、白峰寺、勝入寺、明現寺、胎蔵寺、極楽寺、正応寺、永昌寺、山名寺（倉吉市）、林泉寺（琴浦町）、洞泉寺、大広寺（北栄町）、龍徳寺（若桜町）、曹源寺（三朝町）の各寺院である。大伝寺住職を中心にこれらの各寺院の協力のもと法要が行なわれる。また、大伝寺は湯梨浜町野花地区に檀家が多く、同地区を中心に一二名の役員（檀家総代）を出している。また同町旭地区からも一名の役員（檀家総代）を出している。これら役員によって中将姫練供養では同姫の輿が曳かれる。

## 6 行事内容

### （1）大施餓鬼

毎年旧暦三月十五日の一一時、本堂にて大伝寺住職を中心に鳥取県内の寺院から来た僧侶とともに大施餓鬼会が行なわれる。

### （2）中将姫練供養

大施餓鬼会終了後の一一時三〇分、西本堂に安置されている輿が役員（檀家総代）によって曳かれ、御旅所に入る。御旅所では中将姫像を輿に乗せ、西本堂へむかう。その際、鉦打太鼓と半鐘によって「九品ばやし（ドンガチャン）」



写真2 中将姫像をのせる輿

が奏される。この九品ばやしがいつから叩かれているかは不明ではあるが、かつては地元の有志などによって盛んに叩かれていた。しかし、年々伝承者が高齢化し、打ち手が減少していったため、昭和六十二年（一九八七）七月、当



写真3 中将姫像が安置された西本堂



写真4 施餓鬼棚

時の青年団のメンバーを中心に「九品ばやし保存会」が設立され、その技術を伝承している。また近年湯梨浜町立東郷中学校の生徒が伝統芸能の学習として伝習し、当会式で叩くようになっていく。中将姫像が西本堂に到着すると住職を中心に法要が行なわれる「写真2・3」。

### （3）精霊流し焼却

境内では檀家から持ち込まれた大量の札などを「精霊流し焼却」として供養し、焼却をする「写真4」。

### 参考文献

□松岡布政『伯耆民談記』（因伯叢書発行所、一九一四年）

（調査年月日 二〇一八年四月三十日・二〇一九年四月三十日）

（写真・文責 吉村旭輝）

## 18 弘法寺こうぼうじ（岡山県瀬戸内市）

### 1 名称

弘法寺わひ脚供養もしくは弘法寺練供養という。昭和三十二年五月十三日に「弘法寺練供養」として岡山県指定重要無形民俗文化財に指定され、平成二十八年三月二日に「弘法寺脚供養」として記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（国選択）に選択された。

天和二年（一六八二）、同三年の箱書には「来迎供養」、明和五年（一七六八）以降と思われる行道面櫃の箱書には「行道供養」とある。

### 2 実施期日

もともと旧暦七月四日に行われていたが、安政四年（一八五七）から旧暦四月四日に、昭和二十五年から新暦五月五日に行われるようになった。

昭和四十二年十二月の火災を契機に中断していたが、平成四年六月に脚供養復活推進委員会が発足し、平成九年に再興した。

### 3 実施場所

高野山真言宗の千手山せんすゑ弘法寺（岡山県瀬戸内市牛窓町千手三三九）の子院（遍明院と東壽院）において行われる。

昭和四十二年の中断までは、山上伽藍において行われていた。その頃は、普賢堂（如法経堂）で法要が行われた後、僧侶と稚児が本堂に移動し、六菩薩らと共に行列を組み、東面する本堂（五間四方）を出て「行道橋」を北へ向かい、多宝塔の前で中将姫の像を引接した。本堂からみて南西の高地に建つ常行堂（三間四方）からは、人が中に入った阿弥陀如来像が迎え出て、中将姫の像を蓮台に載せた六菩薩らを常行堂に迎えた。このように、かつての弘法寺脚供養では、

常行堂を極楽に見立て、地形の高低差を活かした行道が行われていた。

### 4 地域

千手地区は、瀬戸内海の港町で知られる牛窓港からみて西方にあたる農村である。寛文五年（一六六五）には、院主とされる遍明院のほか、円蔵坊以下一四坊を数えたが（岡山藩神社奉行定書）、明治八年には合併などで遍明院ほか三院となった。

山上には、本堂・普賢堂、多宝塔、鐘楼があったが、昭和四十二年の火災によって、それらを焼失した。

### 5 組織

千手地区および弘法寺壇家によって「弘法寺脚供養保存会」が組織されている。

### 6 行事内容

六観音が中将姫の像を極楽浄土に來迎する行事。平成九年の復興以降、弘法寺子院の遍明院と東壽院が隔年で行事坊を務め、行事坊から行列が出発する。平成二十八年の次第を略述する（行事坊は東壽院）。

五月五日、参列者の受付（午後一二時半から）に先立ち、遍明院でうどんの振る舞いがあり、参列者はそれを戴いてから、東壽院に集まる。受付が済むと、稚児を優先して着付けが始まる。

午後二時頃、行事坊の喚鐘が鳴らされると、行事坊の本堂では理趣三昧法要が始まる。法要が始まると、稚児が参列する。法要が行われるのと並行して、別室では菩薩らの着付けが行われる。

午後二時三〇分頃、僧と稚児による「まわり行道」の後、稚児は中座し、別

室にて待機する。

午後三時頃、法要が終わると、袴姿で鈴りんを持った印頭いんとう役が先導し、大傘を差し掛けられた導師（行事坊の住職）が中将姫の像を載せた須弥壇を胸の前に持ち、娑婆に見立てられた場所へ向かう。導師は、娑婆に到着すると卓に須弥壇を置き、曲録に腰かけて、観音菩薩らの到着を待つ。

その後、行事坊を菩薩らの一行が出発し、中将姫の像が待つ娑婆へ向かう。その行列の次第は次の通り。

棒付ぼうつき（棒を持った警固役。一名）、その後ろからは二列縦隊になり、花稚児（女児は花束、男児は杓子を持つ。一六〜二〇名）、楽人（法螺貝二名、銅鑼二名、鏡にょうはち鉞二名）、僧侶（約一〇名）、稚児（二二名）、本稚児（玉幡を持つ。中学生。二名）、天童（天童面をつけた男児。二名）、地藏菩薩（地藏面をつけ、錫杖を持つ成年男子。二名）、観音菩薩（菩薩面をつけた成年男子。六名）。これらの観音菩薩のうち、一列目の二名は、表観音おもて（観音菩薩の筆頭）、裏観音うら（蓮台を持つ）といい、行事の中心的な役割を果たす。



写真1 まわり行道



写真2 裏観音・表観音の行列



写真3 中将姫の像を迎える阿弥陀如来像

面を付けた役には、それぞれ袴姿の介添えが付く。また、行列は法螺貝を合図に進み、銅鑼を合図に止まることになっている。

行列が娑婆に到着すると、中将姫の像を蓮台に迎える「来迎引接らいごういんじょう」がおこなわれる。合掌した表観音と、蓮台を持った裏観音が中将姫の像に向かって並ぶと、表観音は数歩前に出て、膝を曲げて中腰になる仕草を三回おこなう（お辞儀の所作）。次に、合掌した両手を、すり合わせるような仕草を三回おこなう。この際、左手は動かさず、右手だけで輪を描く仕草を三度、次にゆっくりと三歩進み、二歩戻る。この一連の所作を三度繰り返すと、卓の前に至る。導師は、立ち上がって中将姫の像を表観音に手渡す。中将姫の像を受け取った表観音が、右回りにゆっくり振り返り、蓮台を捧げ持った裏観音のほうへ引き返す。裏観音の持つ蓮台に中将姫の像を載せると、表観音は蓮台ごと裏観音から受け取る。蓮台を渡した裏観音はここから合掌し、膝を曲げて中腰になるお辞儀を三回し、合掌した手をする合せる所作を三回おこなう。

なお、来迎引接の場面で表観音・裏観音がおこなう合掌した手をすり合わせる所作であるが、當麻寺の奉奏舞、即成院の極楽浄土の舞にも共通する所作が見られる。

その後、行列は再び二列縦隊となり、行事坊である東壽院の山門を出て、もう一つの子院である遍明院へ向かう。

午後三時二〇分頃、遍明院では、阿弥陀如来像（迎え仏）が、両脇を袴姿の介添えに支えられ、本堂の外に出て、観音菩薩らの行列を待つ。この阿弥陀如来像は、寄木造で中は空洞になっており、鳩尾みぞおちあたりの高さには、前後に二本の梁が渡されており、中に入った人はこれを両肩

に載せて像を保持する。また、足元は膝から下がなく、小さな歩幅でなら歩くことが出来る。

午後三時三〇分頃、稚児たちが遍明院に到着し、阿弥陀如来像の前を通って本堂へ入っていく。阿弥陀如来像は、天童、地藏菩薩、観音菩薩が揃うと彼らに一礼し、天童、地藏菩薩、観音菩薩は二名ずつ阿弥陀如来に挨拶をする。

弘法寺の脚供養の特徴のひとつは、阿弥陀如来の仏像をかぶり、往生者を出迎える「迎え仏」の様子を演じる点にある。このような、中に人が入る阿弥陀如来像は、當麻寺（奈良県）、大念佛寺（大阪府）にも現存するが、行事として行われているのは弘法寺だけであり、古い練供養の形態をうかがわせるものとして貴重である。

## 7 由来・歴史

弘法寺の創建は奈良時代、天智天皇の勅願寺として建立されたと伝える。古くは興法寺と呼ばれ、養老年間（七一七～七二三）に落雷によって、堂塔伽藍が炎上した。

その後、報恩大師が天平勝宝四年（七五四）、孝謙天皇の勅命により加持祈禱したところ、天皇の病気が平癒されたことにより、備前国四八ヶ寺の霊場を建立され、弘法寺はその第一霊場として、寺境内に四八坊を建立されたと伝えられている。

練供養の起源は不詳であるが、練供養に使用されていた鼓胴の内側に永仁四年（一二九六）七月十三日の銘がある事などから、鎌倉時代には何らかの形で行われていたと考えられている。

江戸時代の脚供養の様子は、当寺の住僧寂然が天明元年（一七八一）に書いた「報恩大師縁起草案」に記され、毎年七月一日から七日間、御影堂で不退伽行が修されていたという。

十方旦那ノ菩提ヲ祈リ、七月四日庭上ニ於テ脚供養ノ儀式ヲ行ヒ、貴賤、男女往生極楽ノ姿ヲ顕シ、参詣ノ輩ニ後生善所ノ望ミヲ励マス。地藏錫杖ヲフリ、救ヒノ観音腰ヲ撓マシ、諸天童子ハ幡蓋ヲ捧ゲ、音楽幽ニ聞エテ教主ノ弥陀御迎ニ出給フ

また、宝永七年（一七一〇）の「備前国邑久郡豊原庄千手山弘法寺図略由来記」及びそれとほぼ同時期のものと思われる「備前国邑久郡千手山弘法寺脚供養之図式」の版木が残されている。特に後者は、当時の脚供養の様子がよく伝えられている。

### 参考文献

- 坪井俊映「弘法寺の練供養（岡山県）」（『民間念仏信仰の研究』、佛教学民間念仏研究会編、隆文館、一九六六年）
- 關信子「『迎講阿弥陀像』考——当麻寺の来迎会と弘法寺の迎講阿弥陀像——」（『仏教芸術』二二二号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年）
- 竹内平吉郎「千手山弘法寺の練（脚）供養」（『岡山県の民俗芸能——岡山県民俗芸能緊急調査報告書——』、岡山県教育委員会、一九九六年）
- 關信子「千手山弘法寺脚供養」（『千手山弘法寺脚供養推進協議会』、二〇〇五年）
- 「極楽へのいざない——練り供養をめぐる美術——」（『龍谷大学龍谷ミュージアム』、毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）
- 「弘法寺脚供養」（『月刊文化財』六三〇号、文化庁文化財部監修、第一法規、二〇一六年）

（調査年月日 二〇一六年五月五日）

（写真・文責 福持昌之）

## 19 誕生寺たんじょうじ（岡山県久米郡久米南町）

### 1 名称

地域では「会式」「練供養」などと呼ばれて親しまれているが、正式な名称を「法然上人御両親御追恩二十五菩薩天童迎接練供養会式大法要」という。以前は「円光大師御両親追恩二十五菩薩迎接練供養会」といった。平成三十一年度については「西日本豪雨被災者精霊ご回向」兼修とされる。

昭和三十年に「誕生寺二十五菩薩練供養」の名で岡山県指定重要無形民俗文化財の指定を受けている。

### 2 実施期日

大正の頃には旧暦の三月二十四日に行われていたが、第二次世界大戦後には新暦の四月十九日に行われるようになったという。そして平成に入ってから四月の第三日曜日に行われている。

法然上人の父、漆間時国の命日が旧暦の三月十九日であるため、一ヶ月遅れの四月十九日に行われていたともいわれる。

### 3 実施場所

極楽に見立てた本堂（御影堂）「写真1」と、境内東方の参道脇にある娑婆世界に見立てた娑婆堂の間で行われる。本堂の本尊は圓光大師（法然上人）像である。

### 4 地域

誕生寺は岡山県久米郡久米南町里方（美作国久米南条郡北庄里方村）にある浄土宗の寺院で、山号を栢社山かしやまという。周囲は水田が広がる農村地帯である。



写真1 極楽に見立てられる本堂

寺がある場所は法然上人誕生の地、父漆間時国の屋敷跡とされる。その草創については諸説あり、『蓮門精舎旧詞』誕生寺伝によると法然上人が誕生した際の奇瑞にちなんで、父の時国が小椋の近辺に一字を建立した。また元禄四（一六九一）年成立の『作陽誌』では、承安五年（一一七五）の浄土宗開宗の年に、故郷に戻った源空（法然上人）が父の墓の前にぬかずき、

父の遺命に基づいて栢社の地に一字を建立して「栢社山誕生寺」と号したという。

境内から東に向かって真つすぐ延びる参道があり、その中ほどに熊谷直実ゆかりの念仏橋という五輪塔型の親柱をもつ石橋がある。江戸期には誕生寺門前の参道両側には塔頭が立ち並んでいたという。

誕生寺には一山寺院として別に栢社山浄土院がある。浄土院は誕生寺門前おかのま岡坊として存在していたが、いつの頃からに廃寺となっていたものを再興開山したという（再興年未確認）。誕生寺の檀家は主に、寺院の位置する久米南町の西幸、小原、里方、南庄、下弓削、美咲町みさきの原田、頼元などにある。

## 5 組織

練供養はその年に追恩大法要の導師を勤める寺院と縁が深い僧侶と檀徒・信徒の方々を中心に行われる。導師は誕生寺の住職が、全国にある浄土宗寺院の住職に依頼をして決める。誕生寺側からは、誕生寺と一山寺院の浄土院の僧侶とそれぞれの檀家加わる。また岡山県内の浄土宗寺院や、県外で誕生寺と関わりのある寺院の僧侶が法要に加わる。

平成三十一年度の庭儀式（練供養）における行列の並び順は次の通りである。

一・先払（一名）、二・練供養旗（一名）、三・洒水器（一名）、四・行花（二名）、五・天童稚児（十六名）、六・行灯（二名）、七・両幡講旗（二名）、八・二十五菩薩（二十五名とそれぞれに手引きがつく）、九・行香（二名）、十・大導師旗（一名）、十一・随喜寺院（左脇陣）前半（十九名）、十二・浄土門主御代理大導師（大導師と導師係および伴僧二名）、十三・随喜寺院（右脇陣）後半（十八名）、十四・供養菓子（四名）、十五・鳳輦（四名）、十六・供養菓子（一名）、十七・誕生寺和上（伴僧二名）、十八・供養菓子（二名）、十九・詠唱隊（指揮杖僧侶一名と詠唱隊十五名）、二十・後払（一名）。

この内、四、六、八、九、十一、十三、十四は追恩大法要の導師を務める寺院の僧侶と檀家を中心に役割が決められるが、人員に不足がある場合は誕生寺の檀家が務める。

稚児については一般からの募集も行われ、所定の期日までに冥加料を納め参加する。菩薩役も個人の希望による場合がある。

お会式二週間前の土曜日、または日曜日に檀家を中心となって本堂や境内諸堂宇に五色幕や向拜幕等を張ったりする。また本堂前と山門には門前の檀家と有志によって棧橋が取り付けられる。

一週間前の日曜日には、門前の檀家と有志によって吹流しを境内に四本、娑婆堂に二本、本堂の南西側にある椋の枝に、白い幡を二本掛ける「写真2」。

この椋は両幡の椋といい、長承二年（一一三三）に法然上人誕生の際に、西から白幡二流が飛んできて、七日後に飛び去ったという伝承をもつ。現在の椋は三代目であるときれ、誕生椋と刻まれた石碑が立てられている。練供養で使用される菩薩の衣装は、檀家の女性によって和裁による修繕がおこなわれたり、新たな生地を用いて作成されたりしたものである。衣装や面は同寺の衣裳部屋で保管される。本尊へのモチなど供物は前日に用意する。

## 6 行事内容

平成三十一年度の四月二十一日に行われた、お会式当日は次のように行事が進行した。

- |        |                            |
|--------|----------------------------|
| 一〇時    | 開白・回向（本堂）                  |
| 一〇時    | 詠唱奉納大会（瑞応殿）                |
| 一〇時三〇分 | 法話（瑞応殿・今年度石見教区浜田組十念寺住職が担当） |
| 一一時    | 随時回向（本堂）                   |
| 一二時    | 日中法要（本堂）                   |



写真2 両幡の椋

一二時一五分)

・三〇分) 百万遍大念珠繰り(客殿)

一三時三〇分) 追恩大法要(本堂・今年度は広島教区西部組妙慶院長老・

清岸寺住職が導師を務める)

一四時五〇分) 久米南町傘踊り(瑞応殿前から娑婆堂まで)

一五時) 庭儀式(練供養)(本堂・娑婆堂間)

一五時三〇分頃) 鶴丸太鼓(瑞応殿前)

一五時四五分) お練り帰着閉帳供養(本堂)

今回のお会式で一〇時半から瑞応殿で行われた説教・会式法話は石見教区浜田組十念寺の住職によって行われた。

一二時一五分からと一二時半からの二回にわたり客殿で、百万遍大念珠繰り「写真3」が行われる。希望者はだれでも加わることができ、参加者を入れ替え二回目が行われた。京都百万遍知恩寺で行われる念珠繰りに因んだ行事である。

その後、一三時半から本堂で行われる追恩大法要の導師は浄土門主御代理大導師として、浄土門主より任命を受けた浄土宗寺院の住職が務める。平成三十一年度は広島教区西部組妙慶院長老・清岸寺住職であった。この時本堂前方の外陣に設けられた席には導師を務める清岸寺の檀家の



写真3 客殿で行われる大念珠繰



写真5 本尊脇に安置された秦氏像



写真4 娑婆堂に安置された漆間時国像

方々が座った。

特に菩薩役を務める人は追恩大法要に参加する必要がある、本堂内の左右にある脇陣、僧侶が座る席の後方に菩薩役を務める方々の席が設けられている。法要が終ると、練供養の役を務める人は客殿へ移り、菩薩面や衣装を身に付ける。その際檀家のご婦人方が着付けの手伝いを行う。

準備が整うと本堂や付随する廊下などに並んで隊列を調える。一五時になると練供養の行列は本堂を出発し、法然上人の父親である漆間時国の像、あるいは母親の秦氏君の像が待つ娑婆堂へ向かう。平成三十一年度は父時国の番であった。その年に迎えられる像は練供養が始まる前に密かに娑婆堂へと運ばれ安置される「写真4」。迎えられない像はお会式の際には本尊脇に安置されている「写真5」。

行列は、前述の「5組織」で示した順に進む「写真6」。菩薩役は面をつけ視界が悪いため、主に身内のものが介添えにつく。娑婆堂へ向か



写真6 娑婆堂へ向かう二十五菩薩



写真7 娑婆堂で鳳輦に移される漆間時国像



写真8 本堂へ戻る一行と漆間時国の鳳輦



写真9 本堂帰着後に行われる閉帳供養

う際、鳳輦（輿）には九歳の法然上人像が載せられている。娑婆堂へ着くと法要が営まれ、大導師より誕生寺和上に手渡された時国の像が鳳輦へと載せられ「写真7」、極楽に見立てられた本堂へ向かって出発する「写真8」。娑婆堂への道中では往路復路ともに僧侶が参道の脇で希望するものに散華を手渡していた。受け取った参拝者の中には数十円程度を僧侶がもつ華籠皿に入れる人もいた。

一五時四五分ごろに本堂へ戻ると、お練り帰着閉帳供養が行われる。内陣には大導師を中心に僧が並び、本尊の正面、外陣の中央に地藏菩薩役、向かって左に観世音菩薩役、右に大勢至菩薩役が座りそれぞれの背後に手引き役の人が座る。さらに背後には誕生寺和上が座り「写真9」、御本尊宝前に時国の像を安置する。他の役を担った人々は本堂へ戻るとすぐに客殿へ向かって着替えをする。法要が終れば全ての行事が終了する。

その後、瑞応殿前で鶴丸太鼓の奉納が行われた。このころ、本堂内に供えられていた鏡餅ほどある大きなモチが切り分けられ、境内で参詣者などに配られていた。

## 7 由来・歴史

同寺における練供養の起源は記録が残されていないため不明であるが、元禄十三年（一七〇〇）に復活したと伝えられている。その契機としては同八年（一六九五）に本堂が再興されたこと。同十二年（一六九九）に將軍家より寺領五十石を拝領したこと、さらに桂昌院の位牌と詞堂料として黄金百両が下附されたことなどがある。

そして同寺所蔵文書には、「元禄十二年卯極月朔日谷中の空務并春光寺両施主にて練供養の廿五菩薩面并地藏面共に廿六并装束少添寄附」とあり、この年

に復活したことがわかる。

誕生寺の練供養は法然の両親をお迎えする形で行われているが、同寺には鎌倉時代に作成と考えられる刺繍の弥陀三尊来迎図があり、この来迎図のために作成された漆箔両開式の厨子を作り、裏面に「中将姫織之真蹟 作力里方 誕生重宝 再興松仙 利益法界」と書かれている。また享保三年（一七一八）に当麻曼荼羅を写したと伝えられる曼荼羅、さらに江戸時代の作成と思われるが、中将姫が自らの頭髮を糊で固めて文字にしたという、十字名号がある。これらの存在から誕生寺の練供養においても迎えられるのは中将姫であった可能性が指摘されている。

現在の娑婆堂は境内から東に三〇〇メートルほど離れた所、参道北側にあるが、これは昭和七年に法然上人生降誕八〇〇年を記念して移転、整備されたものである。それまでは山門を東へ出て現在の娑婆堂に至るまでの中間地点にある四つ辻を南に進んだ所の西側にあった。建物は無く石造の六地藏のみが並んでいたという。付近には練供養屋敷があり、以前はここで練供養の準備をしていたとされる。明治・大正の頃には、ここに設けられた娑婆堂まで、参道の路面に板が敷かれており、その上を練供養の行列が進んでいたという。

京都市左京区にある百萬遍知恩寺では毎年四月二三日から二五日にかけて宗祖である法然上人のご遺徳をしのぶ御忌大会が行われる。この法会では三年に一度、最終日の二五日に誕生寺の菩薩面や衣装を用いて練供養が行われる。いわゆる出開帳で、平成に入ってから始められたとされる。平成三十一年はその年にあたり百萬遍知恩寺で練供養が行われた。面や衣装は百萬遍知恩寺によって両寺院の行事に間に合うようにトラックで運ばれる。

## 8 記録類

近年、誕生寺の所蔵文書が翻刻され、発行されたので参考文献に記しておく。

## 参考文献

- 『岡山民俗』第二十二号（岡山民俗学会、一九五六年）
- 『石橋誠道「美作国誕生寺の伝説」』（摩訶衍）十一号、佛教専門学校出版部、一九三二年）
- 『北山敏雄「郷土の法然上人と誕生寺の今昔物語」』（久米南町偉人顕彰会、一九七六年）
- 『中将姫説話の調査研究報告書』（財）元興寺文化財研究所、一九八三年）
- 『岡山県史 第十六巻 民俗Ⅱ』（岡山県史編纂委員会編、岡山県、一九八三年）
- 『袖山栄真・田中祥雄「美作誕生寺古記録集成」』（山喜房仏林堂、二〇一七年）
- 『誕生寺練供養弘法寺踰供養―岡山県指定重要無形民俗文化財の記録 DVD補説―』（岡山県立美術館、二〇一四年）

（調査年月日 二〇一九年四月二十一日・五月十二日）

（写真・文責 平松典晃）

## 20 阿弥陀寺あみだじ（山口県大島郡周防大島町）

### 1 名称

「法王山阿弥陀寺の回向祭。二十五菩薩練供養」、一般的には「阿弥陀寺の回向祭」と呼称される。

### 2 実施期日

回向は四月二十三日より二十七日までの五日間かけて行われる。今回取材したのは二十七日のみである。この日を回向祭と称した集大成として総回向、二十五菩薩の行列と流灌頂が行われる。文化三年（一八〇六）に檀家の人々によって始められた一週間にわたる「常行念仏」が起源とされている。平成二十四年から、現在の五日間に変更された。

### 3 実施場所

回向は阿弥陀寺（山口県大島郡周防大島町久賀本町四四六八）境内で行われる。練供養（二十五菩薩行列）はもと久賀明治維新百年記念公園まで行き、そこで流灌頂も行っていった。門徒の高齢化などもあり、現在は阿弥陀寺周辺を行列が歩き、流灌頂も練供養一行が戻ってきた後、寺敷地内で行われる。塔婆は現在も記念公園で後日焼く。

### 4 地域

周防大島町久賀地区。昭和二十九年刊行の『久賀町誌』によると「郡中の浄土宗の僧侶はみな参集し、関係者は島外からも集まる」とある。この日も島内外から僧侶を招聘していた。招く僧侶の人選は阿弥陀寺の世話人、総代会で決められる。ハワイ移民を輩出した元来出稼ぎが盛んな土地柄であるため門徒が

久賀地区以外にもいる。このため久賀以外の参拝者が散見され、ハワイからの寄付もある。

久賀地区は旧久賀町にあたり、周防大島の北西に位置する。北は広島湾に面し、他三方は山に囲まれた平地が開けた場所である。

行政区画の変遷を概観すると、江戸時代には長州藩によって周防大島と周辺地域は大島宰判という行政区画とされ、勘場（代官所）がこの久賀地区にあたる久賀村に置かれ、古くから周防大島の中でも政治的な中心地であったことがわかる。支配は地方じかたの久賀村と久賀浦に区分されており、阿弥陀寺はこのうちの久賀浦に位置する。明治になって一時東久賀村と西久賀村とに分かれたことがあったが、明治三十七年に町制施行、昭和三十一年に山を越えた西に隣接する椋野地区を合併して旧久賀町となり、平成十六年に島内他三町と合併して現在の周防大島町となっている。

前述の『久賀町誌』の記載によると、旧久賀町の寺院は五寺あり、浄土宗の阿弥陀寺の檀家数は五五〇軒で、町内でもっとも多い。次いで真宗の五〇〇軒で突出している訳ではない。宗派では他に曹洞宗の寺院が一寺あり、他は真宗である。

### 5 組織

回向には総代会、世話人、光明会などの組織が関わる。総代会は運営協議会であり、総長のもと五人の運営委員がいる。世話人が実務を担当し、久賀の各地区に合わせて一五名置かれている。光明会は二〇名弱おり、檀家の婦人会のような存在である。

練供養はこの世話人・光明会が中心となって門徒の中から希望者を募る。親族が亡くなった供養で参加するというのが参加するきっかけとしては多い。代理で参加した人がいるので、門徒中から選ぶというのは徹底されていない。そ

れぞれ二十六菩薩を担当する。先頭の地藏菩薩は男性だが、ほかの二十五菩薩は女性である。菩薩を模した仮面と金襴緞子の上衣、股引、草履ばき、頭には瓔珞、さらに金箔塗の後光を模したものを後頭部に身につけ、仏とつながるとされる真っ白な「善の綱」を頼りに寺周辺を歩く。菩薩が極楽浄土へと導く様子を表現している。その後を西方丸と呼ばれる浄土への舟が続く。舟は人が一人乗ることができる大きさの帆掛け舟である。そのほかに諸精霊位牌の社などがある。行列の参加者は法要に参加した僧侶や、阿弥陀寺が経営する久賀保育園の園児と保護者である。園児は天童（ちご、稚児とも）と呼ばれ袈裟などに着替える。細かい変遷はあるが、以上が近年の行列の基本構成である。

## 6 行事内容

訪問時（平成三十年四月二十七日）は一五時前で、総本山布教師和歌山教区来迎寺住職を迎えての法要が行われていた。この合間に菩薩に選ばれた人々が装束に着替える。一行の進路となる道は午前中から通行規制がなされている。往時は多くの屋台でにぎわったというが、本年も出店が一店あった。本堂には浄財と書かれた賽銭箱が設置されたほか、極楽浄土へ向かう舟を模した西方丸が台車に乗せられ、行列の準備も進められていた。また、角塔婆が本堂の前に建てられていた。角塔婆は回向中ここに常に立てられる。本堂の中では檀家の塔婆が入れ替えながら立てられて法要が行われた。塔婆には種類があり角塔婆がもつとも各



写真1 善の綱をたよりに境内を出発する



写真2 僧侶、稚児らが菩薩の後に続く



写真3 戻ってきた一行

上である。これは寄付額によって異なる。一五時四〇分、装束に着替えた練供養参加者が法要に加わる。続いて天童らも入ってくる。

一六時過ぎ、法要が済み、一行の出発準備が始められる。男性が担当する地藏菩薩を先頭として出発した。女性の担当する菩薩は、本来は順番が決まっているものの、現在は順不同で準備が整った人から加わっていった。世話人らが善の綱を手引きし、一行の進行の手助けをする。菩薩に扮した一行の後に台車に乗せられた西方丸、諸精霊位牌が続いた。これらも世話人が引く。そのあとを法要に参加した僧侶、天童とその保護者らが歩いた。阿弥陀寺の周りを一時間弱かけて歩き、一行は境内へと戻ってくる。他には詠唱隊と呼ばれる仏式の御詠歌をラジカセで流す役などがあり、いずれも世話人らが担当する「写真1・2・3」。

一七時前、境内の脇で施餓鬼供養が行われる。餓鬼壇が設けられ、三界万霊

と書かれた位牌を置き、阿弥陀寺住職を中心にお経が唱えられる。左右に僧侶、その後ろに菩薩役の人々、天童と保護者が加わった。

一七時過ぎに練供養の行程は終了した。塔婆の撤去や菩薩に扮した人の衣装の洗濯など世話人や光明会を中心に片付けが行われる。

## 7 由来・歴史

阿弥陀寺自体は天文年中の開基とある。回向は本年が二二二回目ということであった。『防長風土注進案』によれば「常念仏 文化三寅ノ年御免、毎年三月廿五日回向執行仕候事」とあり、これの記述に基づいていると思われる。久賀浦の寺院であるため、安政期の記録では浦方の門徒が多いのが特徴であった。

練供養は、法然の誕生寺の行列をかたどったといわれる。こちらは昭和二十三年にはじめられた比較的最近のものである。人々の生活が困窮を極め、回向祭も年ごとに寂れる一方だった中で、信仰心を失わせまいと当時の中山真哲住職が誕生寺で行われていた菩薩供養を取り入れたのがはじまりとする。今回取材した方々によれば、古くは町内の小中学校は午前で休みとなりぎわったものだという話や、通りが人で埋め尽くされたなどという思い出なども聞かれた。阿弥陀寺南の中央選果場の広場には陶器市や種市があったという。

二十五菩薩を模した仮面は、地元で知られた京仏師・佐川定慶の作品である。佐川定慶（一九〇七～二〇〇一）は、周防大島から出稼ぎで宮大工の仕事を受け負い、山門などに見られるすぐれた彫刻などで知られた「長州大工」と呼ばれる職人集団の系譜をひく門井家で学び、戦後京都の仏像修復などに関わった人物である。先述の中山住職の同級生というつながりがあった。

練供養に何度も参加し、衣装を自分で仕立ててくる人がいる。二十五菩薩全ての役を果たすと満行・満願といい、満行記念にその仕立てた衣装を阿弥陀寺に寄付する人が過去にはいた。人口が比較的多かった以前には、希望してもな

かなか参加できるものではなかった。このため、長く久賀地区に住む人々にとって、行列に参加できることは名誉なことであり、現在でもその認識は残っているようである。

## 8 記録類

古文書等の資料は刊行された物（『防長風土注進案』）を、ほか総代世話人宛の案内文、一般配布用の案内文を参考にした。

### 参考文献

- 『防長風土注進案』（山口県文書館編、一九八三年）
- 『山口県久賀町誌』（久賀町誌編集委員会編、久賀町、一九五四年）
- 『京仏師 佐川定慶、小松海軍探照灯陣地跡』（周防大島町文化振興会、二〇一〇年）
- 『映像』『阿弥陀寺 回向祭 二十五菩薩練供養』（アイ・キャン製作、二〇一五年）

（調査年月日 二〇一八年四月二十七日）

（写真・文責 徳毛敦洋）

## 第四部

### 調査の概要と体制

## 1 調査の趣旨

當麻寺二十五菩薩来迎会調査事業は文化庁・奈良県の補助を受け、平成三十年、令和元年度に実施されたものである。

今回の調査では、當麻寺において伝承されている當麻寺二十五菩薩来迎会（練供養）の保存伝承及び文化財保護のための詳細調査をおこなった。成果は、今後の保護施策立案の基礎資料とし、併せて地域文化の高揚に資する事を目的とする。

## 2 事業主体

葛城市教育委員会

## 3 協力機関

奈良県教育委員会事務局文化財保存課（平成二十九・三十年度）、奈良県地域振興部文化財保存課（平成三十一年度）

## 4 調査期間

(1) 平成二十九年度（補助事業外）

文献調査を実施し、次年度以降の現地調査の基礎資料とするとともに各地の練供養の調査候補を選定した。

(2) 平成三十年度

當麻寺における現地調査及び各地の練供養の詳細調査を実施した。

(3) 令和元年度

詳細調査及び各論考の原稿をとりまとめ、報告書を刊行。また、必要に応じ補足調査をおこなった。

## 5 調査体制

(1) 調査委員会

葛城市教育委員会は、学識経験者からなる「當麻寺二十五菩薩来迎会（練供養）調査委員会」を組織した。調査委員会は、調査の企画・立案や指導等を行うとともに、必要に応じて現地に赴き詳細調査を行った（委員の所属等は令和二年三月現在・会長と副会長以外は五十音順・敬称略）。

浦西 勉（会長）

元龍谷大学教授

吉井敏幸（副会長）

奈良県文化財保護審議会委員

阿部泰郎

元天理大学教授

神田雅章

葛城市博物館協議会委員

大東敬明

龍谷大学教授

田鍬智志

名古屋大学高等研究院客員教授

福原敏男

龍谷大学教授

福持昌之

國學院大学研究開発推進機構准教授

藤井健三

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授

船田淳一

武蔵大学教授

吉村旭輝

京都市文化市民局文化芸術都市推進室

森本仙介

文化財保護課技師

森本仙介

西陣織物館顧問

吉村旭輝

金城学院大学教授

森本仙介

和歌山大学・紀州経済史文化史研究所

森本仙介

特任准教授

森本仙介

奈良県地域振興部文化財保存課主査

(2) 調査員

當麻寺二十五菩薩来迎会関係のほか、調査委員会で選定された各地の二十五菩薩来迎会等について、現地調査を行った。調査員は民俗学・民俗芸能等を専門とする研究者等に委嘱した。

猪岡叶英 西宮市立郷土資料館  
上田喜江 安堵町歴史民俗資料館  
大西稔子 栗東歴史民俗博物館  
奥村晃代 京都造形芸術大学非常勤講師  
佐古田あい 元龍谷大学大学院文学研究科特別専攻生  
出口実紀 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター非常勤講師  
徳毛敦洋 周防大島文化交流センター(宮本常一記念館)  
平松典晃 帝塚山大学非常勤講師  
黛 友明 神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者  
村田幸子 長野県山形村教育委員会  
山本 潤 薬師寺宝物管理研究所  
川畑秀樹 写真家  
當麻 武 映像制作

(3) オブザーバー  
森本仙介 (同前)

(4) 指導  
金子 健 文化庁文化財第一課調査官(芸能部門)

(5) 事務局(葛城市教育委員会 歴史博物館)

[平成二十九年年度]

千賀 久 館長

田中慶治 館長補佐

神庭 滋 主査

吉岡昌信 主事

[平成三十年年度]

千賀 久 館長

田中慶治 館長補佐

神庭 滋 主査

吉岡昌信 主事

[令和元年度]

千賀 久 館長

田中慶治 館長補佐

勝眞由美 館長補佐

神庭 滋 館長補佐

吉岡昌信 嘱託職員

6 規約

當麻寺二十五菩薩来迎会(練供養) 調査委員会規約  
(設置)

第一条 當麻寺に伝承されている「當麻寺二十五菩薩来迎会(練供養)」(以下「練供養」という。)の保存伝承及び文化財指定のための調査を円滑に実施するため、當麻寺二十五菩薩来迎会(練供養) 調査委員会(以下「調査委員会」という。)を置く。この規約は、その組織及び運営に関し、必要な事項を定める

ものとする。

附則

この規約は、平成29年4月1日から施行する。

(所掌事項)

第二条 調査委員会は、次に掲げる事項を所掌する。

- (1) 調査の実施に係る必要な専門的助言に関すること。
- (2) 現地調査に関すること。
- (3) 報告書の執筆に関すること。
- (4) その他調査の実施について必要な事項に関すること。

(組織)

第三条 調査委員会は、委員11人以内で組織する。

1 調査を迅速かつ適切に実施するため、調査委員会に調査員を若干名を置くことができる。

2 委員及び調査員は、専門知識を有する者のうちから教育委員会が委嘱する。

3 委員及び調査員の任期は、委嘱の日から平成32年3月31日までとする。

(会長及び副会長)

第四条 調査委員会に、会長1名及び副会長1名を置き、委員の互選によりこれを定める。

2. 会長は、調査委員会を代表し、会務を総理する。

3. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第五条 調査委員会の会議は、会長が招集し、会長が長となる。

(庶務)

第六条 調査委員会の庶務は、教育委員会事務局において行う。

(その他)

第七条 この規約に定めるもののほかこの規約の実施に関し必要な事項は、調査委員会が別に定める。

當麻寺二十五菩薩來迎會  
(聖眾來迎練供養會式)  
調查報告書

発行日 令和2年(2020)3月31日  
編集・発行 葛城市教育委員会  
奈良県葛城市長尾85  
印刷 株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地